

吉岡下ノ段遺跡第14次  
吉岡原遺跡第14次

発掘調査報告書

2019

掛川市教育委員会





吉岡下ノ段遺跡第14次  
吉岡原遺跡第14次

発掘調査報告書

2019

掛川市教育委員会



# 例 言

- 1 本書は、平成28年度に現地調査を行い、平成29、30年度に整理調査を行った、吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査と、平成29年度に現地調査を行い、平成30年度に整理調査を行った、吉岡原遺跡第14次発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、茶園改植に伴う緊急発掘調査（吉岡下ノ段第14次）および個人住宅建築に伴う緊急発掘調査（吉岡原第14次）で、国および県の補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査に係る期間、担当は以下のとおりである。  
吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査  
確認調査 平成27年 3月20日～3月26日 大熊茂広  
本発掘調査 平成28年 7月28日～11月25日 夏目不比等  
吉岡原遺跡第14次発掘調査  
本発掘調査 平成29年 4月19日～6月9日 夏目不比等
- 4 発掘作業並びに整理作業には、以下の方々の参加を得た。（順不同）  
発掘作業 太田敏子 小笠原国重 鈴木良晴 寺沢巧 長尾秀雄 野中きみ子  
深田重男 藤田弘 藤田房幸 藤田理恵 松浦良和 溝口玉緒  
山崎富士男 山崎麻由美  
整理作業 榛葉豊子 早乙女のぞみ 徳川浩 竹田徳子 太田敏子 溝口玉緒  
山崎麻由美
- 5 報告書の作成にあたっては、公益社団法人大日本報徳社の松本一男氏と、浜松市在住の松井一明氏から御教示、御協力をいただいた。松本氏からは、吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査の「4まとめ」の玉稿を賜った。記して感謝の意を表したい。
- 6 本書の執筆、編集は、夏目不比等が行った。
- 7 調査によって得られた資料及び出土遺物は、掛川市教育委員会社会教育課が保管している。

# 凡 例

- 1 本書で用いる座標値は世界測地系に基づく。包囲は座標北とし、L = 標高である。
- 2 遺構の略番号は、以下のとおりである。  
SB：竪穴住居跡 SH：掘立柱建物跡 SP：小穴 SF：土坑 SD：溝  
SX：性格不明遺構
- 3 遺構番号は、現地調査時に呼称したものをそのまま使用した。
- 4 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

# 目 次

## 例言 凡例

### I はじめに

1 調査に至る経緯	1
2 遺跡の環境	1
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	2

### II 吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査

1 調査に至る経緯	9
2 調査の方法と経過	9
3 調査の成果	13
4 まとめ	43

### III 吉岡原遺跡第14次発掘調査

1 調査に至る経緯	47
2 調査の方法と経過	47
3 調査の成果	50
4 まとめ	60

# 挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡位置図	4
第2図 調査地点位置図	5

### 吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査

第3図 遺構全体図	11
第4図 SB01実測図	23
第5図 SB01エレベーション図、SB04実測図	24
第6図 SB05・SB06実測図	25
第7図 SB07実測図	26
第8図 SB07遺物出土状態図	27
第9図 SH08実測図	28
第10図 SH01実測図	29
第11図 SH02実測図	30
第12図 SH02エレベーション図	31

第13図	SP104・SP243・SP240実測図	32
第14図	出土遺物実測図（1）	33
第15図	出土遺物実測図（2）	34
第16図	出土遺物実測図（3）	35
第17図	出土遺物実測図（4）	36
第18図	出土遺物実測図（5）	37
第19図	出土遺物実測図（6）	38
第20図	出土遺物実測図（7）	39
第21図	出土遺物実測図（8）	40
第22図	出土遺物実測図（9）	41
第23図	出土遺物実測図（10）	42

#### 吉岡原遺跡第14次発掘調査

第24図	遺構全体図	49
第25図	SB01・SD02実測図	54
第26図	SD01エレベーション図、SD04実測図	55
第27図	SB02実測図	56
第28図	SH01実測図	57
第29図	出土遺物実測図（1）	58
第30図	出土遺物実測図（2）	59

## 写真図版目次

カラー図版1	上	吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査遠景（東から）
	下	吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査遠景（西から）
カラー図版2	上	吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査西半部完掘
	下	吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査東半部完掘
カラー図版3	上	吉岡原遺跡第14次発掘調査遠景（南から）
	下	吉岡原遺跡第14次発掘調査完掘（南から）

#### 吉岡下ノ段遺跡第11次発掘調査

図版1	上	前半 遺構検出状況
	下	SH01床等検出状況（北西から）
図版2	上	SB01（南から）
	下	SB04床検出状況（北から）
図版3	上	SB04（東から）
	下	SB05（西から）
図版4	上	SB06炉検出状況
	下	SB07・SF01（南から）

- 図版5 上 SB07土器出土状況（上層南から）  
下 SB07土器出土状況（下層南から）
- 図版6 上 SB08（東から）  
下 SB08遺物出土状態
- 図版7 上 SB08遺物出土状態  
下 SB08内SP287
- 図版8 上 SH01（東から）  
下 SH02（北から）
- 図版9 上 SH02（南西から）  
下 SH02内SP247土層断面（東から）
- 図版10 上 SH02内SP250土層断面（北から）  
下 SH02内SP259土層断面（南から）
- 図版11 上 SH02内SP260土層断面（西から）  
下 SP45遺物出土状態（東から）
- 図版12 上 SP104遺物出土状態（東から）  
下 SP224遺物出土状態
- 図版13 上 SP240遺物出土状態  
下 SP243土器出土状態
- 図版14 上 SX04土層断面（東から）  
下 A-2グリッド縄文土器出土状態
- 図版15 出土遺物（1）
- 図版16 出土遺物（2）
- 図版17 出土遺物（3）
- 図版18 出土遺物（4）
- 図版19 出土遺物（5）
- 図版20 出土遺物（6）
- 図版21 出土遺物（7）
- 図版22 出土遺物（8）
- 図版23 出土遺物（9）
- 図版24 出土遺物（10）
- 図版25 出土遺物（11）
- 図版26 出土遺物（12）
- 図版27 出土遺物（13）
- 図版28 出土遺物（14）

吉岡原遺跡第14次発掘調査

- 図版1 上 作業風景  
下 SB01、SD02（南から）
- 図版2 上 SB02検出状況  
下 SB02（東から）
- 図版3 上 SB02遺物出土状態（西から）  
下 SH01（北から）
- 図版4 出土遺物（1）
- 図版5 出土遺物（2）
- 図版6 出土遺物（3）





# I はじめに

## 1 調査に至る経緯

吉岡下ノ段遺跡と吉岡原遺跡が所在する和田岡地区は、江戸時代に茶の栽培が導入されて以来、茶生産が盛んな地区であり、台地上には広大な茶園が広がっている。茶生産者は年々減少の傾向にあるが、作業の機械化が進んでおり、一軒の農家で広大な茶園を効率よく経営する生産者もいる。とりわけ、乗用型摘採機の普及により、機械の使用に適した茶園にするため圃場の整理や、より良い品質の茶を生産するために茶樹の改植が行われる。近年の改植では、水はけを良くし、茶樹の根張りを良くし、茶樹にとってより多くの栄養などを摂取できるようにするため、深耕が行われる。深耕は、いわゆる「天地返し」と呼ばれ、地表から1m前後の深さまで掘り起こすために地中の遺跡が破壊される恐れが生じている。

また、一方で茶生産者の高齢化や後継者不足のため、茶生産規模の縮小、もしくは廃業し、茶園以外の目的に使用される土地も少なからず増加しており、住宅建築等の開発行為により遺跡が破壊される恐れも生じている。

このような、やむを得ず破壊される遺跡に対し、掛川市教育委員会では記録保存のための発掘調査を実施している。平成28年度には茶園の改植計画を受けて吉岡下ノ段遺跡内で、平成29年度には個人住宅建築の計画を受けて吉岡原遺跡内でそれぞれ1件の本発掘調査を実施した。

## 2 遺跡の環境

### (1) 地理的環境

掛川市は、静岡県西部地方（大井川以西）に位置し、東経138度線上にある。南に小笠山、東に牧之原台地に続く丘陵、北には赤石山系から連なる丘陵に囲まれ、その間に、原野谷川、逆川をはじめする中小河川が流れ、沖積平野の端には、開析された小さな谷が無数に入り込んでいる。

今回報告する吉岡下ノ段遺跡と吉岡原遺跡は、どちらも原野谷川が形成した和田岡原と呼ばれる河岸段丘上に位置する。この段丘は、原野谷川西岸を中心に発達し、流域北部の原泉、原田、原谷地区の段丘が小規模であるのに対し、和田岡地区では東西約1.2km、南北約2.2kmの広大な面積をもつ。

この段丘の形成は、第四紀洪積世に遡り、砂岩、頁岩の他に一部のシルト層を挟んで形成される。黒色又は暗褐色の表土（いわゆる“黒ボク”）の下には、地山である粘性を有した緻密な黄褐色土、もしくは円礫を含んだ黄褐色土が堆積しており、遺構はこの黄褐色土を掘り込んで築かれている。

和田岡原の河岸段丘上は、大きく分けて標高60m前後の吉岡原と呼ばれる上位段丘面と、標高40～50m前後の高田原と呼ばれる下位段丘面に区分され、どちらの段丘上にも数多くの遺跡が分布している。吉岡下ノ段遺跡と吉岡原遺跡は、下位段丘面に位置する。

### (2) 歴史的環境

ここでは、これまでの和田岡原での発掘調査成果から和田岡原における遺跡の動向を概観したい。

掛川市内で発見された最古の遺物は、溝ノ口遺跡・瀬戸山Ⅱ遺跡から出土した旧石器時代のスクレーパーである。遺構に伴うものではないため、詳細は不明であるが、市域においては数少ない旧石器時代の遺物として貴重である。

縄文時代になると、原野谷川や逆川などの河川に沿った低丘陵で集落が営まれていたことが判明し

ている。市内において縄文時代最古の遺物は、高田上ノ段遺跡で表採された槍先形尖頭器で、縄文時代草創期まで遡る可能性がある。市内最古の土器としては、和田岡原の瀬戸山遺跡・高田遺跡で出土した縄文時代早期の押型文土器である。中期にいたり遺構も見られるようになるが未だ少数で、中原遺跡・高田遺跡・今坂遺跡で、縄文時代中期の石囲い炉を伴う竪穴住居跡が発見されている。縄文時代後・晩期になると資料は減少し、この時期の詳細は明らかにされていない。

弥生時代の稲作浸透とともに、集落形成は河川沿いの低地に展開するようになる。その一方で縄文時代と同様に、低丘陵に占地する弥生時代の集落も多く、和田岡原においても弥生時代の遺跡が多く所在する。中期の資料は少ないが、今坂遺跡では中期の土器棺墓が、女高Ⅰ遺跡では竪穴住居跡、方形周溝墓が発見されている。弥生時代後期になると遺跡の数は爆発的に増加し、今坂遺跡・女高Ⅰ遺跡・溝ノ口遺跡・東原遺跡・吉岡原遺跡・高田遺跡など段丘縁辺部で多数の集落跡が発見されている。また、溝ノ口遺跡・今坂遺跡・高田遺跡・吉岡下ノ段遺跡では布掘りを持つ掘立柱建物跡が発見されており、竪穴住居だけでなく穀倉などの倉庫を伴った比較的規模の大きな集落が出現する。

古墳時代前期の遺跡は、弥生時代後期から継続する集落跡が多く、段丘内部へと集落形成が展開する。高田遺跡・瀬戸山Ⅰ遺跡等では一辺7m程の大型竪穴住居跡が発見されている。

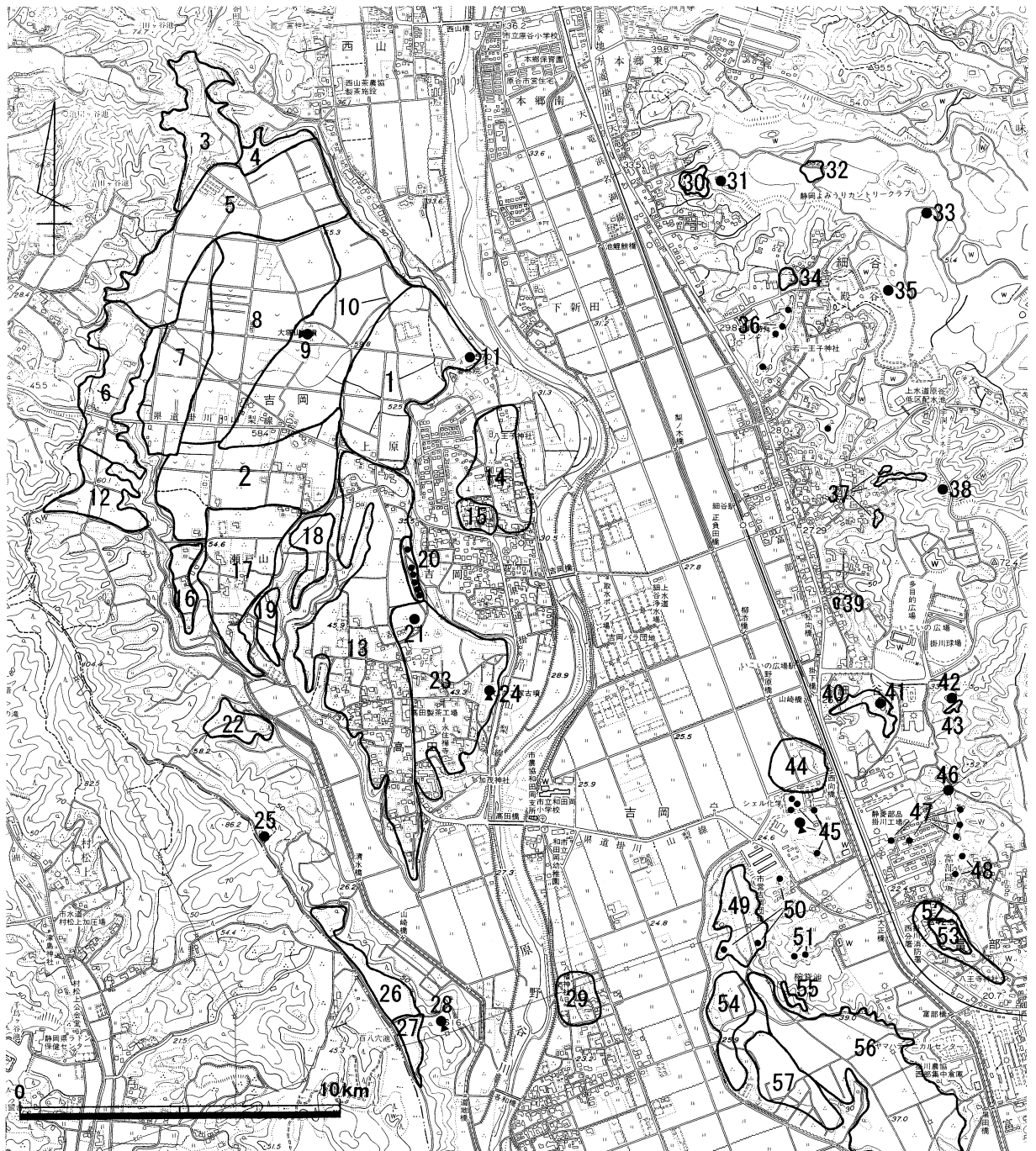
古墳時代中期には市内北部を中心に和田岡古墳群をはじめとして、大規模な墳丘を持つ古墳が造営される。一方、この時代の集落跡についてはこれまで遺構、遺物が少なく詳細は不明であったが、近年になって女高Ⅰ遺跡・高田遺跡で古墳時代中期の竪穴住居跡が発見されるなど、和田岡古墳群の造墓集団を考える上での資料も蓄積されつつある。また、高田遺跡では蛇行剣、鉄鐸、槍鉋、錐を伴う土坑墓、今坂遺跡では5mにも及ぶ大型の土坑墓が発見されており、和田岡古墳群との関係が注目される。

古墳時代後期以降の遺跡は激減、特に前代までの集落動向は不明であるが、高田上ノ段遺跡などでは6世紀前半に比定される円墳の周溝が発見されており、後期段階でも造墓はあったようであるが、前代に比してその数は圧倒的に少なくなる。

古代から近世にかけての様相は、古墳時代までに比して遺跡が少なく不明な点が多い。今坂遺跡・高田遺跡等などでは17世紀後半に比定される陶器が発見されており、和田岡原での近世集落の形成が遅くとも17世紀代に遡ると考えられるようになった。また、18世紀以降では、女高遺跡・高田遺跡において、土坑墓、茶毘跡、溝状遺構なども検出されており、近世資料も少しずつではあるが増えつつある。

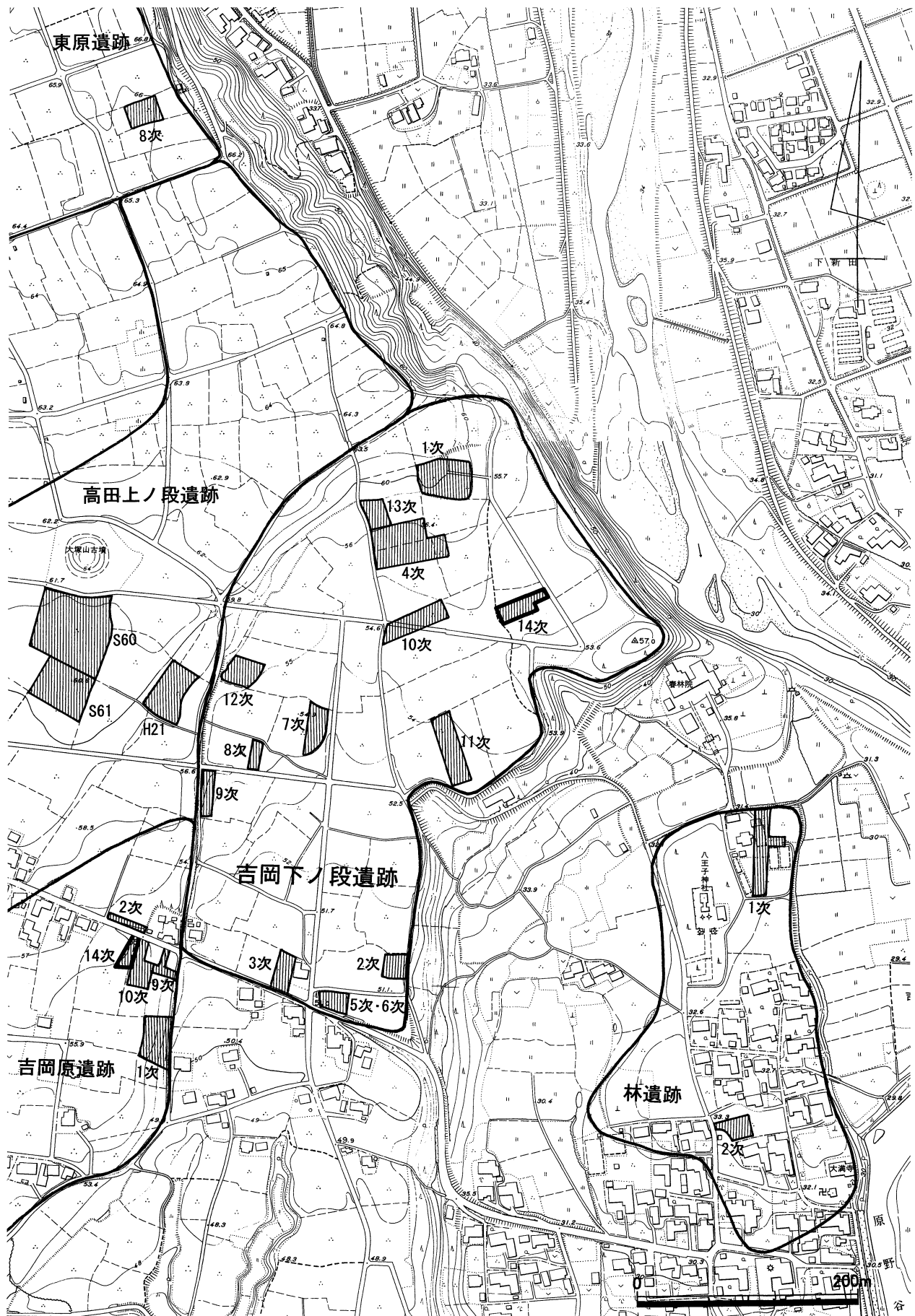
## 参考文献

- 掛川市 1997 『掛川市史 上巻』
- 掛川市 2000 『掛川市史 資料編 古代・中世』
- 掛川市教育委員会 2009 『今坂遺跡第6次調査 瀬戸山Ⅱ遺跡 高田遺跡第21次調査 発掘調査報告書』
- 掛川市教育委員会 2010 『瀬戸山Ⅰ遺跡第3次調査 古明遺跡 市内遺跡発掘調査報告書』
- 掛川市教育委員会 2011 『高田上ノ段遺跡発掘調査報告書』
- 掛川市教育委員会 2013 『幡鎌峯山遺跡 吉岡原遺跡第10次 高田遺跡第25次 発掘調査報告書』
- 掛川市教育委員会 2014 『林遺跡第2次 女高Ⅰ遺跡第15次 東原遺跡第8次発掘調査報告書』
- 掛川市教育委員会 2015 『高田遺跡第33次 第35次発掘調査報告書』
- 掛川市教育委員会 2017 『吉岡下ノ段遺跡第11次・第12次発掘調査報告書』



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	吉岡下ノ段	縄文・弥生・古墳・平安	20	東登口古墳群	古墳	39	基佐ヶ谷横穴群	古墳
2	吉岡原	縄文・弥生・古墳	21	行人塚古墳	古墳	40	山崎	弥生・古墳
3	西山城	中世	22	平田ヶ谷	縄文・弥生・古墳	41	山崎古墳	古墳
4	城ノ腰	弥生・古墳	23	女高Ⅰ	弥生・古墳	42	土橋古墳	古墳
5	東原	縄文・弥生・古墳	24	瓢塚古墳	古墳	43	土橋横穴群	古墳
6	今坂	弥生・古墳	25	高田古墳	古墳	44	高代山砦	中近世
7	溝ノ口	縄文・弥生・古墳	26	高田金鉢原	弥生	45	高代山古墳群	古墳
8	中原	縄文	27	各和金鉢原	弥生	46	土橋古墳	古墳
9	吉岡大塚古墳	弥生・古墳	28	各和金塚古墳	古墳	47	権田ヶ谷古墳群	古墳
10	高田上ノ段	古墳	29	各和氏館跡	中近世	48	枕田古墳群	古墳
11	春林院古墳	縄文・弥生・古墳	30	中氏館	中近世	49	岡津原Ⅰ	縄文・弥生
12	大向	古墳	31	中殿谷古墳	古墳	50	旗差古墳群	古墳
13	高田	縄文	32	高藤城	中近世	51	椀貸古墳群	古墳
14	林	弥生・古墳・平安・中近世	33	冷池古墳	古墳	52	二反田	弥生
15	西村	古墳・奈良	34	殿ノ台	弥生	53	富部城跡	中近世
16	瀬戸山Ⅱ	縄文・弥生・古墳	35	穴ノ台古墳	古墳	54	岡津原Ⅱ	縄文
17	瀬戸山Ⅰ	縄文・弥生・古墳	36	若一王子神社古墳	古墳	55	椀貸横穴群	古墳
18	花ノ腰	弥生・古墳	37	堂前横穴群	古墳	56	岡津原Ⅲ	縄文・弥生・古墳
19	瀬戸山Ⅲ	弥生・古墳	38	堂前古墳	古墳	57	岡津原Ⅳ	弥生・古墳

第1図 周辺遺跡位置図



第2図 調査地点位置図 (昭和50年代)



# 吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査





## Ⅱ 吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査

### 1 調査に至る経緯

平成26年度に吉岡下ノ段遺跡内の茶園耕作者から同遺跡内において、茶園改植計画の情報が寄せられた。協議後、平成27年3月20日から26日までの5日間をかけ、確認調査を実施した。確認調査では住居跡、溝状遺構の一部や小穴が検出され、弥生土器片や土師器片も出土し、地下に遺跡があることが確実となった。

耕作者と遺跡保存のための協議を行った結果、遺構面から保護層を設けての改植は困難であるとの結論に達したため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

平成28年4月20日付けで耕作者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出書」を掛川市教育委員会から静岡県教育委員会に平成28年4月21日付けで進達した。これに対し、平成28年4月28日付けで、県教育委員会から耕作者宛に本発掘調査実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」が通知された。

### 2 調査の方法と経過

今回の調査対象地は、改植計画範囲905㎡とし発掘調査を実施した。調査で生じる排土を置く場所を確保するため、調査区を東西の2区画に分割し、調査は西半部から実施し、東半部を排土置き場とした。反転後は西半部を排土置き場とし、東半部の調査を実施した。

調査区は地形に合わせ、5m方眼のグリッドを設定し、実測、遺物取り上げの基準とした。グリッドは南北方向を南から北へA、B、C…とアルファベットで、東西方向は西から東へ1、2、3…と数字で表した。それらを組み合わせ、B-2区、C-3区等と呼称し、グリッド南西隅の杭にグリッド名を付した。調査地点を国家座標で記録するため、基準点測量を業者に委託し、実施した。

調査は平成28年7月28日から開始し、9月27日まで西半部の調査を行い、10月4～5日まで反転を行い、10月6日から11月14日まで東半部の調査を実施した。

#### 茶樹粉碎

重機掘削に先立ち、トラクター1台を借上げ、茶樹粉碎を行った。

#### 重機掘削

バックホウ1台、クローラードンプ1台を借上げ、不要な耕作土の除去を実施した。西半部の掘削を2日間、反転及び東半部の掘削を3日間かけ行った。また、調査終了後の埋め戻しも重機を用いて実施している。

#### 遺構検出

重機による掘削後は、鍬、鋤簾を使用し人力で粗掘りを行った。5～10cm程度掘り下げた後、鋤簾で丁寧に土を削り遺構を検出した。

#### 遺構掘削

検出された遺構は、移植ゴテ、竹ベラなどを使用して掘り下げた。遺構同士の切合い関係や土の堆積状況を確認するため、ベルトやサブトレンチを適宜設定し観察を行った。

### 遺構実測

遺構の実測は、遺構平面図や土層断面図は縮尺1/20で作成し、遺物出土状態図や微細図は、縮尺1/10で作成した。

### 写真撮影

現地調査での記録写真は、6×7判カメラ1台（ブローニーモノクロ用）、35mm判カメラ2台（カラーネガ、カラーリバーサル用）、デジタルカメラ1台を使用し撮影した。調査区の全景写真及び遺構の垂直写真は業者に委託し、ラジコンヘリコプターを使用し撮影した。

### 夏休み文化財教室

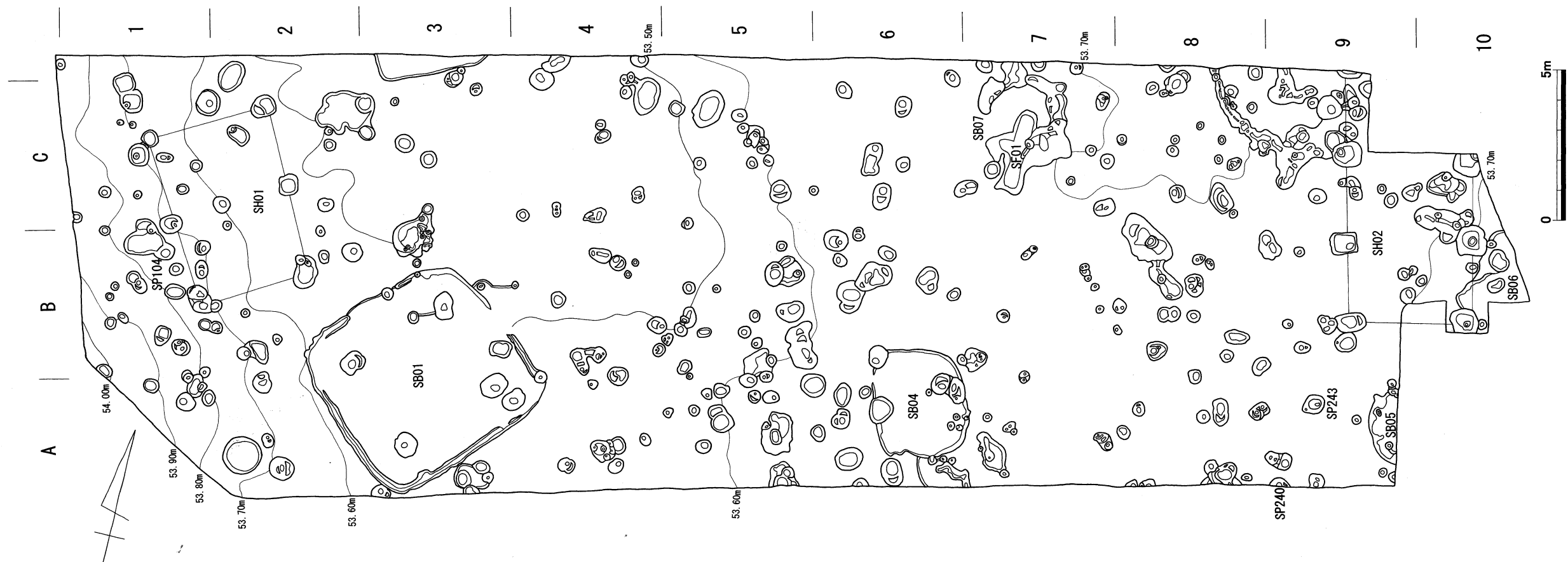
夏休みに市内の小中学生とその保護者を対象に発掘体験を平成28年8月6日に実施した。午前と午後に1回ずつ体験を行い、18組46名が参加した。

### 現地説明会

市民向けの現地説明会を平成28年11月23日に開催した。午前と午後に1回ずつ説明会を行い、23名の参加があった。

### 整理作業

出土した土器は水洗いした後、脆くなっているものについてはバインダー液を含浸させ強化した。土器本体に注記を行った上で、接合、復元し、実測図を作成した。現地調査で作成した図面は整理し、報告書作成用に編集、清書した。遺物の写真撮影を行い、報告を原稿にまとめ印刷に付した。



第3図 遺構全体図

### 3 調査の成果

#### (1) 遺構

竪穴住居跡、掘立柱建物跡、小穴、土坑などが検出された。

##### ① 竪穴住居跡 (SB)

竪穴住居跡は明瞭な竪穴として認知できる遺構の他、炉跡や床の残存状況、遺物の出土の様子などから住居と想定されるものも含め5軒確認された。

##### SB01 (第4図、第5図)

A・B-2～4区にて検出された。平面形は、一辺が約6m四方の隅丸方形を呈し、主軸方位は、N-45°-Wを測る。

5～15cmの厚さの黒褐色土で覆われており、南側の遺存状況は比較的良好であったが、北に行くほど深部まで攪乱を受けていた。炉跡は検出されず、遺構の精査時に床面と思しき堅化面が複数カ所検出された。さらに堅化面を含む土を除去したところ、その下から4箇所の支柱穴が検出された。竪穴の壁際には周溝が巡らされており、北東辺において途切れているが、全周していた可能性が高い。

支柱穴はSP163・161・162・160で、柱穴間の芯心での距離はSP163・161間で3.60m、SP162・160間で3.55m、SP163・162間で3.25m、SP161・160間で3.25mを測り、南西から北東方向に若干長い長方形を呈す。

出土遺物から古墳時代前期に比定できる。

##### SB04 (第5図)

A・B-6区にて検出された。平面形は、長軸方向で3.65m、短軸方向で3.30mを測る歪な楕円形を呈す。

支柱穴は検出されていないが、住居跡中央付近で炉跡が、北北西の端にかけて焼土の広がり確認された。炉跡は長軸0.35cmを測る楕円形を呈す皿状の堅化面をもつ。住居跡内の南南東では、床面と思われる堅化面が散在的に検出された。

出土遺物から古墳時代前期に比定できる。

##### SB05 (第6図)

A-9区にて検出された。平面形は楕円形を呈するものと考えられるが、およそ2/3が調査区外に伸びているため、詳細は不明である。主軸の方位は推定でN-31°-Wを測る。長軸方向に約2.5m、短軸方向は約2mと推測され、範囲内で直径0.15～0.2m大の小穴が2基検出されており、柱穴と考えられる。

出土遺物が少なく時期比定は困難であるが、弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。

##### SB06 (第6図)

B-10区、調査区の東端で検出された。竪穴住居跡の北西の辺に相当すると考えられる。平面形は明確ではないが、掘り方が南西部分ではほぼ直角に折れているため、方形を呈すものと考えられる。

調査区の壁際で炉跡が検出されている。炉跡は直径0.5m程の円形の皿状を呈す。

検出範囲が狭く遺物も流れ込みが多いため時期比定は困難であるが、弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。

#### SB07 (第7図、第8図、第14図)

C-7区を中心に検出された。現地では平面形状を確認できていないが、C-6・7区では縄文土器片が比較的まとまって出土しており、その出土状況と円形状に展開する小穴の配置状況を勘案すると、縄文時代の住居跡と考えられる。後世のSF01の掘削により一部を失っており、住居の規模は明確にし得ないが、SP188・189・203・204・207・209・210・268などが住居に関連する小穴と考えられ、その配置から直径約7mの円形の住居跡と考えられる。

出土遺物から縄文時代中期後葉に比定できる。

#### SB08 (第9図、第14図、第15図)

C-8・9区内にて検出された。SB07と同じく、縄文土器の出土状況と、柱穴と考えられる小穴の配置状況から縄文時代の竪穴住居跡と判断した。住居跡は北側調査区外に及び、平面形は明確でないが、縄文土器や石器が集中する範囲、矩形配置が想定される小穴 (SP226・272・279)、さらに弧を描くような壁溝状の溝跡が検出されていることから、上記小穴を支柱穴とする円形の竪穴住居跡が想定される。

出土遺物から縄文時代中期後葉に比定できる。

### ② 掘立柱建物跡 (SH)

#### SH01 (第10図)

B・C-1・2区にて検出された。柱間は梁間1間、桁行2間で、SP9・10・24・25・46・60で構成される。SP間の芯心での距離はSP9・24間で4.05m、SP46・60間で3.64m、SP9・10・46間で6.02m、SP24・25・60間で5.96mを測る。主軸の方向は、N-30°-Wを測る。

出土遺物から弥生時代後期に比定できる。

#### SH02 (第11図、第12図)

B・C-9・10区、D-9区にて検出された。北側は調査区外に伸びている。SP247・250・254・259・260・271・277から構成される建物跡である。SP271の対になる柱穴は調査区外に位置し、さらに伸びる可能性も否定できないが、梁間の柱穴間の距離は3.95m、桁行の柱穴間の距離は約8.7mを測る、梁間1間、桁行3間の建物跡と考えられる。

出土遺物から弥生時代後期に比定できる。

### ③ 土坑 (SF)

#### SF01 (第7図、第19図)

C-7区にて検出され、SB07と切り合い関係にある。規模は長軸で2.80m、短軸は推定で0.7mを測る。平面形は北端が南端に比べ狭く、細長い台形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは南端で0.43m、北端で0.31mを測り、北に向かうに従い浅くなっている。第19図80~89が出土している。

出土遺物から弥生時代後期に比定できる。

#### ④ 小穴 (SP)

小穴は数多く検出されているが、遺物が出土し、出土状態が図化できたものを記載する。

##### SP104 (第13図、第17図)

B-1区にて検出された。隣接する小穴と切り合い一部欠損しているが、平面形は一辺0.6mの隅丸方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは最深で0.5mを測る。第17図42・44・49が出土している。

出土遺物から古墳時代前期に比定できる。

##### SP243 (第13図、第19図)

A-9区にて検出された。平面形は歪な楕円形を呈し、長軸で0.81m、短軸で0.65mを測る。検出面からの深さは、最深で0.28mである。第19図73～75が出土している。

出土遺物から古墳時代前期に比定できる。

##### SP240 (第13図、第19図)

A-9区から検出された。小穴の南半分は調査区外に続いているため、平面形の詳細は不明だが、長軸方向が約0.7m、短軸方向で約0.6mの楕円形を呈するものと考えられる。第19図70が出土している。

出土遺物から古墳時代前期に比定できる。

## (2) 遺物 (第14~23図)

1~6は、SB01出土である。

1は縄文土器深鉢底部付近の破片で、棒状工具による沈線、縄文が施されている。縄文施文部分は、施文後ナデ消しが行われている。

2は縄文施文の深鉢土器の胴部片である。

3は土師器台付甕の接合部破片で、外面はハケ目調整が施され、内面はナデ調整が施されている。底部と台部の接合部分には接着をより強固にするため、強く押し付けた跡が残る。

4は土師器壺頸部の破片で、外面には摩滅しているがハケ目調整が認められる。内面は強めのナデ調整が施され、指頭圧痕が残る。

5は土師器高坏脚部の破片で、外面にはミガキが施され、内面にハケ目調整が施されている。

6は土師器器台脚部の破片で、円窓が施されている。破片のため詳細は不明だが、残存している円窓の間隔などから四方透かしと考えられる。

7~14はSB04出土である。

7は縄文土器深鉢の破片で、口縁部に近い部位の破片と考えられる。貼付隆帯に円形貼付文が施されている。

8は土師器複合口縁壺の口縁部片で、外面はナデ調整の後、棒状浮文が貼り付けられている。内側は摩滅しており、詳細は不明である。

9は土師器S字状口縁甕の口縁部片で、内外面共にナデ調整が施されている。

10は弥生土器高坏の口縁部片で、口唇部に刻み目が施されている。

11は土師器高坏の坏部片で、推定口径は14.5cmを測り、内面にミガキ調整が認められる。

12は土師器高坏口縁部片で、内外面ともにナデ調整が施され、外面には赤彩が認められる。

13は縄文土器深鉢口縁部片である。内面にはナデ調整が施されている。外面には棒状工具による沈線、交互刺突文が施され、波状隆帯が付けられている。

14は土師器台付甕脚部片で、推定底径6.0cmである。外面にはハケ目調整が施されている。

15~18は、SB07出土である。

15は縄文土器深鉢の口縁部から胴部片で、底部付近が欠損している、口径19.0cm、最大径21.0cmを測る。胎土はややザラザラした感触で、長石のような白色の砂粒を含む。口縁部周辺は半裁竹管状工具による地文を施文した後、口唇部にも同様の半裁竹管状工具による平行沈線を施す。その後、棒状工具により交互刺突を行い、波状文を表現している。その下部に並行沈線による大きな波状文を施文している。同様に胴部にも半裁竹管状工具による平行沈線の懸垂文を施文し、その後半裁竹管状工具による大きな波状文を施している。

16は縄文土器平口縁の深鉢の口縁部から胴部片で、胴部下半から底部にかけて欠損している。口径24.5cm、最大径26.5cmを測る。土器全体に細かい縄文を施文した後、口縁部にはヘラ状工具による刺突が施され、その後大きな連弧文が施されている。その下には細かい櫛状工具により横方向の平行沈線が施されている。

17は縄文土器深鉢胴部の破片である。地文を施文後、ナデにより無文化されており、地文の詳細は不明である。

18は縄文土器深鉢口縁部片である。胎土はややザラザラした感触で、長石のような白色の砂粒を少量含んでいる。口唇部まで口縁部縄文が施文されている。

19~28は、SB08出土である。

19は縄文土器平縁口縁部文様帯を持つ深鉢の口縁部の破片で、SP275から出土した。口径は推定で27.4cmを測り、赤黄褐色の胎土で長石などの砂粒を含み、薄手に作られている。口縁部に縄文を施文後、隆帯を貼り付け、渦巻文を施文している。ヘラ状工具により沈線で区画されている。頸部は無文である。外面には煤が付着している。

20・21は19と同一個体の破片である。

22は縄文土器深鉢の胴部で、SP270から出土した。暗褐色の胎土で長石等の砂粒を含み薄手に作られている。地紋に細かい縄文を施文した後、棒状工具により縦方向の沈線、蛇行懸垂文が施されている。

23は縄文土器深鉢の胴部破片で、SP270から出土した。褐色の胎土で、外面に煤が付着している。半裁竹管状工具による沈線文を縦方向に施文している。

24は石皿で、SP287から出土した。縦18.9cm、横14.8cm、厚さ4.5cmを測る。平滑な形状の砂岩質の石で、両面とも使用されている。一部欠損があり、全体の形状は不明である。

25は石皿の破片で、SP270から出土した。縦12.0cm、横9.1cm、厚さは8.7cmを測るが、全体の形状は不明である。砂岩質の石で、ずっしりと重い。

26は磨り石で、25の石皿とともにSP270から出土した。石材は花崗岩で、半分に分割されて出土した。長径11.6cm、短径10.1cm、厚さは6.1cmである。

27は石匙で、SP279付近で出土した。長さ9.3cm、幅9.2cm、厚さ1.8cmである。刃部に使用痕が認められる。

28は磨製石斧刃部片で、27の石匙とともにSP279付近で出土した。残存部分の長さ10.7cm、幅5.2cm、厚さ3.4cmである。刃部の両面に使用痕が認められる。

29～33は、SH01出土である。

29は弥生土器折り返し口縁壺の口縁部片で、SP60から出土した。摩滅が著しいが、内外面ともにハケ目調整の痕跡が認められる。

30は弥生土器壺の胴部片で、SP46から出土している。表面の摩滅が著しいが、櫛状工具による扇状文の痕跡が認められる。

31は土師器高坏の坏下半部から接合部にかけての破片で、SP10から出土した。坏部は内外面ともにミガキが施されている。脚部の内面にはナデ調整が施されている。

32は土師器高坏の脚部片で、31と同じくSP10から出土した。表面は摩滅しているが、ミガキの痕跡が認められる。内面は絞り目状になるようにナデ調整が施されている。

33は剣型石製品で、SP46から出土した。穿孔されている。先端が欠損しているため、全長は不明である。残存長は縦2.3cm、横2.1cm、厚さ0.4cm、孔の直径は0.2cmを測る。

34～41は、SH02出土である。

34は弥生土器台付甕の接合部片で、SP259から出土した。外面にはハケ目調整が施されている。底部の内面にはヘラ状工具により削られており、台部内面にはナデ調整が施されている。

35は弥生土器壺口縁部の破片で、SP260から出土した。推定口径は14.2cmである。外面に縦方向のハケ目調整、口唇部内面には横方向のハケ目調整が施されている。

36は弥生土器壺の底部で、SP254から出土した。底径は5.9cm、摩滅が著しく調整の詳細は不明である。

37は弥生土器壺頸部から胴部にかけての破片で、SP250から出土した。頸部付近には磨き調整が施され、その下に沈線が引かれ、その下には櫛状工具の刺突による羽状文が施されている。



38は弥生土器壺底部片で、SP254から出土した。底径は4.4cmである。外面は摩滅しているが、ミガキ調整の痕跡が認められる。内面にはナデ調整が施されている。

39は弥生土器折返し口縁壺の口縁部片で、SP271から出土した。口縁部内面には縄文が施文され、口唇部にはキザミが施されている。外面は摩滅しており調整の詳細は不明である。

40は弥生土器壺の底部片で、SP259から出土した。底径は7.1cmである。摩滅、剥離などで調整の詳細は不明。

41は弥生土器高坏の接合部片で、SP247から出土した。摩滅が著しく調整の詳細は不明だが、接合部分に粘土帯が貼り付けられている。

42・44・49は、SP104出土である。

42は土師器S字状口縁甕の口縁部片で、推定口径13.6cm、推定底径5.6cmである。内外面ともにナデ調整が施されている。

44は土師器台付甕で、口縁部と台部の下端を欠損している。器径は24.8cmを測る。内外面ともにハケ目調整が施されている。

49は土師器高坏の坏部で、推定口径15.8cmである。表面、内面ともにミガキ調整が施されている。

70はSP240出土の土師器甕の口縁部から胴部片で、推定口径は16.4cm、推定器径は18.3cmである。摩滅が著しく、調整の詳細は不明である。

73～75は、SP243出土である。

73は土師器甕胴部片で、推定器径は21.7cmである。外面にはハケ目調整が、内面にはナデ調整が施されている。

74は土師器台付甕の台部で、底形は9.0cmである。摩滅が著しく調整の詳細は不明だが、外面にはハケ目調整、内面にはナデ調整の痕跡が認められる。

75は土師器壺の頸部から胴部片で、器径は21.8cmである。表面の頸部から胴部上半にかけてハケ目調整、胴部下半にはミガキが施されている。頸部内面はナデ調整が施され、同部内面はハケ目調整が施されている。

その他、遺構外出土遺物を以下に記載する。

43は土師器台付甕で、台部が欠損している。口径は14.8cm、器径は18.4cmを測る。外面と口縁部内面にはハケ目調整が施され、胴部内面はハケ目の後ナデ調整が施されている。

45は縄文土器深鉢の底部で、推定底径は11.4cmである。長石等の砂粒を含む赤黄褐色の胎土で、比較的厚手に作られている。

46は弥生土器甕胴部片で、扇状文と縄文が施文されている。

47は弥生土器折返し口縁壺の口縁部の破片で、口唇部にキザミ目が施され、内面には櫛状工具の刺突による施文が施されている。

48は弥生土器壺の口縁部片で、口唇部にキザミ目が施されている。

50は弥生土器複合口縁壺の口縁部片で、推定口径23.0cmである。口縁部表面に櫛状工具の刺突による施文が施されている。

51は弥生土器折返し口縁壺の口縁部片で、口唇部にキザミ目、内面に縄文が施文されている。

52は土師器壺の口縁部片で、推定口径16.6cmである。摩滅により調整等は不明。

53は土師器高坏の坏部片で、推定口径14.0cmである。摩滅により調整等は不明。

54は土師器壺胴部片で、表面にハケ目調整が施されている。

55は土師器S字状口縁甕の口縁部で、推定口径15.8cmである。

- 56は土師器高坏の坏部で、推定口径15.5cmである。内外面ともにミガキが施されている。外面には赤彩が認められる。
- 57は弥生土器壺底部片で、推定底径12.4cmである。
- 58は弥生土器甕もしくは高坏の接合部である。
- 59は土師器壺口縁部片で、推定口径12.8cm、内外面ともに摩滅している。
- 60は縄文土器深鉢の頸部から胴部にかけての破片である。暗褐色の胎土で、長石を少量含んでいる。頸部には粘土紐貼り付けによる縄文が施文され、同部は半裁竹管状工具による縦方向の沈線により区画され、縄文が施文されている。沈線による逆丁字文も施されている。
- 61は弥生土器壺頸部片で、表面に櫛状工具の刺突による羽状文が施されている。
- 62は縄文土器深鉢頸部片で、赤褐色の胎土で長石等を含んでいる。半裁竹管状工具を引き、平行沈線文を施している。
- 63は弥生土器甕口縁部から胴部片で、外面はハケ目調整が施され、口縁部は横ナデされる。内面はナデ調整が施されている。
- 64は弥生土器壺口縁部片で、推定口径12.4cmである。内外面ともにナデ調整が施されている。
- 65は縄文土器深鉢胴部片で、暗褐色の胎土で堅緻である。沈線により区画され、地文に縄文が施され、結節縄文押圧によるS字状文が施されている。
- 66は弥生土器台付甕台部で、底径は10.0cmである。外面はハケ目調整が施され、内面は摩滅している。
- 67は土師器高坏の坏部で、推定口径11.3cm、内外面ともにミガキが施されている。
- 68は弥生土器高坏接合部で、全体に摩滅しており調整の詳細は不明。
- 69は弥生土器壺で、胴部上半及び底部を欠損している。推定口径は18.0cm、推定器径は23.6cmである。口縁部の内外面ともに細かいハケ目調整が施されている。胴部はナデ調整が施されている。
- 71は縄文土器深鉢胴部片で、暗褐色の胎土で堅緻である。低い隆帯が作られその上にヘラ状工具による刻み文が施されている。地文に縄文が施され、結節縄文押圧によるS字状文が施されている。
- 72は縄文土器深鉢口縁部文様帯の破片で、粘土紐による隆帯が貼り付けられている。黄褐色の胎土である。
- 76は弥生土器壺底部片で、底径は7.4cmである。外面は摩滅しており、内面にはハケ目調整が施されている。
- 77は弥生土器台付甕の接合部で、摩滅のため調整等は不明。
- 78は弥生土器壺の底部片で、底径は5.2cmである。摩滅のため調整等は不明。
- 79は弥生土器高坏の接合部で、外面はミガキ調整が施され、内面はハケ目調整が施されている。
- 80～89は、SF01出土である。
- 80は弥生土器台付甕の接合部で、摩滅しているが、ハケ目調整の痕跡が認められる。
- 81は弥生土器折返し口縁壺の口縁部片で、口縁内面にミガキ調整が認められ、口唇部にキザミ目が施されている。
- 82は縄文土器浅鉢口縁部片で、赤褐色の堅緻な胎土である。半裁竹管状工具による押し引き文が施されている。
- 83は弥生土器壺頸部片で、胴部内面はナデ調整が施されており、指頭圧痕が認められる。
- 84は弥生土器壺胴部片で、外面は結節縄文により施文されている。内面にはナデ調整が施されている。

85は弥生土器壺胴部片で、外面には櫛状工具の刺突による羽状文が施されている。

86は弥生土器壺胴部片で、外面に赤彩が施されている。

87は縄文土器深鉢底部片で、底径は10.3cmである。赤黄褐色の胎土で、長石等の砂粒を含む。

88は弥生土器壺底部片で、底径は7.6cmである。外面にミガキ調整、内面にナデ調整が施されている。

89は弥生土器高坏脚部の破片で、推定底径10.4cmである。円窓があり、内外面ともにハケ目調整が施されている。

90は弥生土器壺口縁部片で、C-2・3区内検出の性格不明遺構の中から出土した。内外面にハケ目調整が施されている。

91～93はD-4区で検出された不定形の小穴から出土した。

91は土師器高坏の坏部片で、推定口径は19.0cmである。外面にはミガキ調整、内面にはナデ調整が施されている。

92は土師器台付甕台部片で、推定底径は9.4cmである。外面にハケ目調整、内面にナデ調整が施されている。

93は土師器高坏脚部の破片で、底径は11.0cmである。外面にミガキ調整、内面にはハケ目調整が施されている。

94～96はC-5区の不規則形の小穴の中から出土している。

94は砂岩質の石で作られた石錘である。長径7.7cm、短径5.4cm、厚さ1.1cmを測る。

95は縄文土器深鉢の口縁部片である。胎土は赤褐色で堅緻、長石の砂粒を含む。沈線による区画が認められる。

96は縄文土器深鉢胴部片である。外面に縄文が施文されている。灰褐色の胎土で薄手に作られている。

97～126はグリッド一括で取り上げた遺物である。

97縄文土器深鉢胴部片で、A-6区から出土した。胎土は黄褐色で堅緻、砂粒を少量含む。地文に縄文が施され、半裁竹管状工具による縦方向の沈線、太めの棒状工具による波状沈線が施されている。

98は縄文土器深鉢底部片で、A-2区から出土した。胎土は赤褐色で堅緻、ずっしりと重く、焼成も良好である。底径11.0cmを測り、地文に縄文が施され、防除工具による縦方向の沈線が施されている。

99は磨石状石器で、A-8区から出土した。直径9.3cm、厚さは7.3cmを測る。表面は良く研磨されており球状を呈していることから磨石状とした。

100は弥生土器甕口縁部片で、A-6区から出土した。口唇部にキザミ目が施されている。外面には赤彩が施されている。

101は縄文土器深鉢底部片で、B-9区から出土した。底径は6.0cmを測り、胎土は赤黄褐色で堅緻、焼成も良好で、長石等の砂粒を含む。

102は弥生土器高坏脚部片で、B-6区から出土した。底径は5.4cmを測る。摩滅しているが外面にハケ目調整の痕跡が認められる。内面にはナデ調整が施されている。

103はA-4区から出土した石器で、直径約8.0cm、厚さ2.0cmを測る。石器は図上での上下が潰れている。円盤状を呈しており、両面は磨られている。石錘とも磨石とも断言できないため、円盤状石器としたい。

104は石錘状石器でB-7区から出土した。長径9.5cm、短径7.5cm、厚さ4.2cmを測り、平面小判状

をしている。上下端に打ち欠いた痕跡がないため石錘状とした。

105～113は、C-9区からの出土である。

105は縄文土器波状口縁深鉢の口縁部片である。胎土は赤褐色で堅緻、焼成は良好である。地文の縄文は施文後にナデられている。沈線が施文されている。

106は縄文土器深鉢胴部片である。胎土は赤黄褐色で、焼成は良好、地文に縄文を施文した後、半裁竹管状工具による平行沈線文が施されている。

107は縄文土器深鉢胴部片である。胎土は赤褐色、焼成は良好、縄文の地文に半裁竹管状工具による浅い平行沈線、結節縄文が施文されている。

108は縄文土器波状口縁深鉢の口縁部片である。胎土は赤褐色で、砂粒を含む。薄手に作られており、焼成は良好で堅緻である。連続爪形文が三条施されている。

109は縄文土器深鉢の胴部片である。胎土は赤褐色で砂粒を多く含み、ザラザラしている。地文は擦消縄文、縦方向の沈線により区画されている。

110は縄文土器深鉢の頸部から胴部片である。胎土は赤黄褐色で堅緻、焼成は良好である。頸部には貼付隆帯に竹管状工具による刺突文が施されている。胴部には縄文の施文後、浅い沈線による区画文が施されている。

111は縄文土器深鉢口縁部片である。胎土は赤褐色で、薄手に作られ、焼成は良好で堅緻である。連続爪形文、半裁竹管状工具による連続刺突文が施されている。108と同一個体と考えられる。

112は縄文土器深鉢胴部片である。胎土は黄褐色で緻密、焼成は良好で薄手に作られている。半裁竹管状工具による平行沈線文、連弧文が施され、交点には渦巻文が施されている。外面に煤が付着している。

113は縄文土器深鉢底部片である。胎土は赤褐色、焼成は良好である。

114～116は、C-10区からの出土である。

114は縄文土器深鉢胴部片で、胎土は赤褐色で砂粒を含み、ザラザラしている。焼成は良好である。結節縄文、半裁竹管状工具による並行沈線文が施されている。

115は縄文土器深鉢底部付近の破片で、胎土は赤褐色で砂粒を含む。焼成は良好である。結節縄文、半裁竹管状工具による並行沈線文が施されている。

116は縄文土器深鉢頸部片で、胎土は赤褐色で砂粒を多く含み少々ザラザラしている。粘土貼付けによる隆帯が施されている。

117～122は、C-9区からの出土である。

117は弥生土器台付甕の接合部で、表面にハケ目調整が施されている。

118は弥生土器壺肩部片で、櫛状工具の刺突による羽状文が施されている。

119は弥生土器壺肩部片で、櫛状工具の刺突による羽状文が施されている。

120は土師器高坏の接合部で、摩滅のため調整は不明。

121は土師器甕の口縁部から胴部片で、口径は11.8cm、器径は12.8cmである。外面にハケ目調整が施されている。

122は弥生土器壺底部片で、底径は8.8cmである。外面はハケ目調整の後、ナデられている。

123は土師器甕口縁部から胴部片で、D-2区から出土した。口径は23.0cm、外面にハケ目調整が施されている。

124は弥生土器台付甕の接合部片で、D-3区から出土した。外面は摩滅している。台部内面にハケ目調整が施されている。

125は土師器高坏の坏部片で、D-2区から出土した。推定口径は14.6cmで、内外面ともにナデ調整が施されている。

126はD-2区から出土した、甕と思われる底部片である。底径は9.0cm、底部に糸切り痕が残る。

127~149は、重機による表土削除の際に出土した遺物である。

127は縄文土器深鉢胴部片で、胎土は赤褐色で砂粒を含み焼成は良好である。地文に縄文が施文され、波状文などが隆帯貼り付けで施されている。

128は縄文土器深鉢胴部片で、胎土は赤褐色で焼成は良好である。地文はなく粘土紐貼付けの流体が施されている。

129は弥生土器壺頸部片で、節縄文が施されている。

130は縄文土器深鉢の胴部片で、胎土は赤褐色で砂粒を含みややザラザラつき、焼成は良好である。縄文の施文後、半裁竹管状工具による縦方向の沈線文、連続S字状刺突文が施されている。

131は弥生土器壺胴部片で、外面には交互に方向を変えた縄文が施文されている。

132は弥生土器台付甕の接合部片で、外面にハケ目調整が施されている。

133は弥生土器高坏脚部片で、摩滅しているが、脚部内面にシボリ目状の痕跡が確認できる。

134は土師器甕口縁部から胴部上半片で、推定口径12.0cm、推定器径17.0cmである。口縁部にはナデ調整が施され、胴部はハケ目調整が施されている。

135は土師器壺の底部と思われる破片である。

136は土師器小型壺胴部から底部片である。内外面にヘラによる磨きが施される。

137は土師器壺底部片で、ヘラ磨きが施される。

138は土師器高坏脚部片で、外面にはミガキ調整が施される。

139は土師器高坏の接合部片で、摩滅のため調整等は不明。

140は土師器高坏脚部片で、円窓があり、ハケ目とその後のミガキ調整が認められる。

141・142は土師器高坏脚部片で、肉厚の棒状を呈す。摩滅のため調整等は不明。

143は灰釉陶器碗で、推定口径13.0cm、推定底径7.4cmである。

144は山茶碗で、口径11.4cm、底径5.0cmを測る。

145は須恵器長頸壺の口縁部片で、推定口径10.2cmを測る。自然釉が認められる。

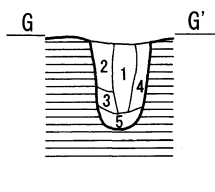
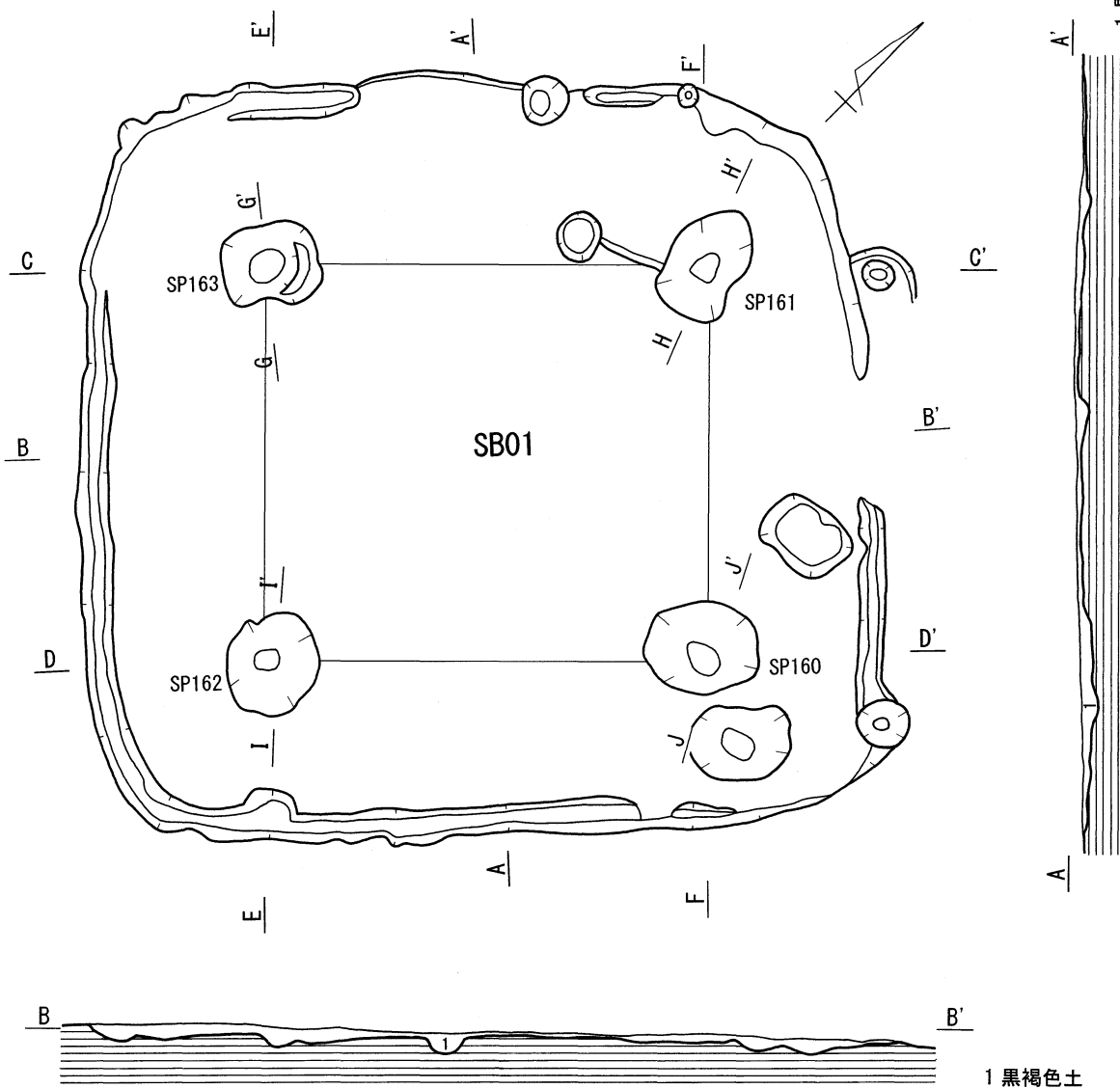
146は砂岩質の石皿で、約半分を欠損する。片面に凹みがあり、反対面はよく磨られた状態のものである。三角形の石で、残部の幅は約22cm、厚さは約5.0cmである。

147は砥石状石器である。断面形不整四角形であるが、四方の面が磨られていることから砥石状石器とした。不整四角形だが、長さ18.5cm、幅5.0cm、厚さ6.0cmを測る。

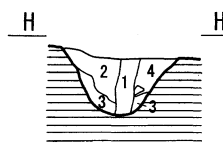
148はB-7区付近出土の石錘状石器で、平面小判状を呈す。長径9.5cm、短径7.5cm、厚さ4.2cmを測る。上下端に打ち欠いた痕がないことから石錘状とした。

149は円管状石器で、人工的な穿孔を持つ石製品。用途不明であるが、孔が磨られており人工的なものである。孔の直径は約2cmで、正円形を呈す。

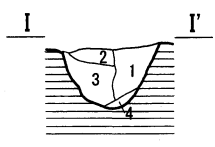
1 黒褐色土



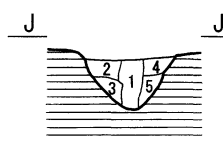
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 褐色土



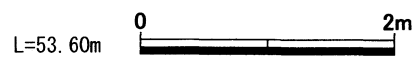
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 黒褐色土



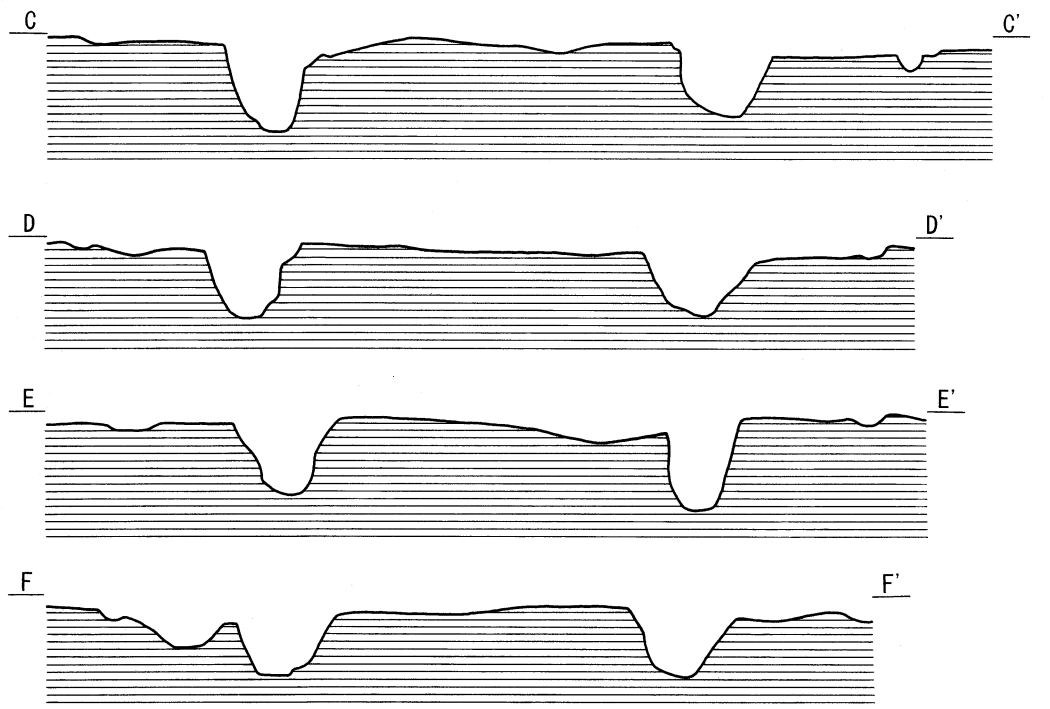
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒色土
- 4 黒褐色土




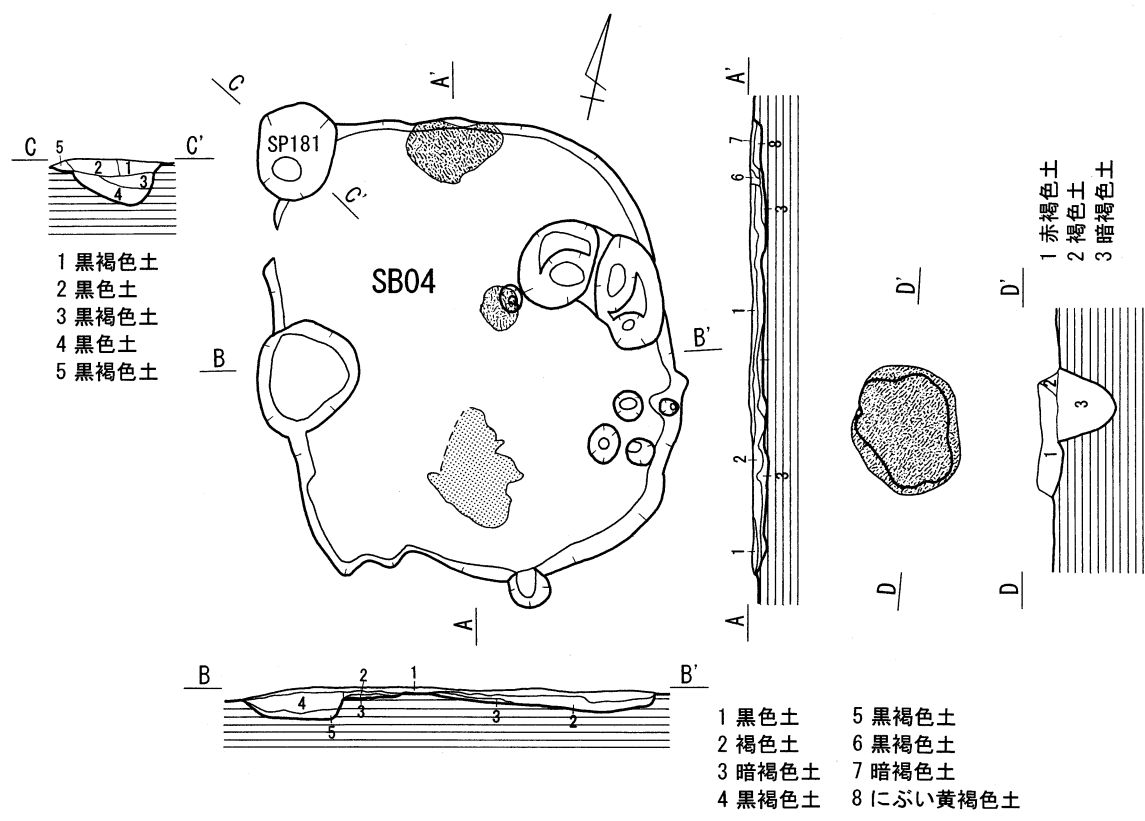
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 褐色土

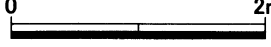


第4図 SB01実測図

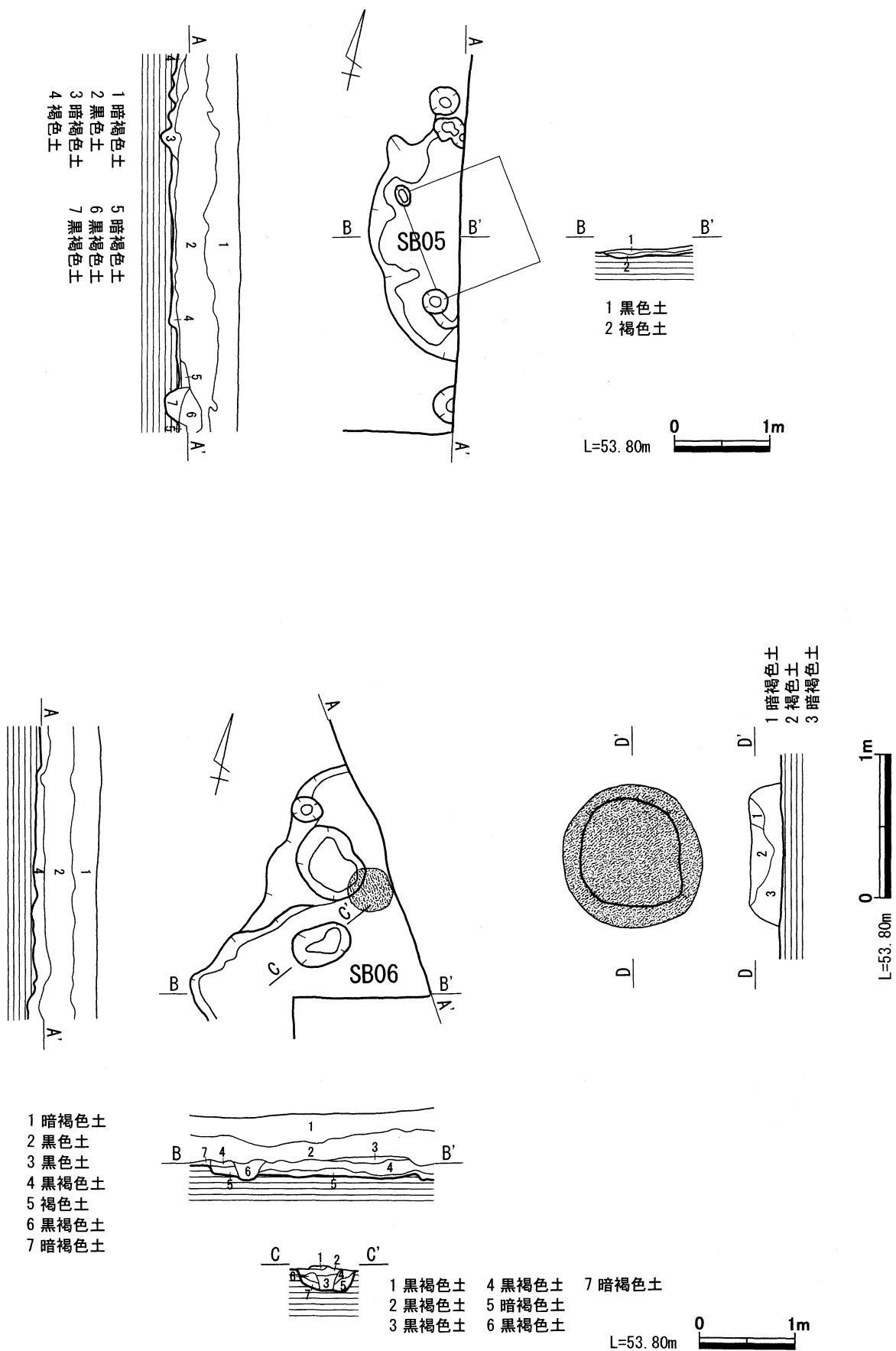


L=53.60m 



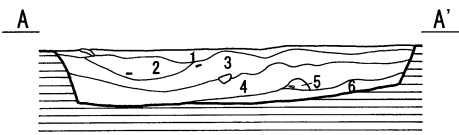
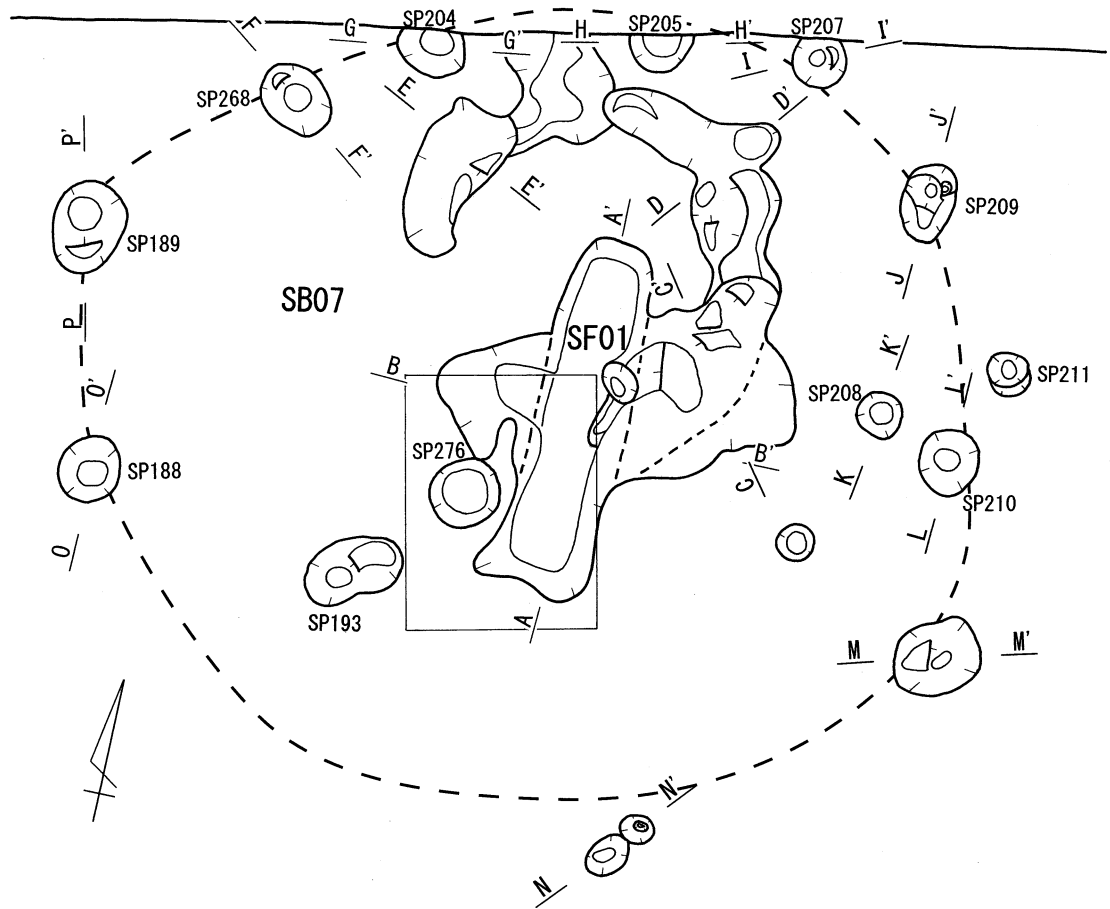
L=53.70m 

第5図 SB01エレベーション図、SB04実測図

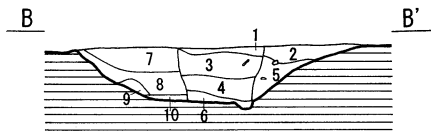


第6図 SB05・SB06実測図

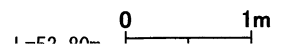
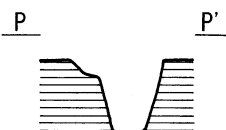
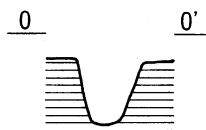
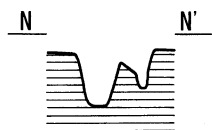
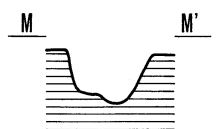
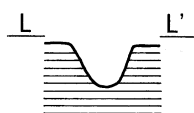
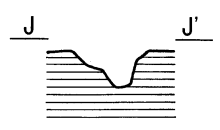
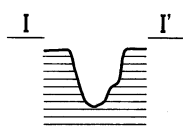
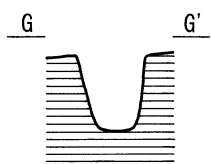
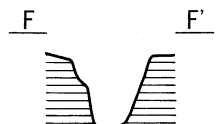
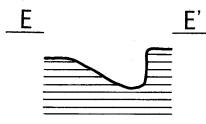
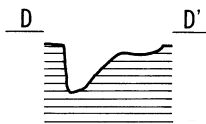
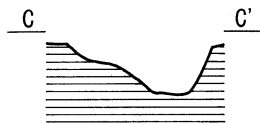




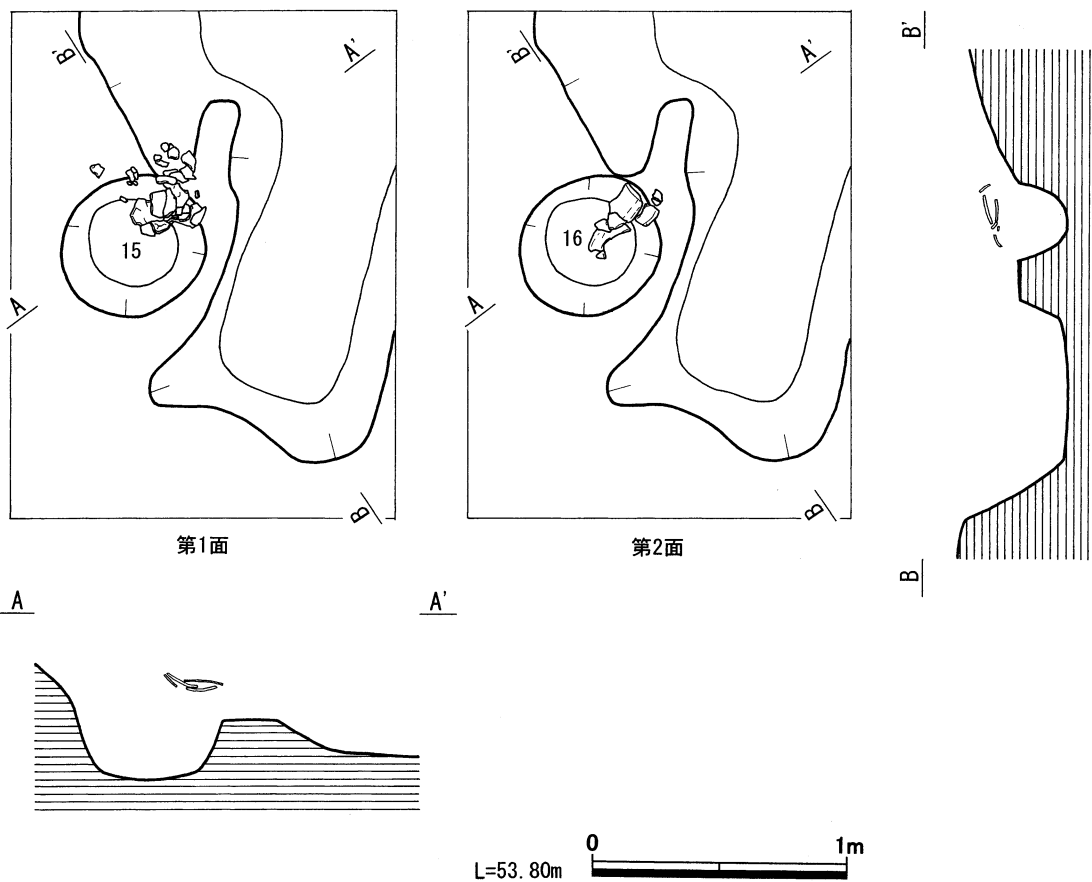
- 1 黑褐色土
- 2 黑褐色土
- 3 黑褐色土
- 4 黑褐色土
- 5 黑褐色土
- 6 黑褐色土



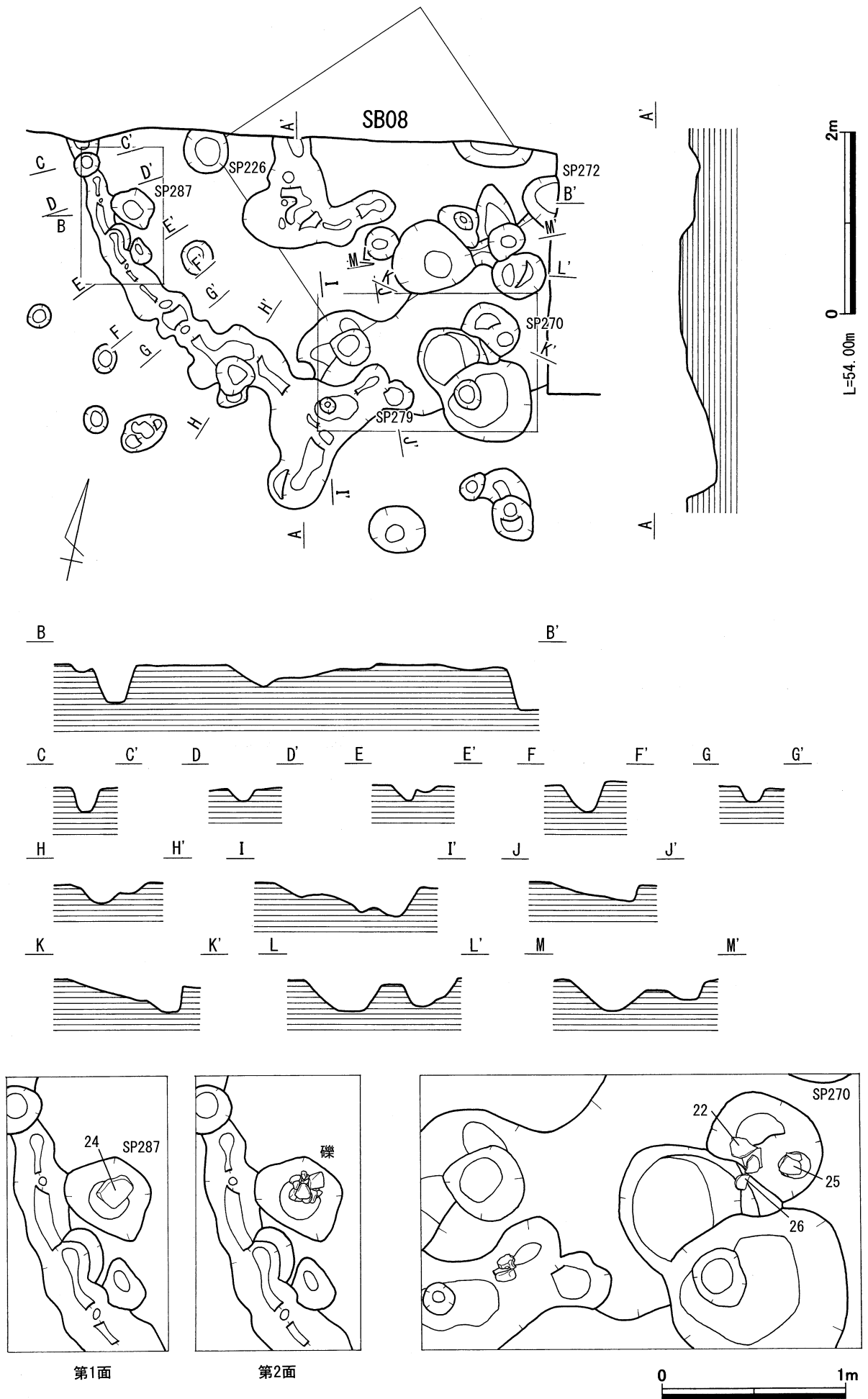
- 1 黑褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 黑褐色土
- 4 黑褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 黑褐色土
- 7 黑褐色土
- 8 黑褐色土
- 9 暗褐色土
- 10 暗褐色土



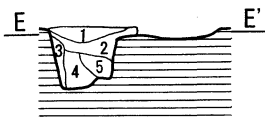
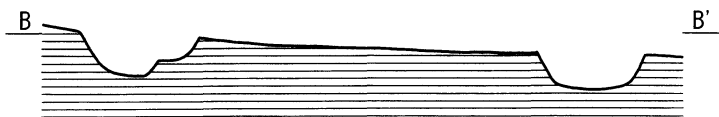
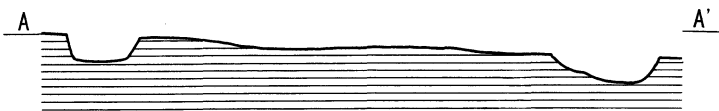
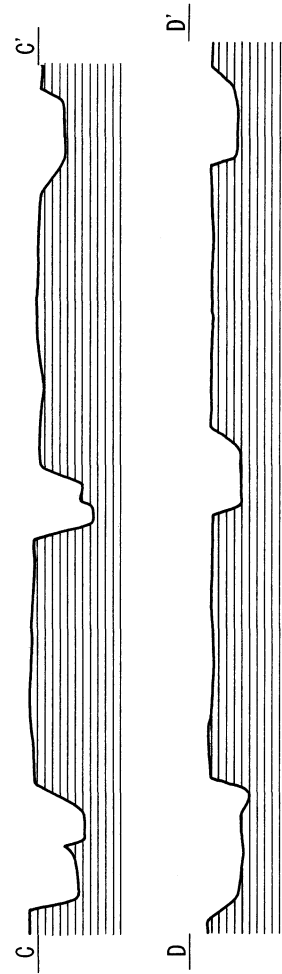
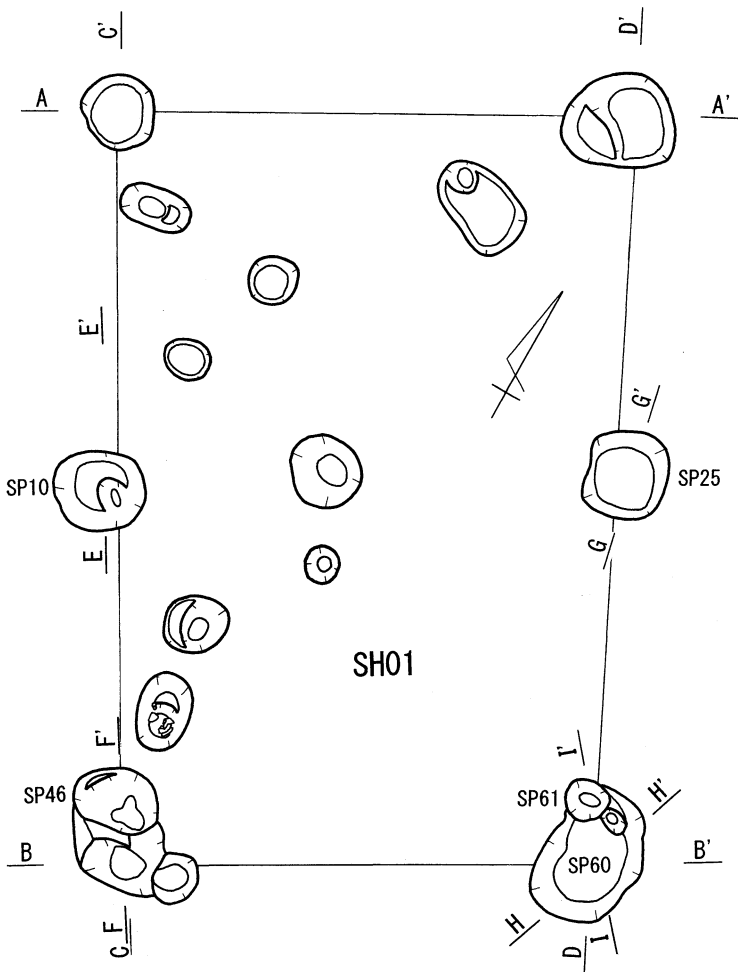
第7图 SB07实测图



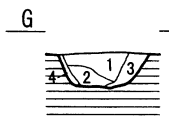
第8図 SB07遺物出土状態図



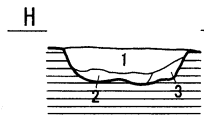
第9图 SB08实测图



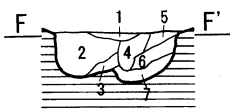
- 1 黒色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 黒褐色土



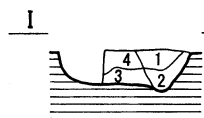
- 1 黒色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土



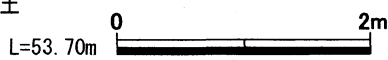
- 1 黒色土
- 2 暗褐色土
- 3 黒褐色土



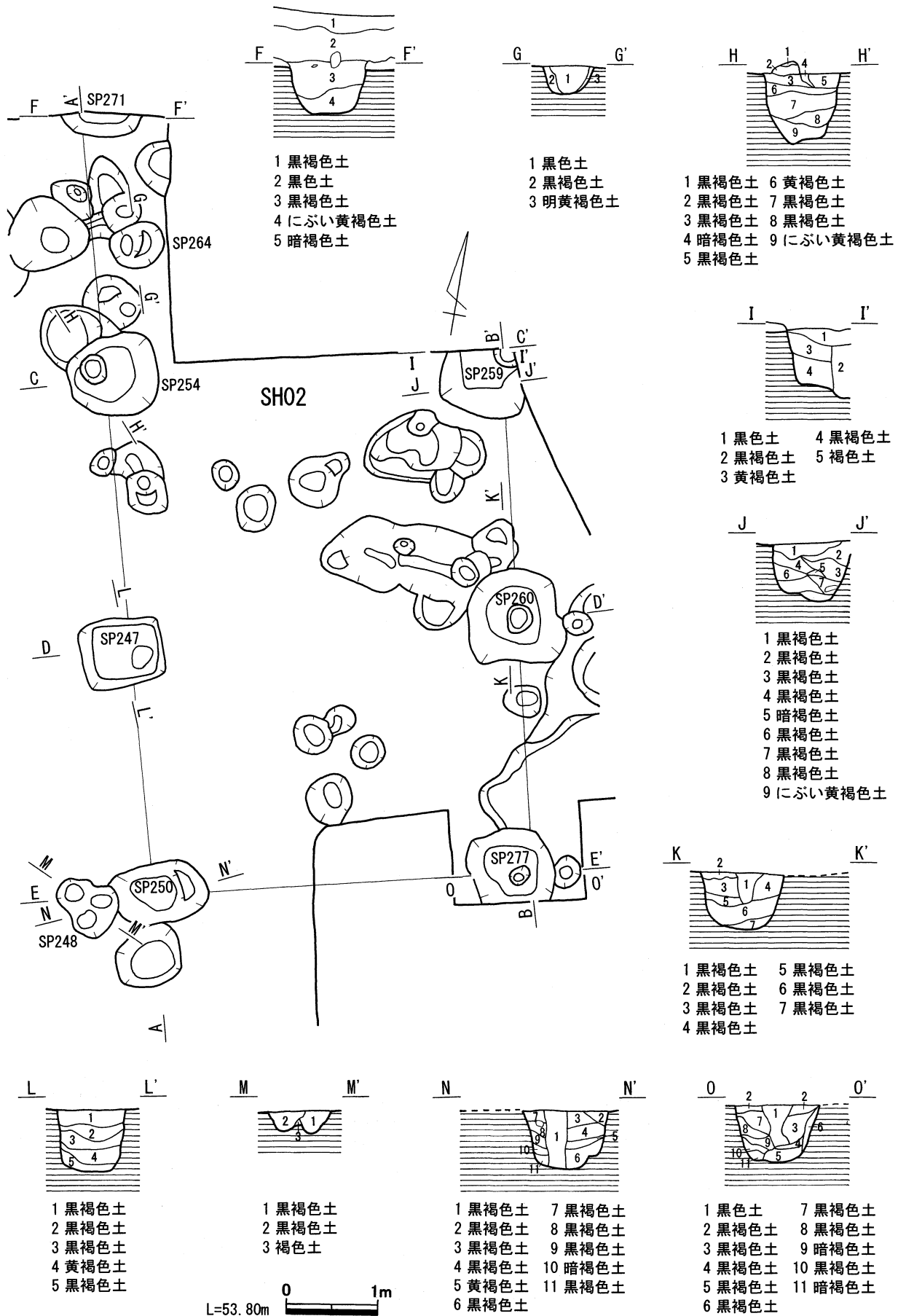
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 黒褐色土
- 6 黒褐色土
- 7 暗褐色土



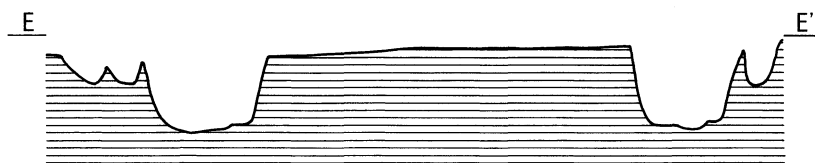
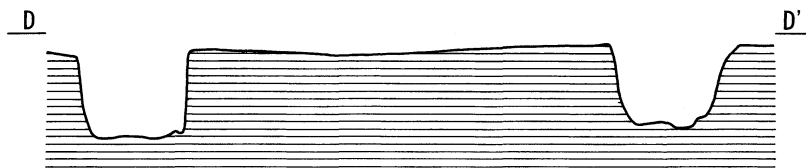
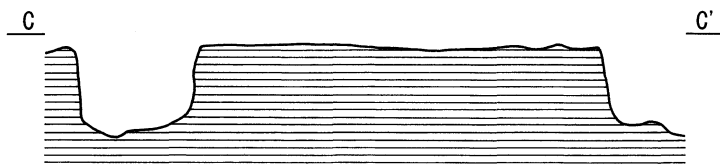
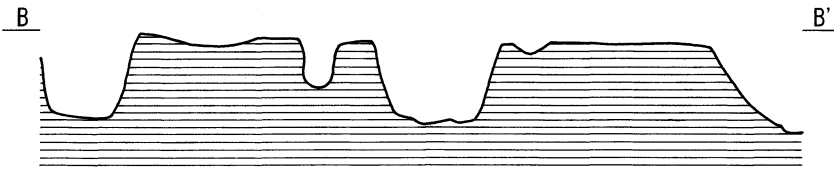
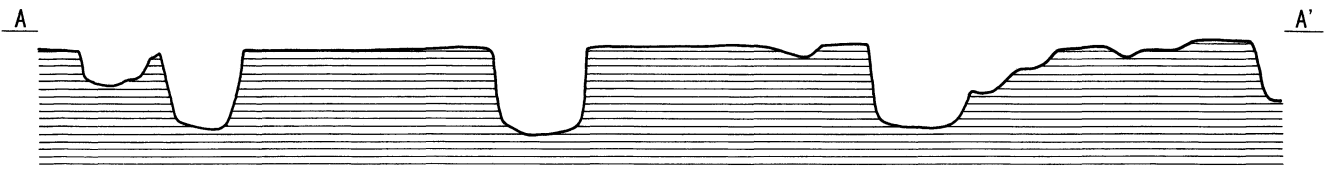
- 1 黒色土
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 黒色土



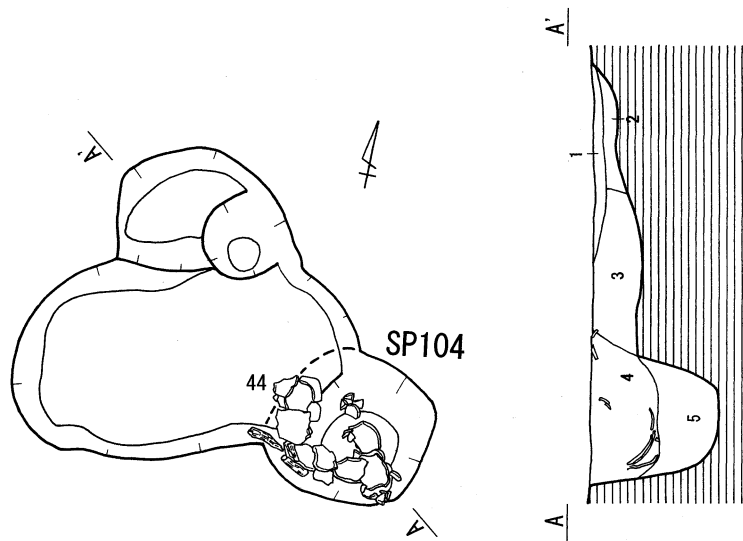
第10図 SH01実測図



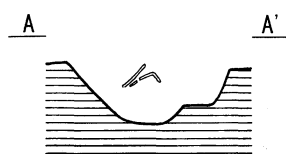
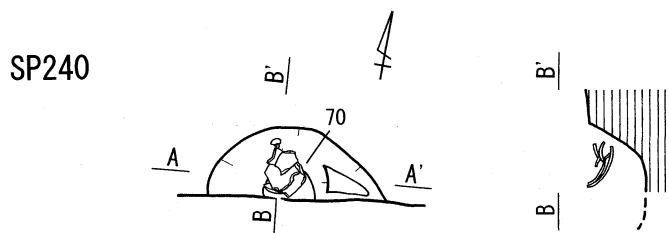
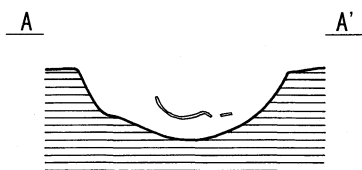
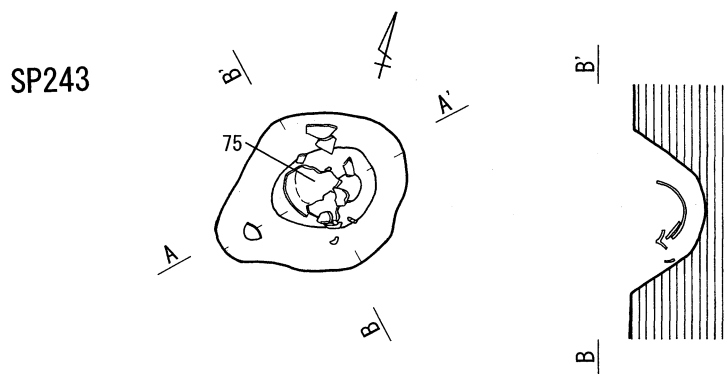
第11図 SH02実測図




第12図 SH02エレベーション図

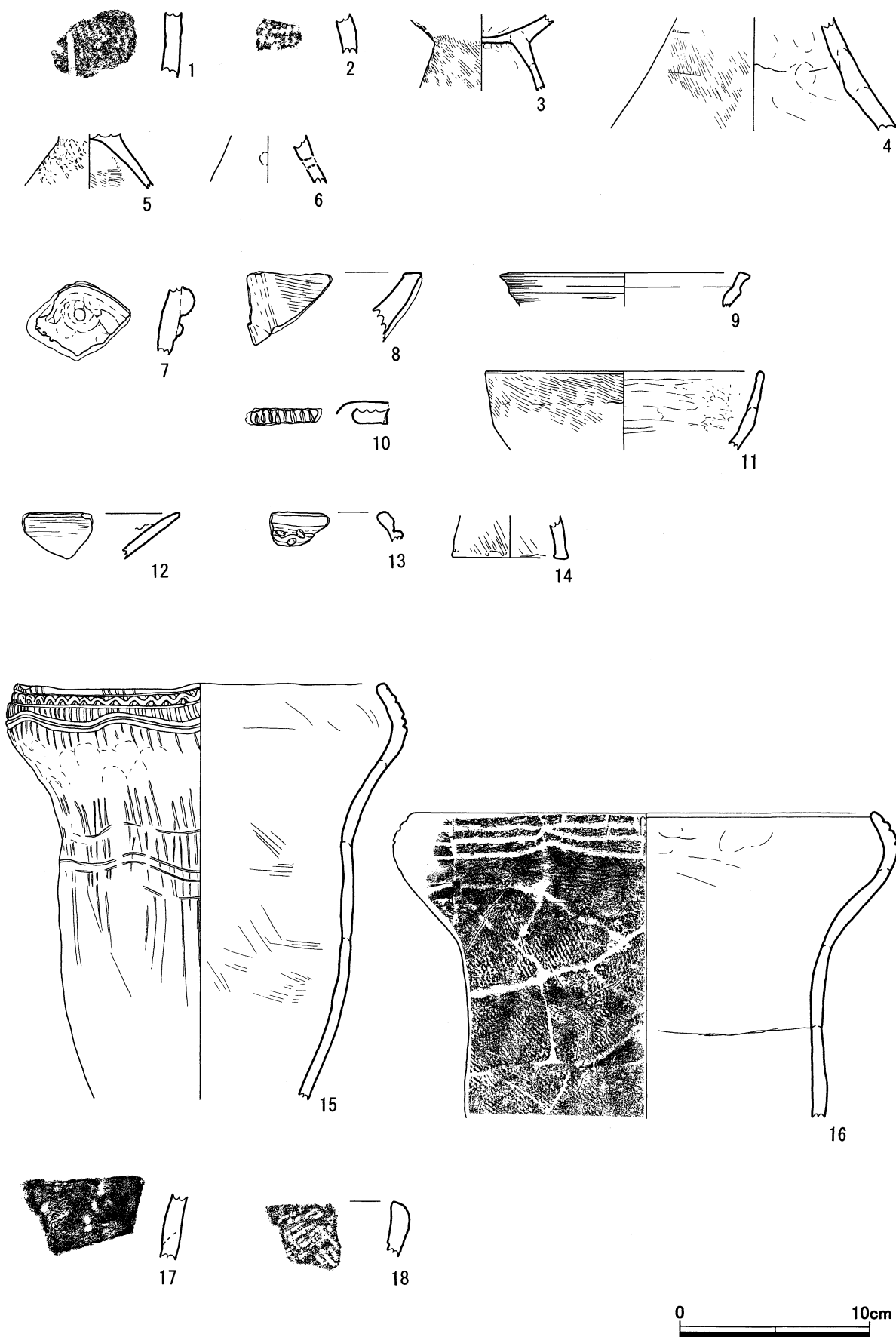


- 1 黒褐色土
- 2 黒色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 黒褐色土



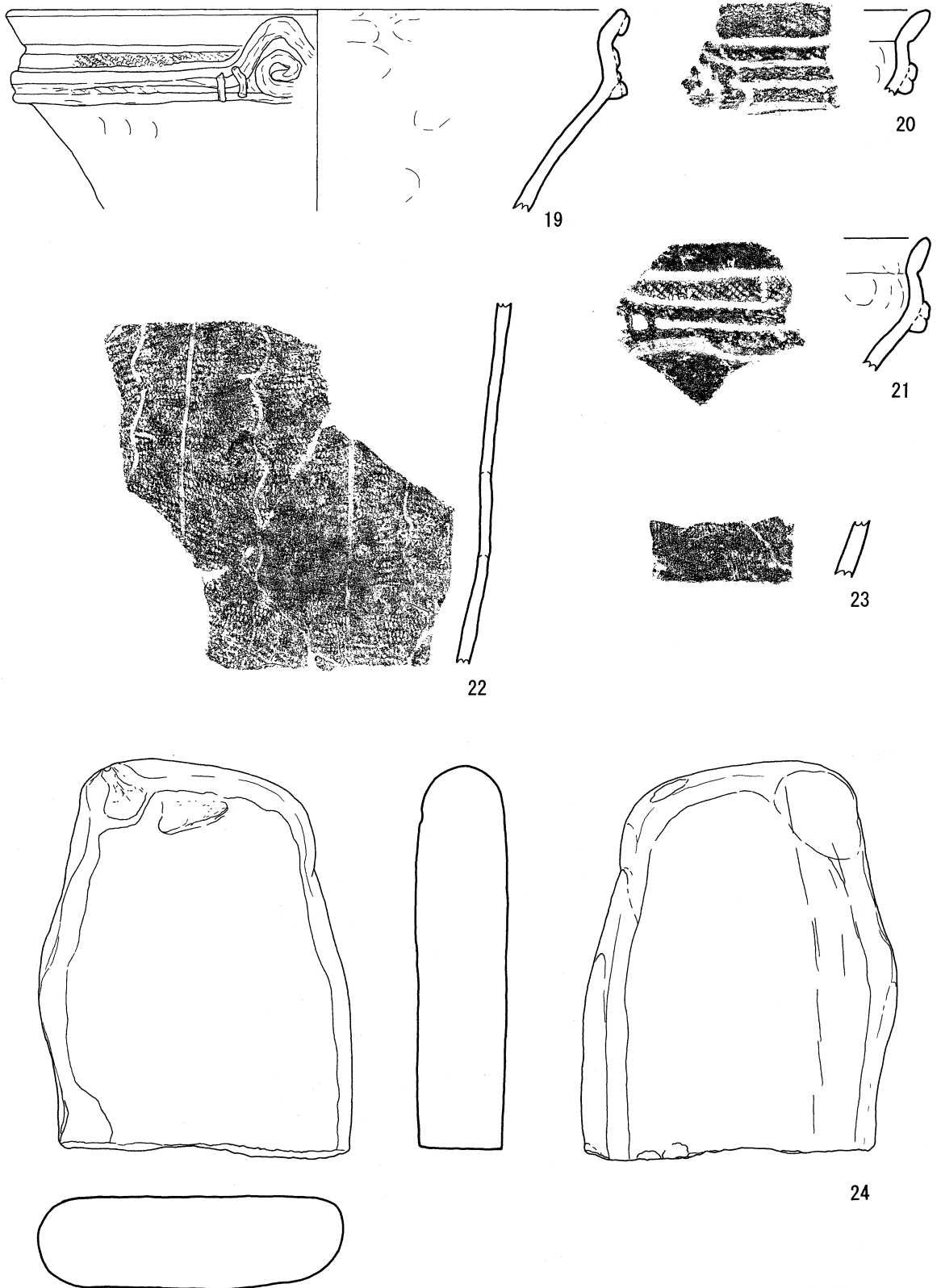
L=53.80m  2m

第13図 SP104・SP243・SP240実測図

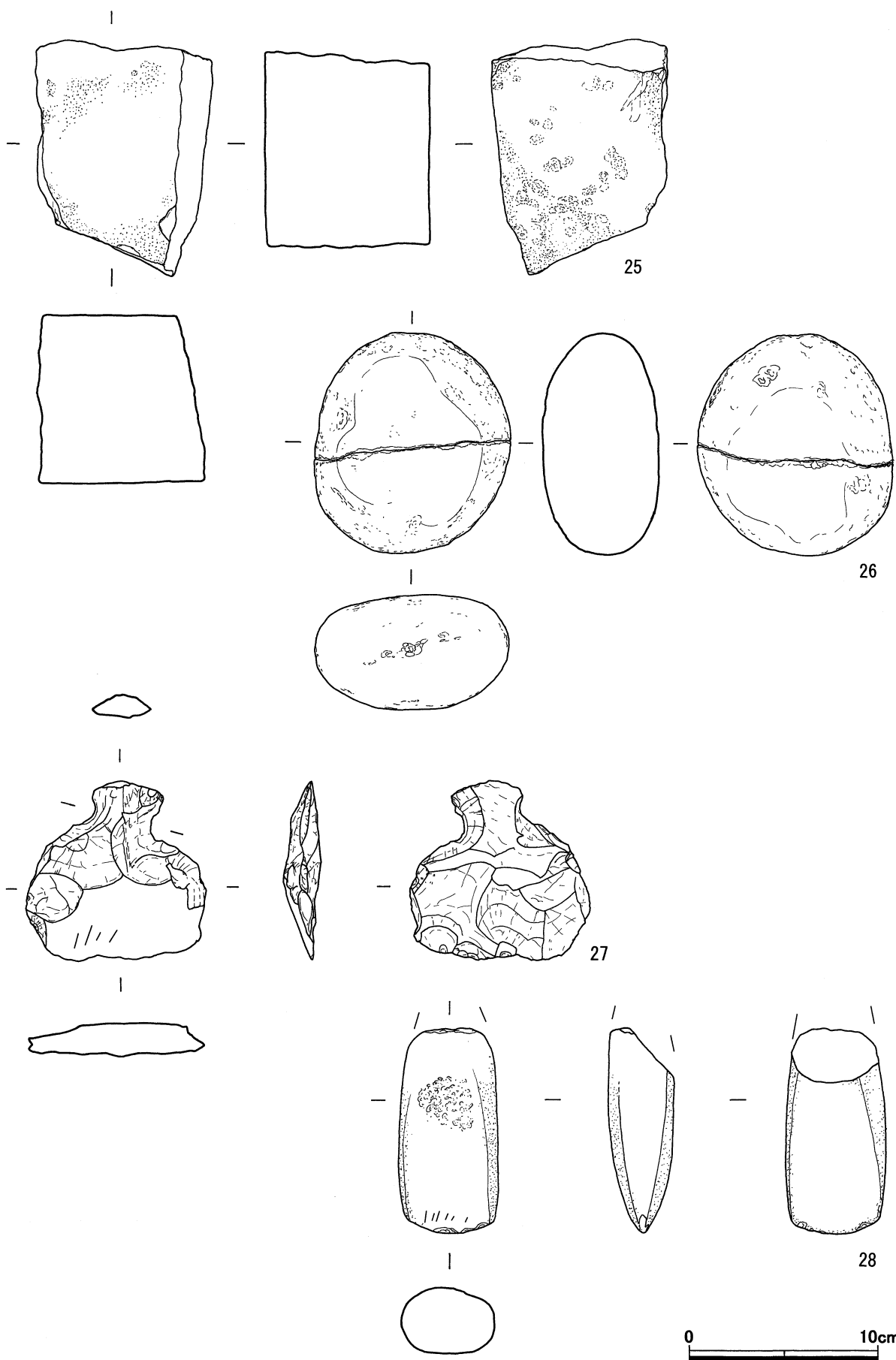


第14図 出土遺物実測図(1)

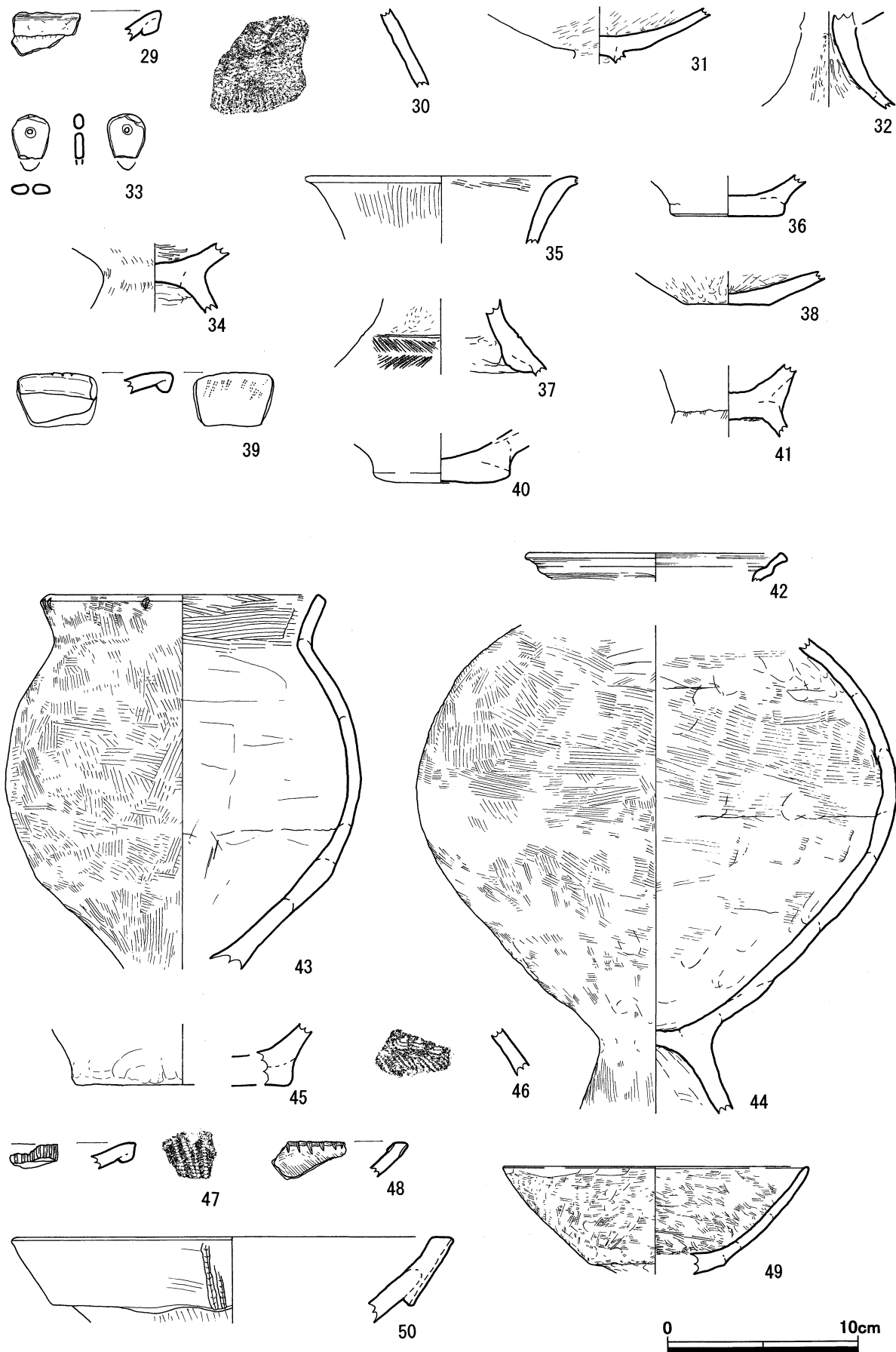




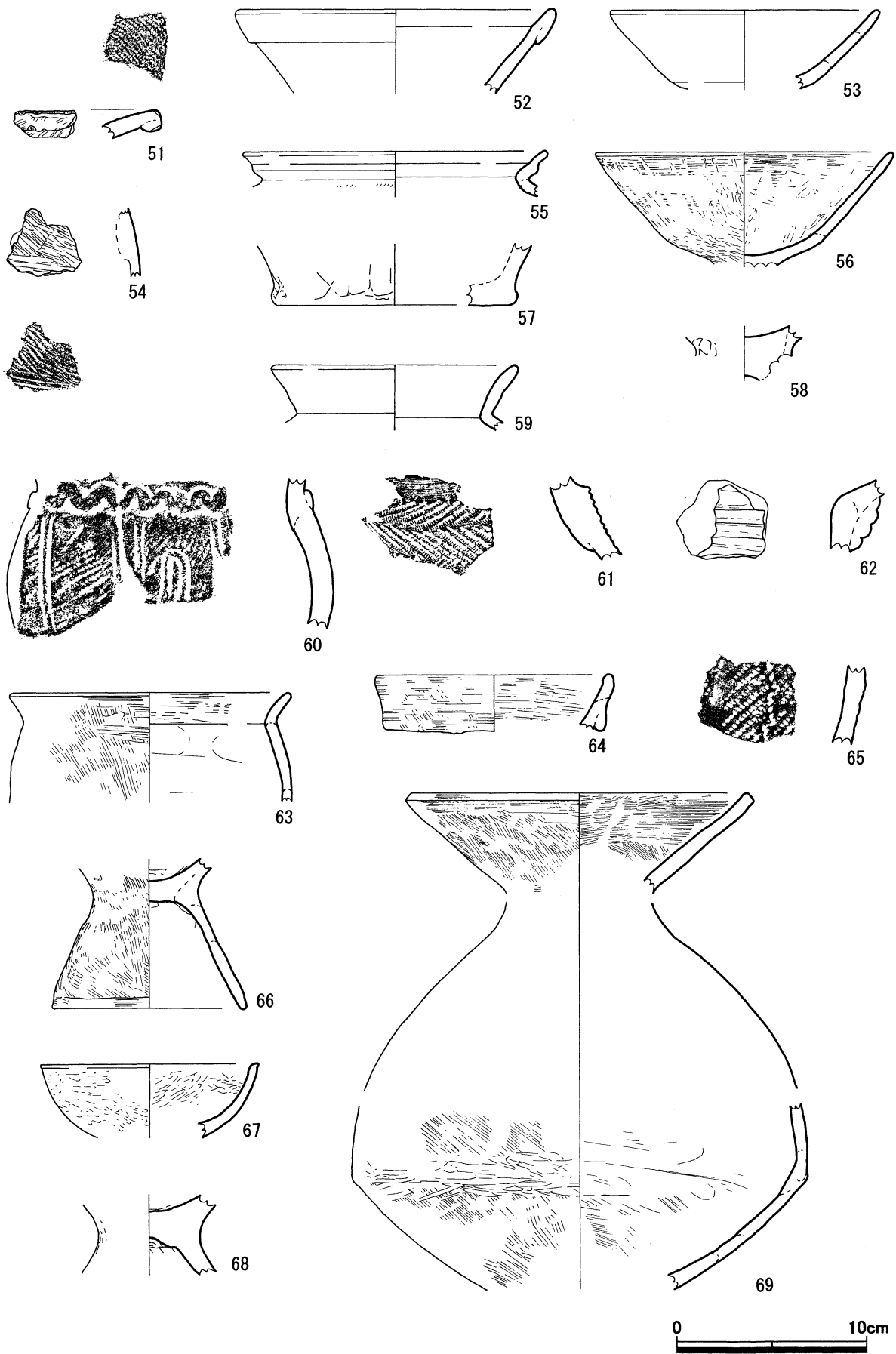
第15図 出土遺物実測図(2)



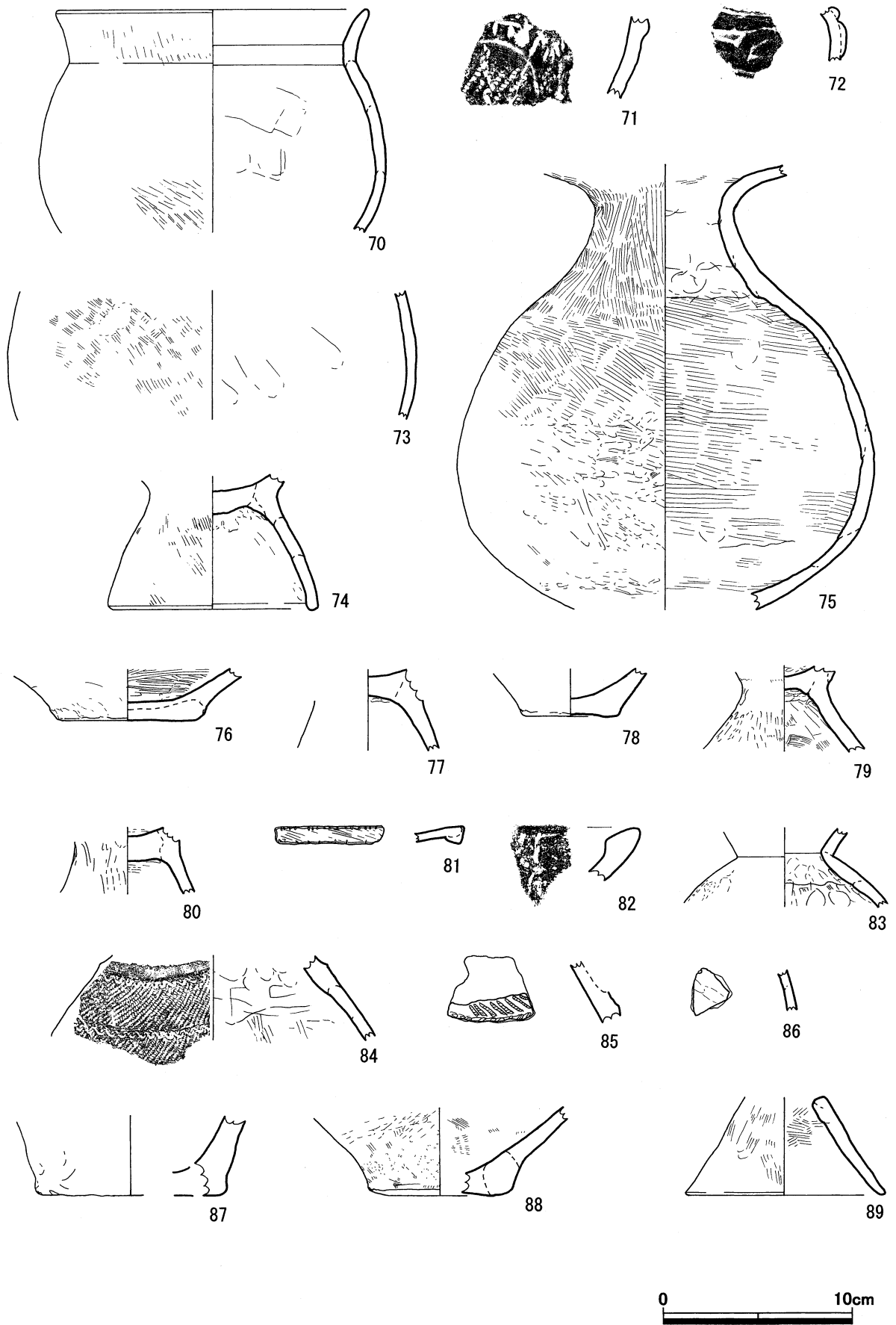
第16図 出土遺物実測図(3)



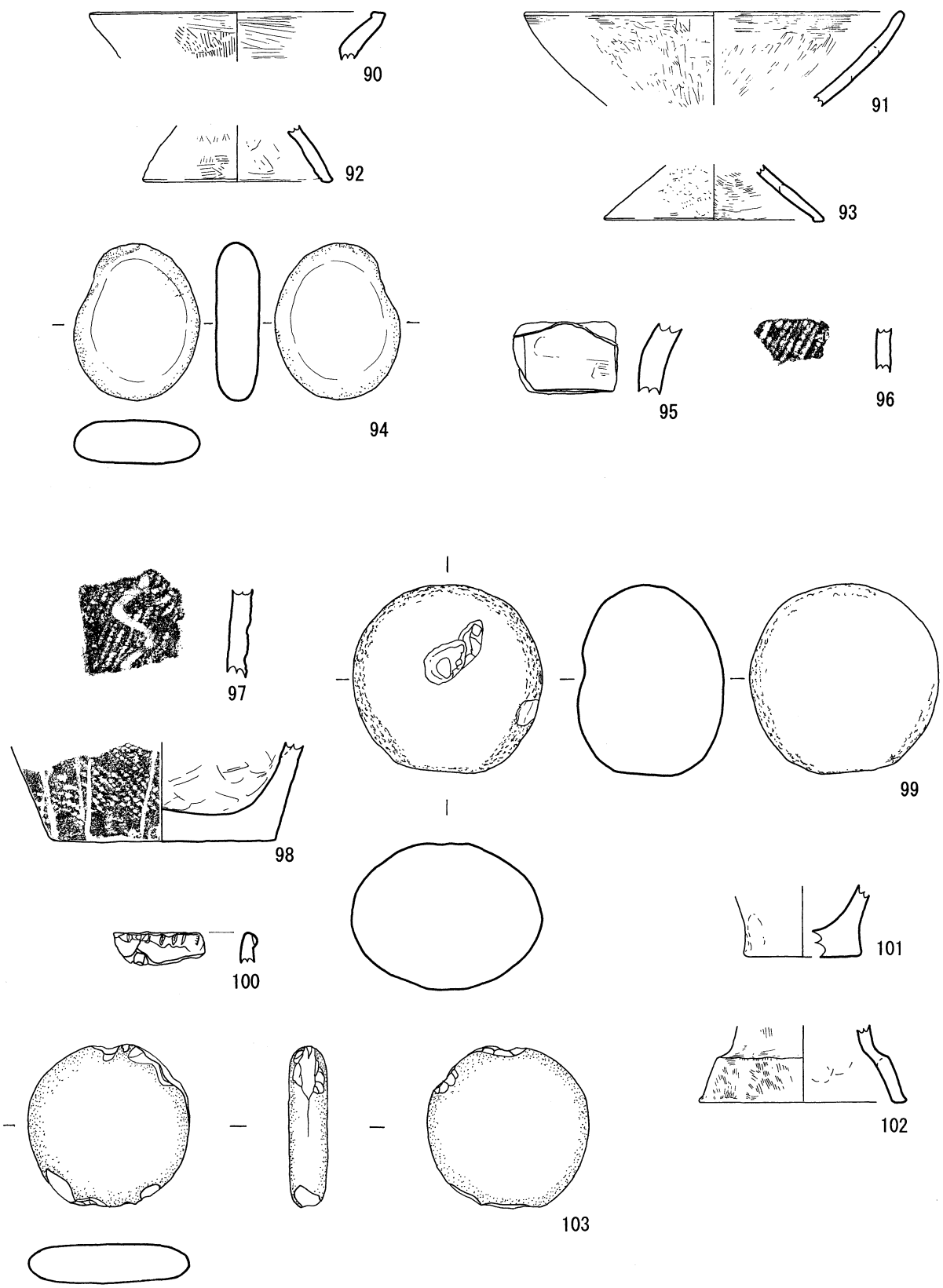
第17图 出土遺物実測图 (4)



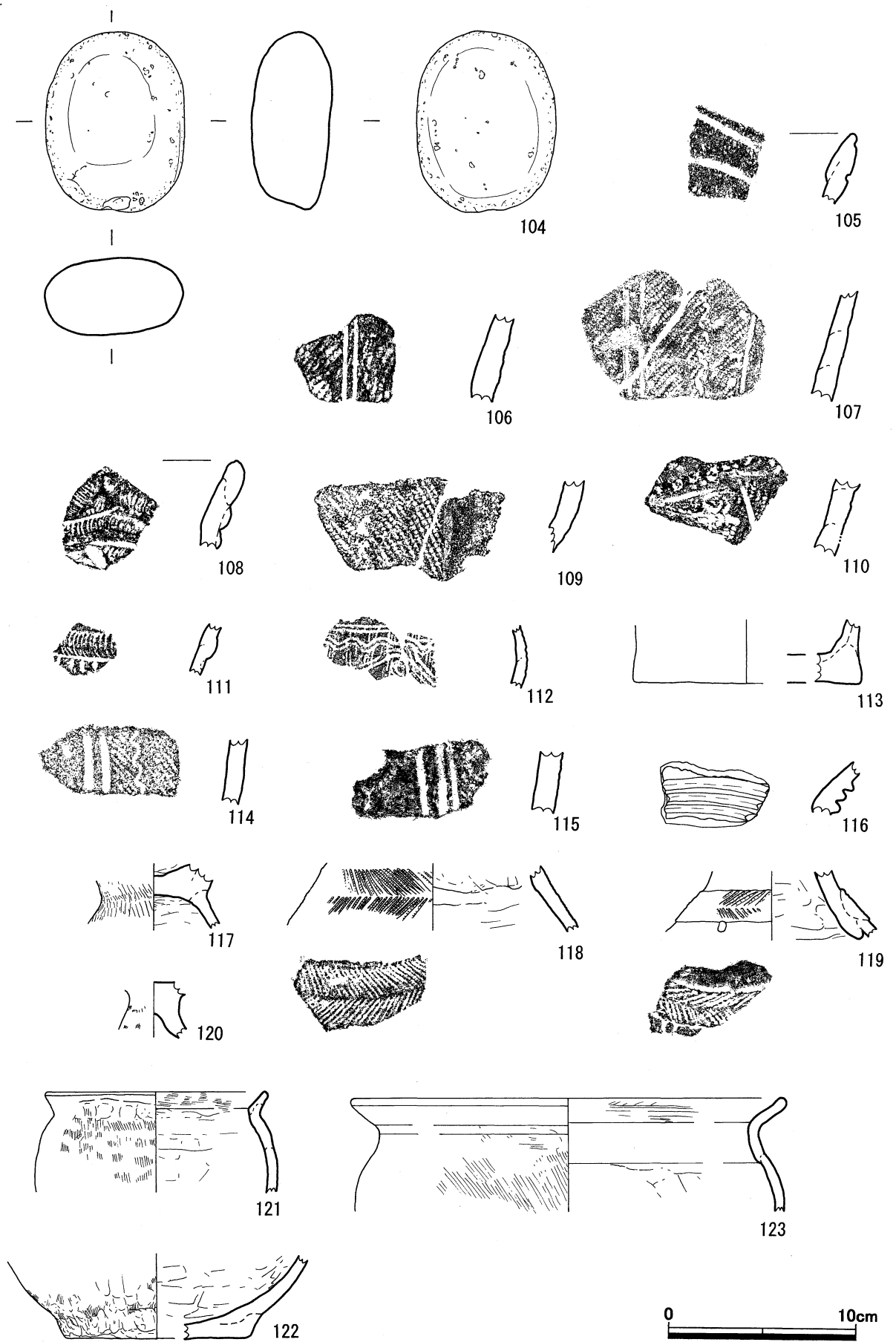
第18図 出土遺物実測図(5)



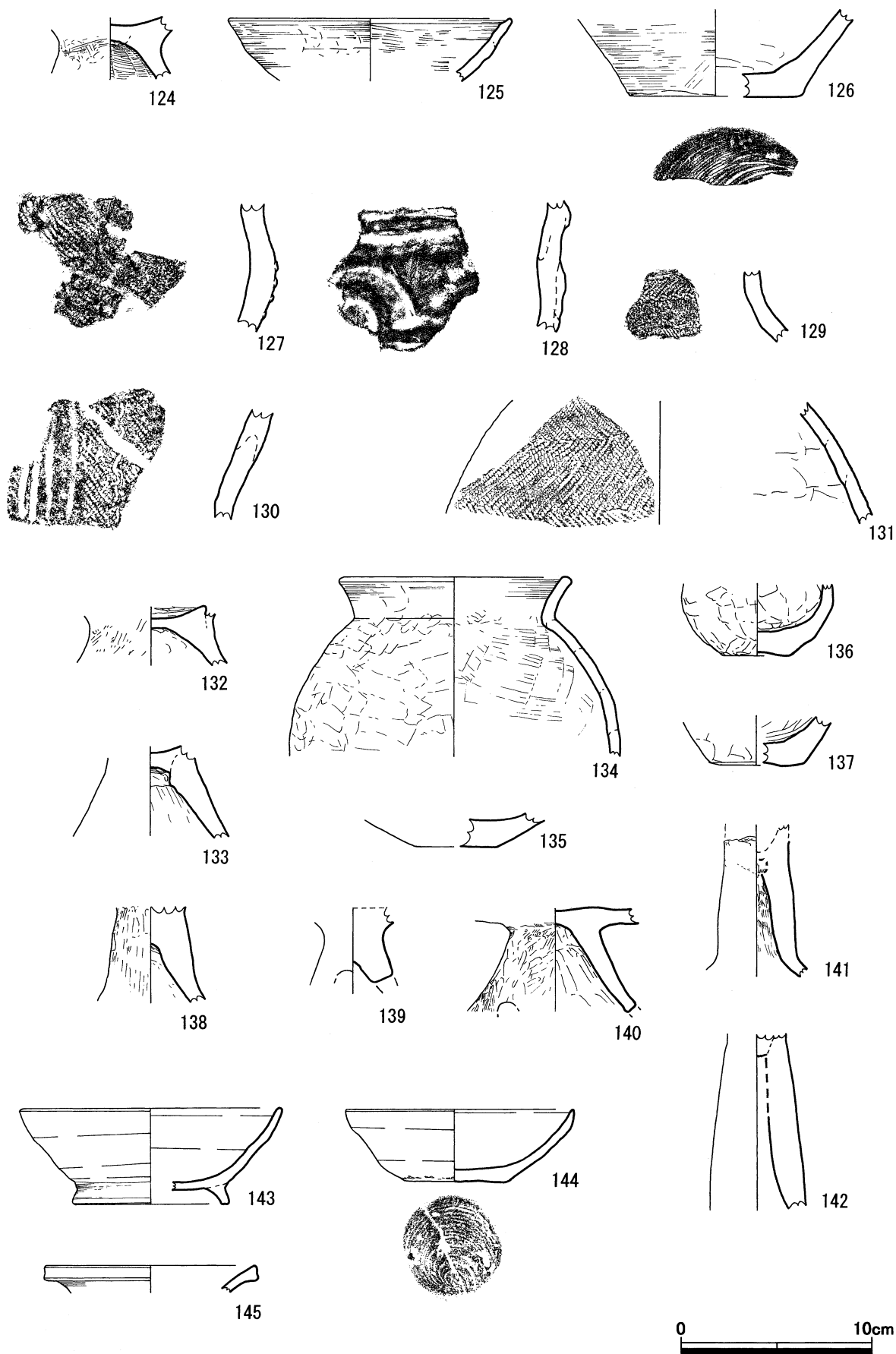
第19图 出土遺物実測図(6)



第20図 出土遺物実測図 (7)

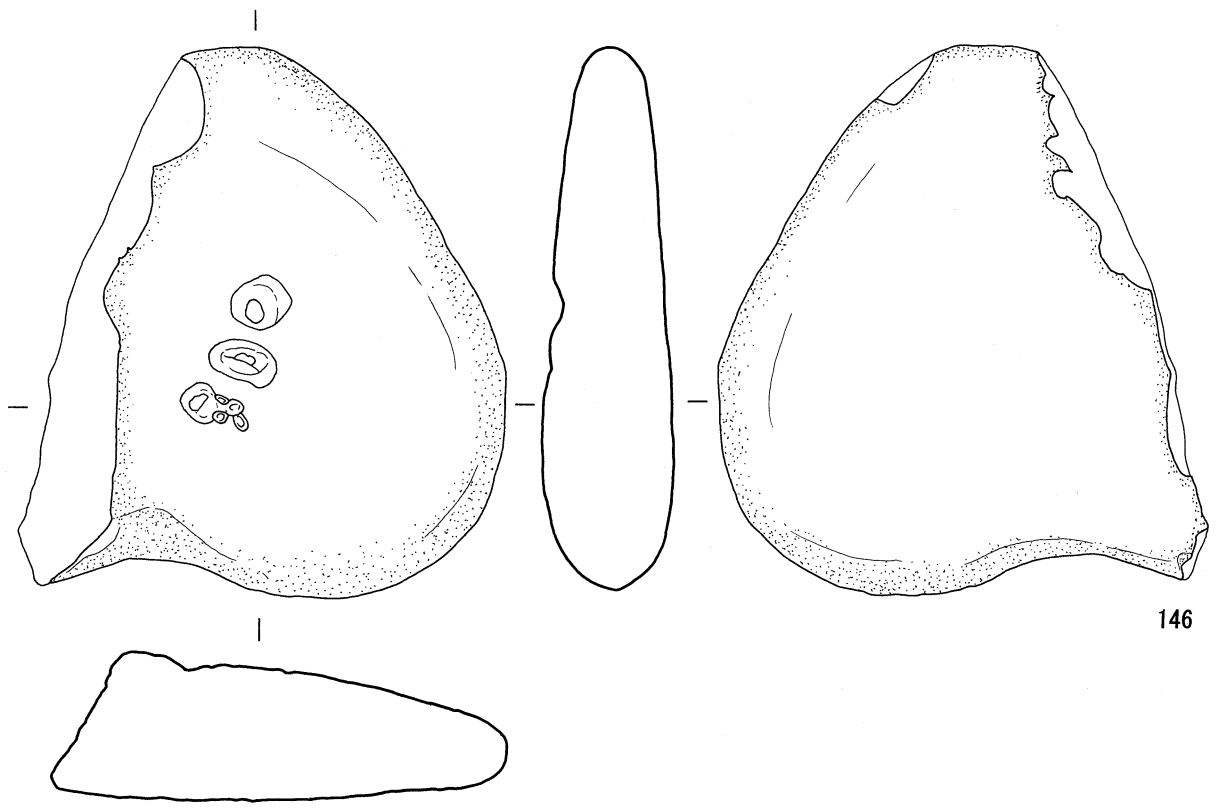


第21図 出土遺物実測図(8)

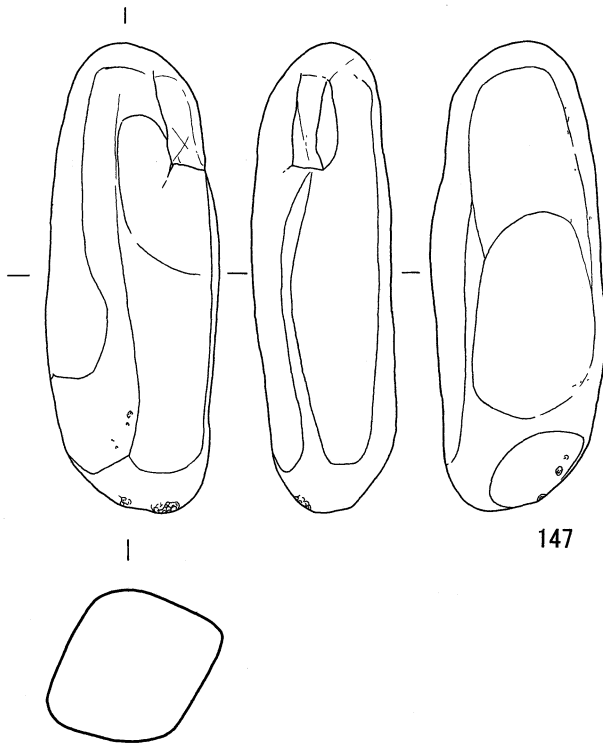


第22図 出土遺物実測図(9)

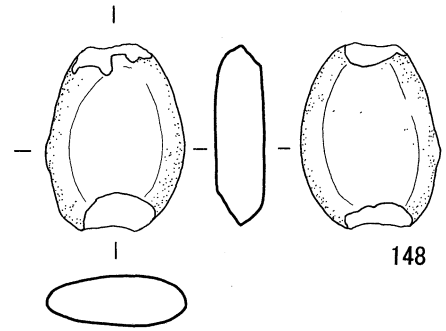




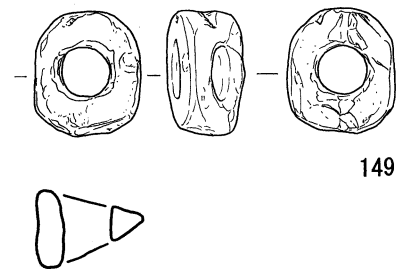
146



147



148



149



第23図 出土遺物実測図 (10)

## 4 まとめ

今回の調査の最大の成果は、何と言っても縄文時代中期後半の住居跡らしき痕跡を含め3軒が検出されたことである。ただし、当該期の住居跡の特徴を示す、住居の平面形状、支柱配置、炉の形状等が明確にできなかったが、これまで当該期の土器の出土事例が多いにもかかわらず、住居跡の検出事例がなかったことから、大きな成果と考えるものである。

また今回の調査では、縄文時代中期に比定される遺物、とりわけ中期末葉から後葉初頭にかけての時期の土器においては、地域色を色濃くする時期で、静岡県中西部（牧之原台地）から愛知県南部・東部にかけて出土する土器群が、これまでの和岡原の調査の中でも比較的遺存状態もよくまとまって出土しており、当該地域での該期の土器編年を考える上でも良好な資料が提示されたと言えるものである。

個々の出土土器については本文報告で説明したとおりで、ここでは時代と土器型式名を表記して整理し、本調査のまとめとしたい。

### 【第1類】中期中葉

C-9出土の91、92は同一個体の土器破片と思われる。どちらも器厚が薄手で、波状口縁の深鉢土器口縁部破片（91）と同口縁部直下の土器破片（92）である。口縁部文様に帯として、半截竹管状工具の内皮面による連続爪形文が2条、3条と施されており、かなり特徴的な土器であるが既定の型式名が不承知である。胎土が赤褐色であるが、極めて薄手であることから、東海系の土器と認識するものである。今後、諸兄のご教示を仰ぎたい。

### 【第2類】中期後葉

#### ① 里木Ⅱ式

SB07出土の18・19に代表される土器群で、内湾する平口縁の深鉢形土器で、器厚は比較的薄手で、胎土は赤黄褐色である。18は、土器全体に半截竹管状工具による並行沈線を縦位方向に施して、地文とした深鉢形土器である。口縁部の文様は、口唇部に沿って同半截竹管状工具による平行の沈線を一周廻らし、その内側を同工具によって交互に刺突して、波状の文様を作り描き上げている。その下に同状工具によって大きな波状の平行沈線文（連弧文）が施されている。口縁部文様帯の下部、頸部は撫でられて無文帯となっている。頸部の下、胴上半部には、口縁部に観られる波状の平行沈線文が施されている。

次に19は、細い撚り糸を地文として施文した後、18のように口唇部に沿って、沈線を巡らせており、その下を2条の浅い沈線によって連続した弧状文を描き出している。

同類の土器としては、17・119・132がある。

## ② 曾利Ⅱ式

器厚が比較的厚い土器で、その多くは赤褐色もしくは暗褐色を呈している。胎土には、砂粒を含みややザラザラ感のある土器である。

縄文を地文とし、粘土紐をシダ状に波状隆帯として貼り付け（場合によっては、隆帯貼り付けの後交互刺突）が施されるのが特徴的で、平行沈線によって縦位沈線とJの字が描かれている。

同類の土器には、62・65・93・111・112がある。

## ③ 広野C式

比較的器厚が厚く、胎土は暗褐色、褐色を呈しており、砂粒を含みザラザラ感のある土器である。

縄文を地紋とすることが多く、器面に結節縄文によるS字状文が施されることが多い。結節縄文に代え、半截竹管状工具による交互向きを変えたS字状の刺突文、棒状工具によって縦方向の波状文(シダ状文)が施される土器群。

同類の土器には、53・61・77・78・81・87・90・93・103・104・105・106・107・109・110がある。

## ④ その他

波状口縁で低い粘土貼り付け隆帯による施文のやや薄手の土器153。

特徴的な口縁部文様帯を持つ土器59は、粘土紐を一周巡らし、その隆帯に沿って沈線によって縁取りする。区画内に縄文を充填させ、文様の交差部に渦巻き文と粘土紐を2条貼り付けている。この粘土紐の雰囲気から曾利Ⅱ式をイメージさせるが、曾利Ⅱ式の中には器形、文様で類似するものは見当たらない。なお、頸部無文帯を作るという文様構成から観て、同時期と考えたい。

94は、器厚が厚く、赤褐色、無文地に粘土紐貼り付けによる隆帯文を施す土器。加曾利E式に並行する在地的な土器と捉える土器である。

# 吉岡原遺跡第14次発掘調査



### Ⅲ 吉岡原遺跡第14次発掘調査

#### 1 調査に至る経緯

平成28年度に吉岡原遺跡内において個人住宅建築計画があるとの情報が寄せられた。計画地は平成22年度に実施された第10次発掘調査区の西側隣接地であり、調査区西側に続く遺構が確認されており遺跡が存在することは明らかであった。施主および地権者と遺跡保存のための協議を行った結果、遺構面から保護層を設けての住宅建築は困難であるとの結論に達したため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

平成28年9月21日付けで施主から提出された「埋蔵文化財発掘の届出書」を掛川市教育委員会から静岡県教育委員会に平成28年9月29日付けで進達した。これに対し、平成28年10月6日付けで、県教育委員会から本発掘調査実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」が通知された。

#### 2 調査の方法と経過

計画範囲の300㎡を対象範囲とし発掘調査を実施した。

調査区は地形に合わせ、5m方眼のグリッドを設定し、実測、遺物取り上げの基準とした。グリッドは東西方向を西から東へA、B、C…とアルファベットで、南北方向は北から南へ1、2、3…と数字で表した。それらを組み合わせ、B-2区、C-3区等と呼称し、グリッド北西隅の杭にグリッド名を付した。調査地点を国家座標で記録するため、基準点測量を業者に委託し、実施した。

調査は平成29年4月19日から開始し、6月9日まで現地調査を実施した。

##### 重機掘削

バックホウ1台、クローラードンプ1台を借上げ、不要な耕作土の除去を2日間かけ行った。調査終了後は時間を開けず土地の造成工事に取り掛かる計画であったため、埋め戻しは実施していない。

##### 遺構検出

重機による掘削後は、鍬、鋤簾を使用し人力で粗掘りを行った。5～10cm程度掘り下げた後、鋤簾で丁寧に土を削り遺構を検出した。

##### 遺構掘削

検出された遺構は、移植ゴテ、竹ベラなどを使用して掘り下げた。遺構同士の切合い関係や土の堆積状況を確認するため、ベルトやサブトレンチを適宜設定し観察を行った。

##### 遺構実測

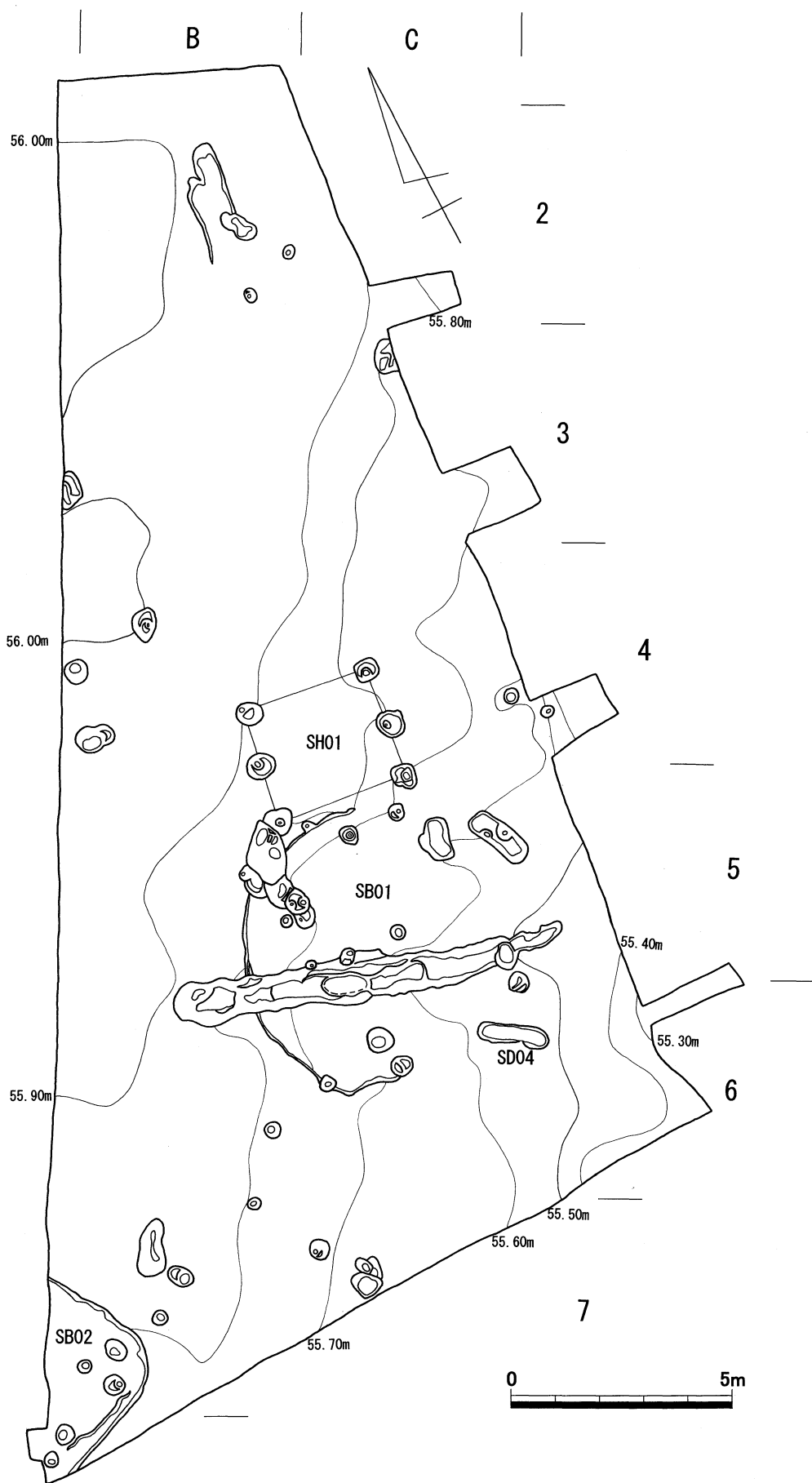
遺構の実測は、遺構平面図や土層断面図は縮尺1/20で作成し、遺物出土状態図や微細図は、縮尺1/10で作成した。

##### 写真撮影

現地調査での記録写真は、6×7判カメラ1台（ブローニーモノクロ用）、35mm判カメラ2台（カラーネガ、カラーリバーサル用）、デジタルカメラ1台を使用し撮影した。調査区の全景写真及び遺構の垂直写真は業者に委託し、ラジコンヘリコプターを使用し撮影した。

### 整理作業

出土した土器は水洗いした後、脆くなっているものについてはバインダー液を含浸させ強化した。土器本体に注記を行った上で、接合、復元し、実測図を作成した。現地調査で作成した図面は整理し、報告書作成用に編集、清書した。遺物の写真撮影を行い、報告を原稿にまとめ印刷に付した。



第24図 遺構全体図



### 3 調査の成果

#### (1) 遺構

竪穴住居跡、溝状遺構、掘立柱建物跡、小穴などが検出された。

##### ① 竪穴住居跡

竪穴住居跡は2軒検出された。

##### SB01 (第25図)

B～D-5・6区にて検出された。床面まで攪乱されていたため検出されたのは掘り方で、しかもごく浅く、東側では消滅していた。そのため、全体を確認し得ず平面形は定かではないが、隅丸方形を呈するものと考えられる。4箇所の主柱穴（SP32・37・39・48）が検出されたが、炉跡は検出されなかった。

遺存した壁と主柱穴から、長軸が南北方向に約6.6m、東西方向に約7.7mと推定され、主軸の方向はほぼ真北を向いている。主柱穴間の芯心での距離は、SP39・48間で3.45m、SP37・41間で3.55m、SP39・37間で3.60m、SP48・41間で3.50mを測る。

SB01はSD02と切り合って検出されており、土層観察による新旧関係はSD02がSB01を切っていることが確認できた。

出土遺物から弥生時代後期に比定できる。

##### SB02 (第27図)

A・B-7区にて検出された。調査区西端で検出されたため、確認できたのは全体のおよそ1/4程度である。規模は不明だが、平面プランは隅丸方形を呈すと考えられる。住居跡南側では部分的にはあるが、壁溝らしき痕跡が確認された。明確な主柱穴は検出されていないが、住居内の位置や掘削深度などからSP46が主柱穴の一つではないかと考えられる。

出土遺物から古墳時代前期に比定できる。

##### ② 溝状遺構

遺構検出時に溝状遺構としたものは4箇所あり遺構番号を付したが、精査の結果、後世の攪乱等が明らかであったものは本報告から除外した。

##### SD02 (第25図)

B・C-5・6区、D-5区にかけて検出された。SB01と切り合った状態で検出されている。

溝の長さは9.1m、幅は検出面で0.3～1.1m、下端で0.1～0.5mを測る。検出面から底までの深さは0.1～0.5mである。土層観察による新旧関係はSD02がSB01を切っていることが確認できた。

出土遺物から弥生時代後期から古墳時代前期にかけての溝跡と考えられる。

##### SD04 (第25図)

C・D-6区にて検出された。SB01との切り合い関係にあるが、新旧は明確にできなかった。規模は、長軸2.45m、短軸0.65m、検出面からの深さは0.3mを測る。小土器片が出土しているが、時代等の詳細は不明である。

### ③ 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は1棟検出された。

#### SH01 (第28図)

B・C-4・5区にて検出された。梁間1間、桁行2間の規模を有し、SP10・11・10・12・13・14・31で構成される柱穴間の芯心での距離は、SP12・10間で3.05m、SP14・31間で3.06m、SP12・13・14間で2.74m、SP10・11・31間で2.65mを測り、梁間のほうが桁行よりも長くなっている。主軸の方向は、N-7°-Eを測る。柱穴の底部は2段になっており、低い部分に柱を建て、上段に版築状に土を入れ、柱を固定したものと考えられる。

SB01とSB01とは切り合い関係にはないが、非常に近接していることから、同時期の併存は考え難い。出土遺物が少なく推測の域を出ないが、SB01よりも新しく、古墳時代前期の掘立柱建物跡と考えたい。

## (2) 遺物

1・2・4は、SB01出土である。

1は土師器壺の口縁部片で、推定口径16.8cmである。内面にはナデ調整が施されているが、外面は摩滅しており詳細は不明である。

2は弥生土器折り返し口縁高坏の口縁部から坏部片で、推定口径28.0cmである。主柱穴SP41から出土している。口唇部にはキザミが施され、外面にはハケ目調整、内面にはナデ調整が施されている。

3は土師器台付き甕の脚部片で、内外面ともにハケ目調整が施されている。

4は土垂で、円柱形を呈す。最大径4.1cm、高さ3.8cm、内孔の直径は0.7cmを測る。表面は丁寧にミガキ調整が施されている。

3・5～10は、SB02出土である。

3は土師器高坏の脚部で、底径は6.8cmを測る。外面はハケ目調整の後ナデ調整が施されている。

5は土師器S字状口縁甕の口縁部片で、推定口径14.0cmである。内外面ともにナデ調整が施されている。

6は土師器複合口縁壺（柳ヶ壺型）である。調査区境からの出土で、調査区を拡張して検出した。口径19.6cm、最大径28.0cm、底径7.1cm、器高は33.6cmを測る。口縁部が逆八字上にのび、その後斜め上方にのびて有段となる。胴部は胴下半に最大径をもつ。口縁部内外面ともに櫛状工具による刺突文が羽状に施されている。肩部から胴部上半にかけて櫛状工具により上から直線文、波状文の順に施されている。胴部下半はミガキ調整が施され、底部には木葉痕が残る。内面にはハケ目調整が施されている。

7は土師器壺の胴部片で、器径は13.4cmである。内外面ともにハケ目調整が施されている。

8は土師器壺の口縁部から頸部片で、推定口径12.4cmである。摩滅が著しいが、わずかにナデ調整の痕跡が認められる。

9は土師器壺の胴部片で、柱穴SP46から出土している。器径は推定で11.4cm、内外面ともにハケ目調整が施されている。

10は弥生土器壺の胴部片で、櫛状工具による波状文、縄文が施され、円形の浮文が貼り付けられている。

11はSH01内のSP31から出土した土師器壺の口縁部片で、推定口径12.6cm、内外面ともにハケ目調整が施される。

12～23は、SD02出土である。

12は弥生土器折り返し口縁壺の口縁部片で、口唇部にキザミが施されている。推定口径15.0cmである。

13は土師器壺の口縁破片で、推定口径12.0cm、外面にはハケ目調整とミガキ調整が施され、内面にもハケ目調整が認められる。

14は土師器小型壺の口縁部で、推定口径10.8cm、外面にはナデ調整が、内面にはハケ目調整が施されている。

15は弥生土器壺の胴部片で、推定器径15.1cm、外面に櫛状工具による波状文が施され、胴部下半にはミガキの痕跡が認められる。

16は土師器台付き甕の台部で、底径は6.0cm、外面はハケ目調整、内面はナデ調整が施されている。

17は土師器台付き甕の接合部で、外面は摩滅しているが、胴部の内面にはハケ目調整が施されている。

18は土師器小型壺の底部で、底径は2.9cm、内外面にナデ調整が施されている。

19は壺の底部で、推定底径6.9cm、内外面ともに摩滅している。

20は弥生土器折り返し口縁壺の口縁部片で、内面にハケ目調整、外面には縄文が施され、口唇部にはキザミが施されている。

21は弥生土器壺の胴部片で、櫛状工具による波状文、刺突羽状文の順に施文されている。

22は弥生土器壺の胴部片で、外面に縄文が施文されている。

23は須恵器甕の胴部片で、外面に叩き目が確認できる。

24～28は、遺構外出土遺物である。

24は弥生土器壺の胴部片で、C-7区から出土した。推定器径18.2cm、胴部上半には櫛状工具による波状文が施され、その下はハケ目調整が施されている。内面は摩滅している。

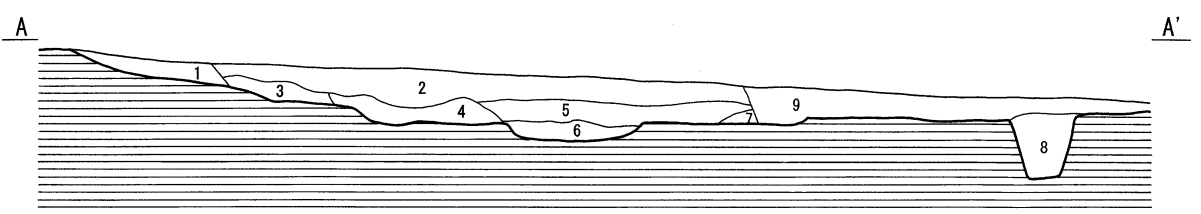
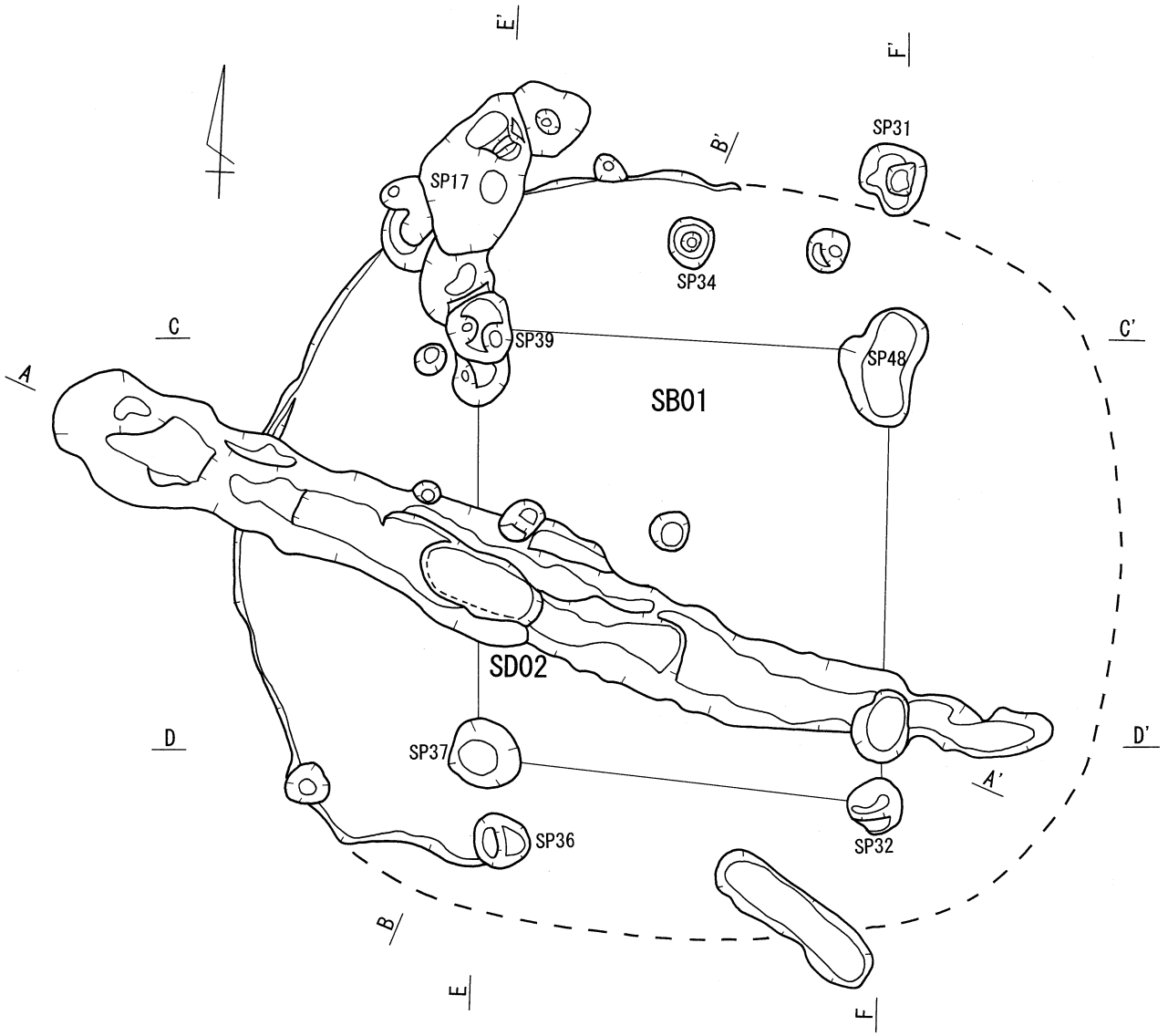
25は弥生土器壺の胴部片で、C-7区から出土した。推定器径15.2cm、表面にはハケ目調整が施され、内面はナデ調整が施されている。

26は土師器壺の口縁部から頸部片で、推定口径14.0cm、外面には横方向のハケ目調整、頸部にかけては縦、横方向の順にハケ目調整が施されている。口縁部内面には横方向のハケ目調整が施されている。

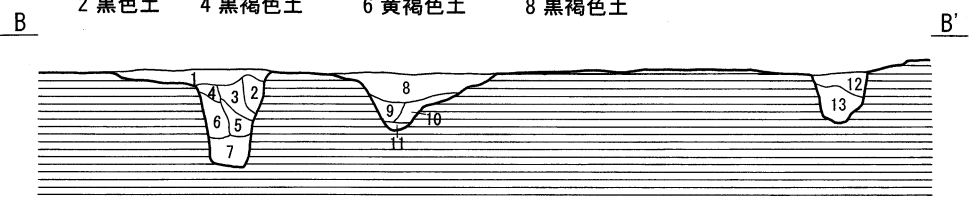
27は弥生土器高坏の接合部片で、外面には櫛状工具による羽状文が施されている。脚部内面にはナデ調整が施されている。

28は志戸呂産碗底部片で、推定底径4.0cmである。高台は削り出しで、内外面ともに灰釉薬が掛けられる。

29はSH01内のSP14から出土した、砂岩石皿の破片である。縦11.0cm、横7.0cmを測り、使い込んだためか非常に磨り減りが著しく、最も薄い部分では2cm程度である。複数面にわたり使用された痕跡が認められ、破碎して石皿として使用できなくなった後も砥石などに転用された可能性が高い。



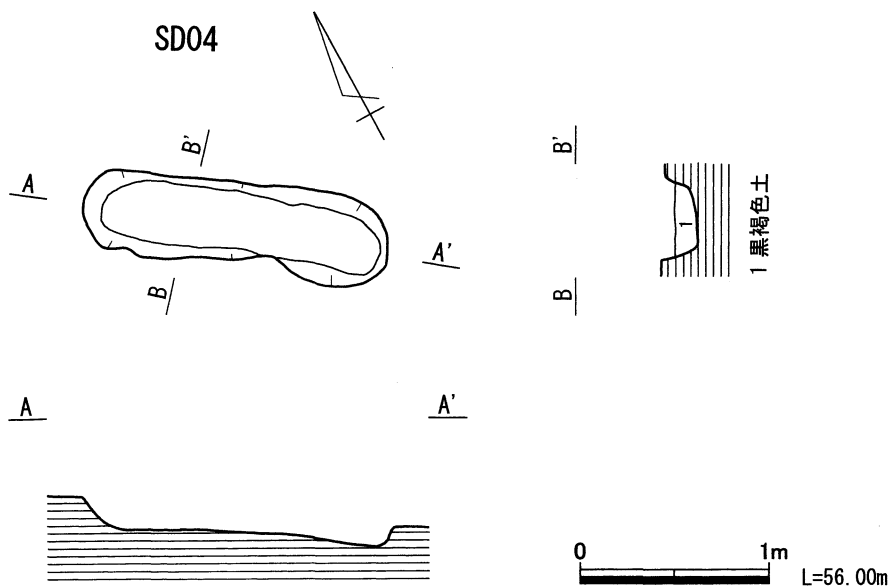
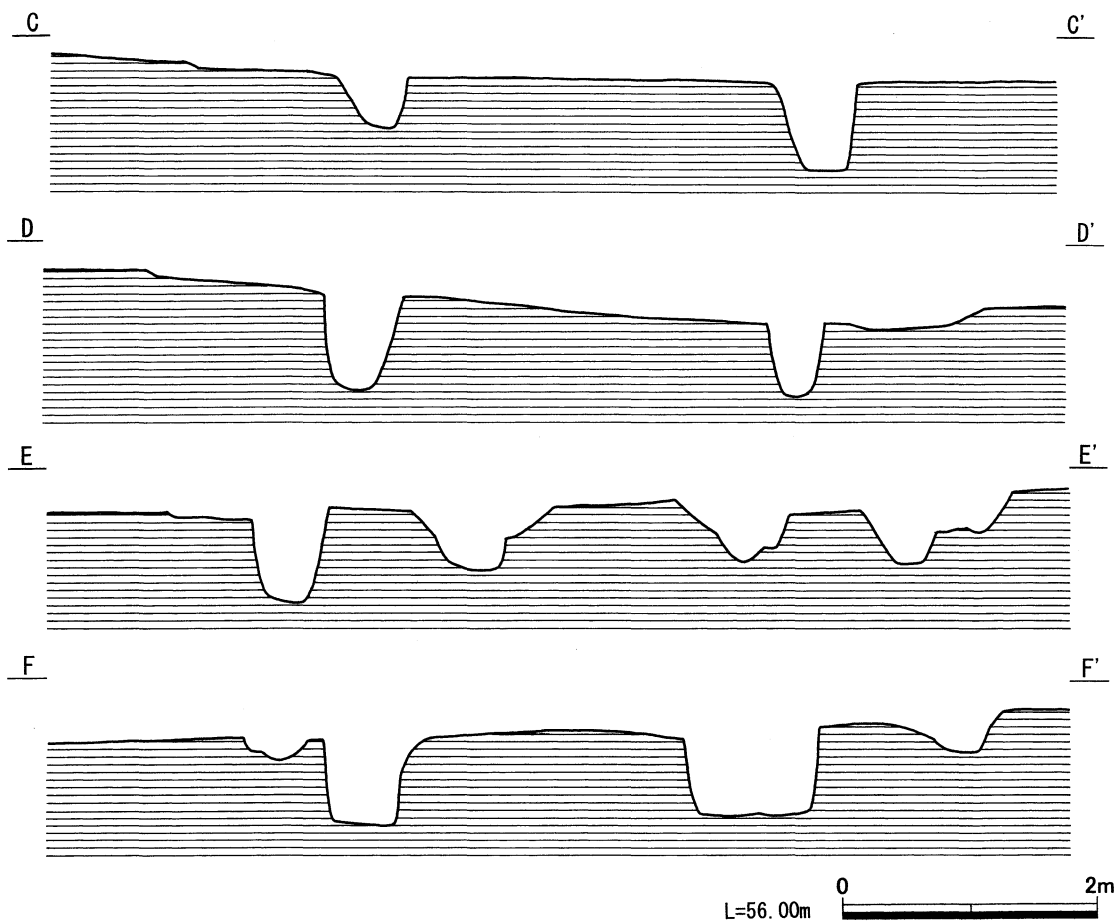
- 1 黑色土      3 黑褐色土      5 黑褐色土      7 黄褐色土      9 黑色土
- 2 黑色土      4 黑褐色土      6 黄褐色土      8 黑褐色土



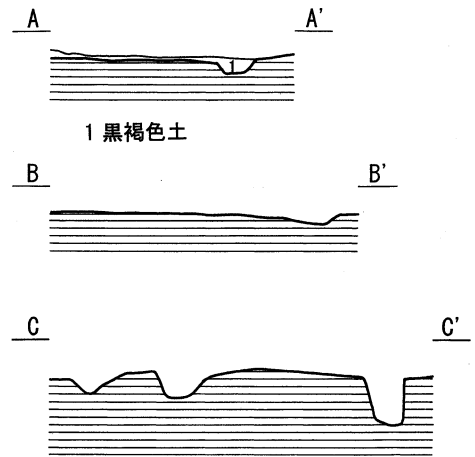
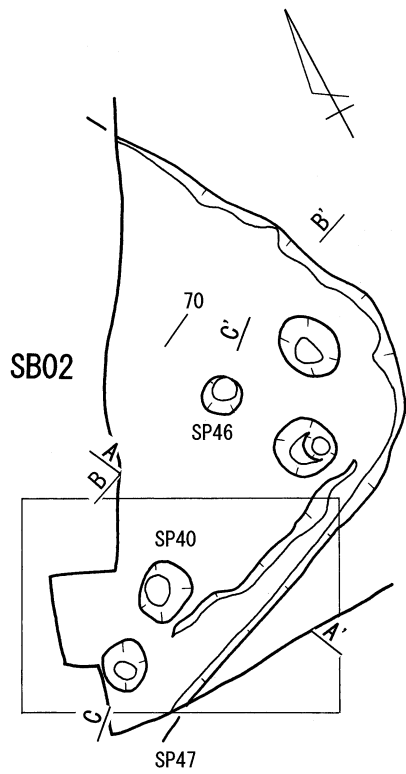
- 1 黑色土      4 黑褐色土      7 黑褐色土      10 黑褐色土      12 黑褐色土
- 2 黑褐色土      5 黑褐色土      8 黑色土      11 黑褐色土      13 黄褐色土
- 3 黑褐色土      6 黑褐色土      9 黑褐色土

L=56.00m 0  2m

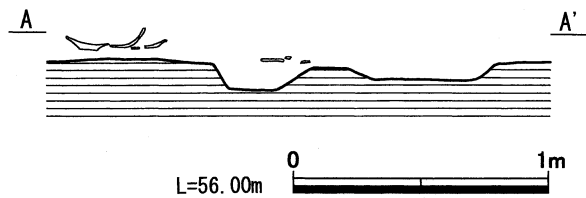
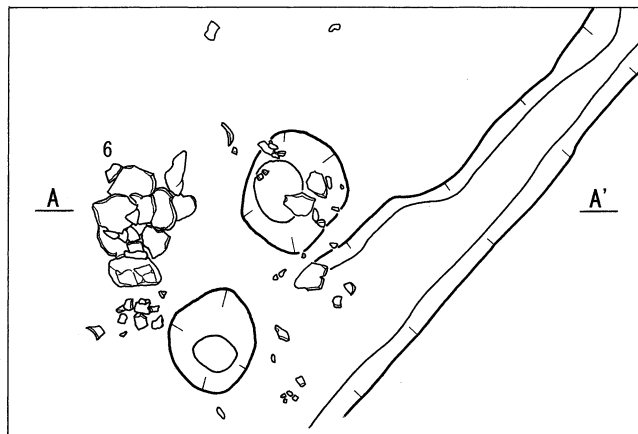
第25图 SB01·SD02实测图



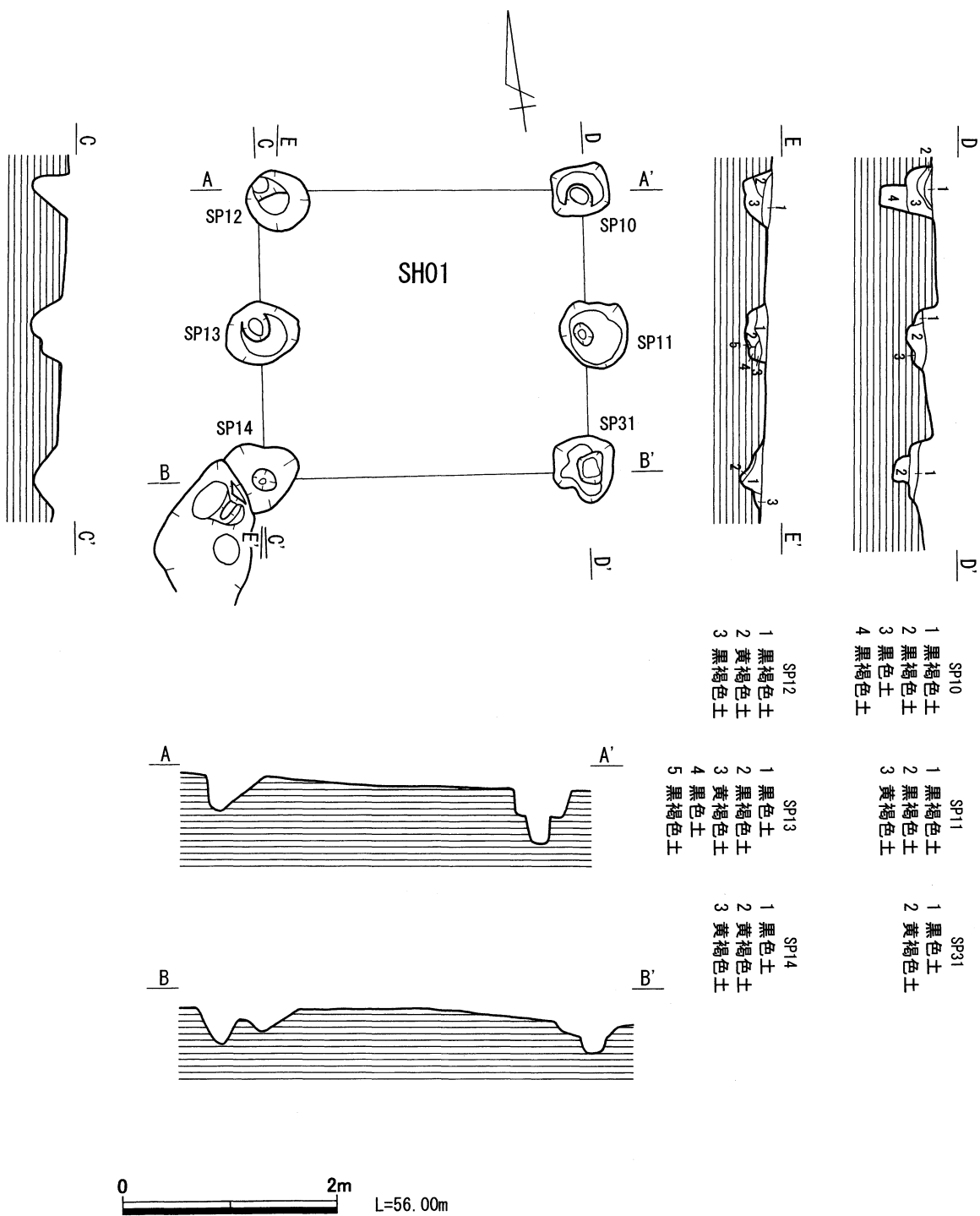
第26図 SB01エレベーション図、SD04実測図



L=56.00m 0 2m

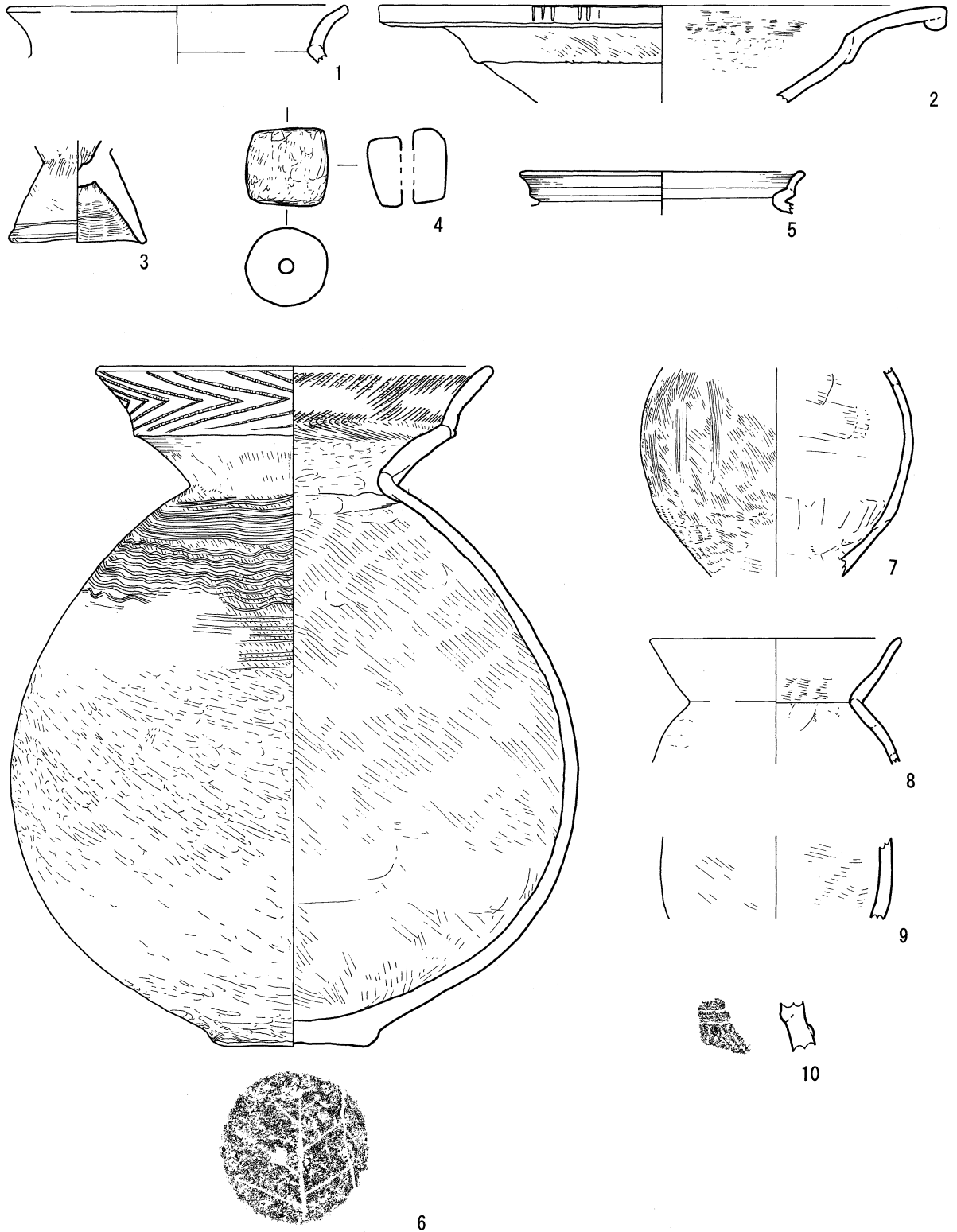


第27図 SB02実測図

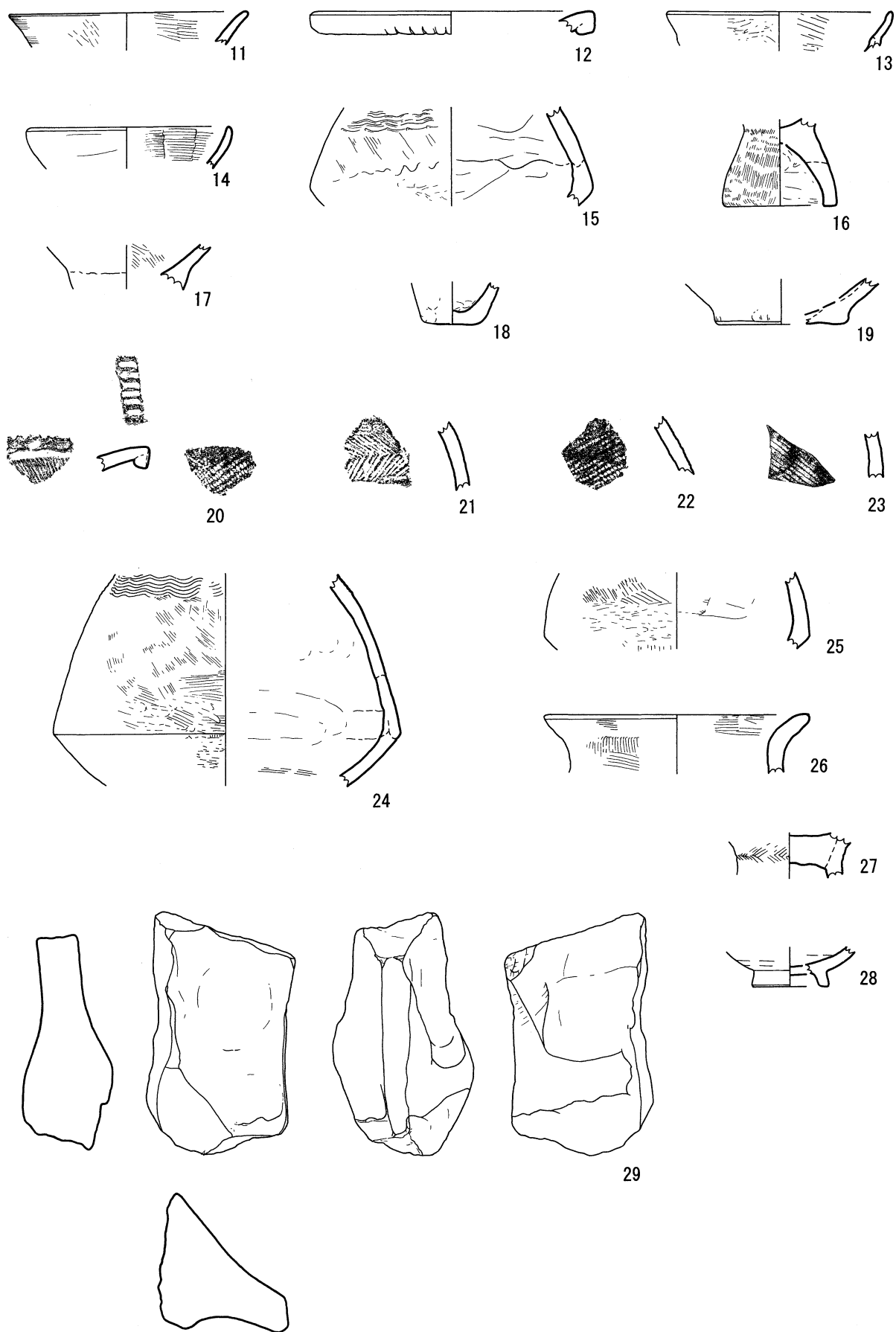


第28図 SH01実測図





第29图 出土遺物実測図(1)



第30図 出土遺物実測図(2)

## 4 まとめ

今回の調査は調査面積も狭く、過去に重機による改植を受けていたことも考慮しなければならないが、検出された遺構も少なく遺跡のあり方としては濃密でなく散財的状况を示している。遺跡の動態としては、周辺域同様、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落として認知でき、その散在的状况から、集落の中心域ではなく周辺域としての様相を示すものと考えられる。

そのような中でも特筆すべき成果として、古墳時代前期の竪穴住居跡SB02に伴う柳ヶ壺型土器の出土があげられる。検出された竪穴住居跡は全体の1/3程であるが、柳ヶ壺型土器は口縁部の一部と同上半部の一部を欠損するものの比較的残存率は高く、竪穴住居跡に伴う土器として間違いなからう。

和田岡原における柳ヶ壺型土器の出土例はこれまでなく、残存率の高さからみても希有な事例と言える。その特徴的な形状に加え胎土と色調が在地ものとは異なることから、西遠江以西からの搬入品と考えられる。西遠江以西の土器、とりわけ柳ヶ壺型土器の盛行地域である三河などからした土器との比較検討を行っていないため、これ以上の言及を避けるが、和田岡原以外の中・東遠江の周辺域での出土事例含め検討していく必要がある。

# 写真図版





吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査遠景（東から）



吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査遠景（西から）







吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査西半部完掘



吉岡下ノ段遺跡第14次発掘調査東半部完掘







吉岡原遺跡第14次発掘調査遠景（南から）



吉岡原遺跡第14次発掘調査完掘（南から）





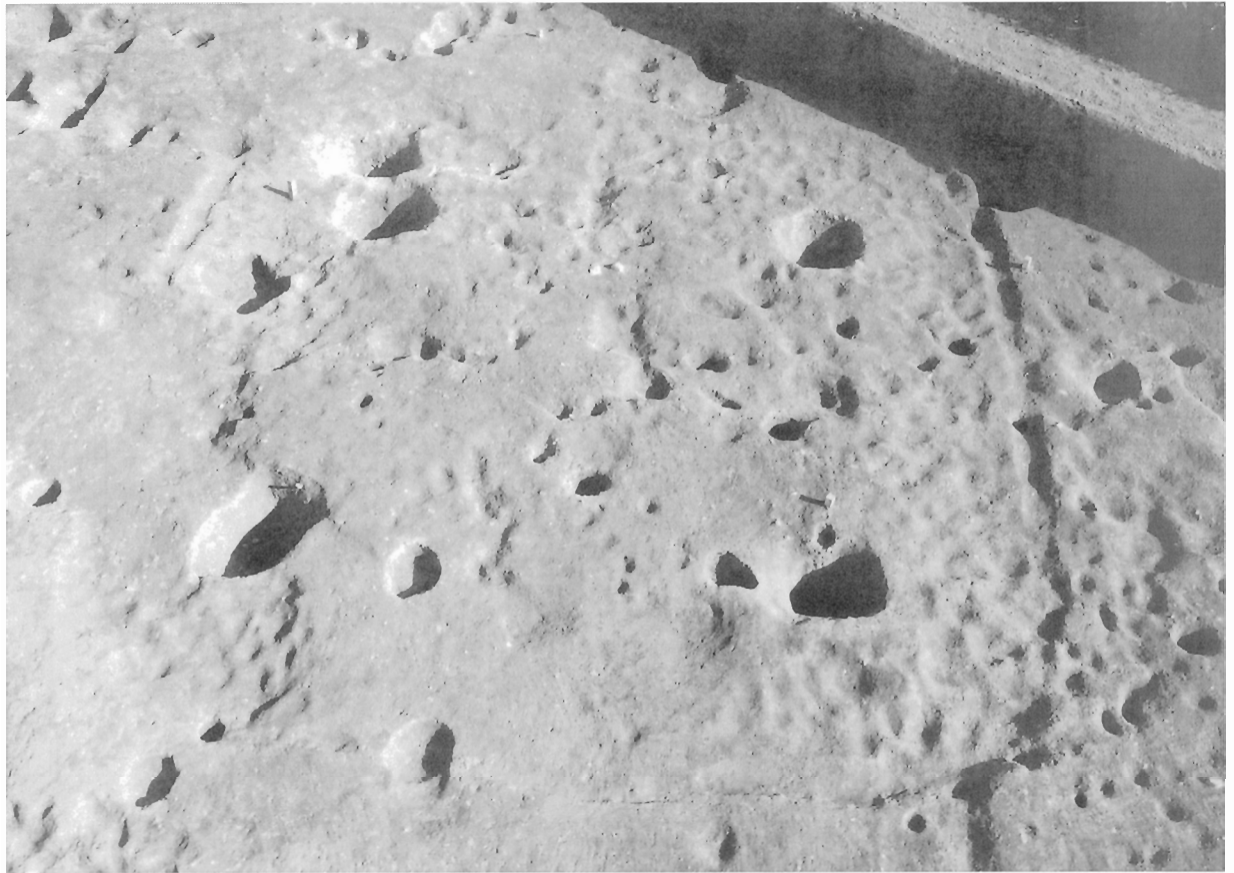


前半 遺構検出状況



SB01床等検出状況（北西から）

図版2



SB01 (南から)



SB04床検出状況 (北から)



SB04 (東から)



SB05 (西から)

図版4



SB06 炉検出状況

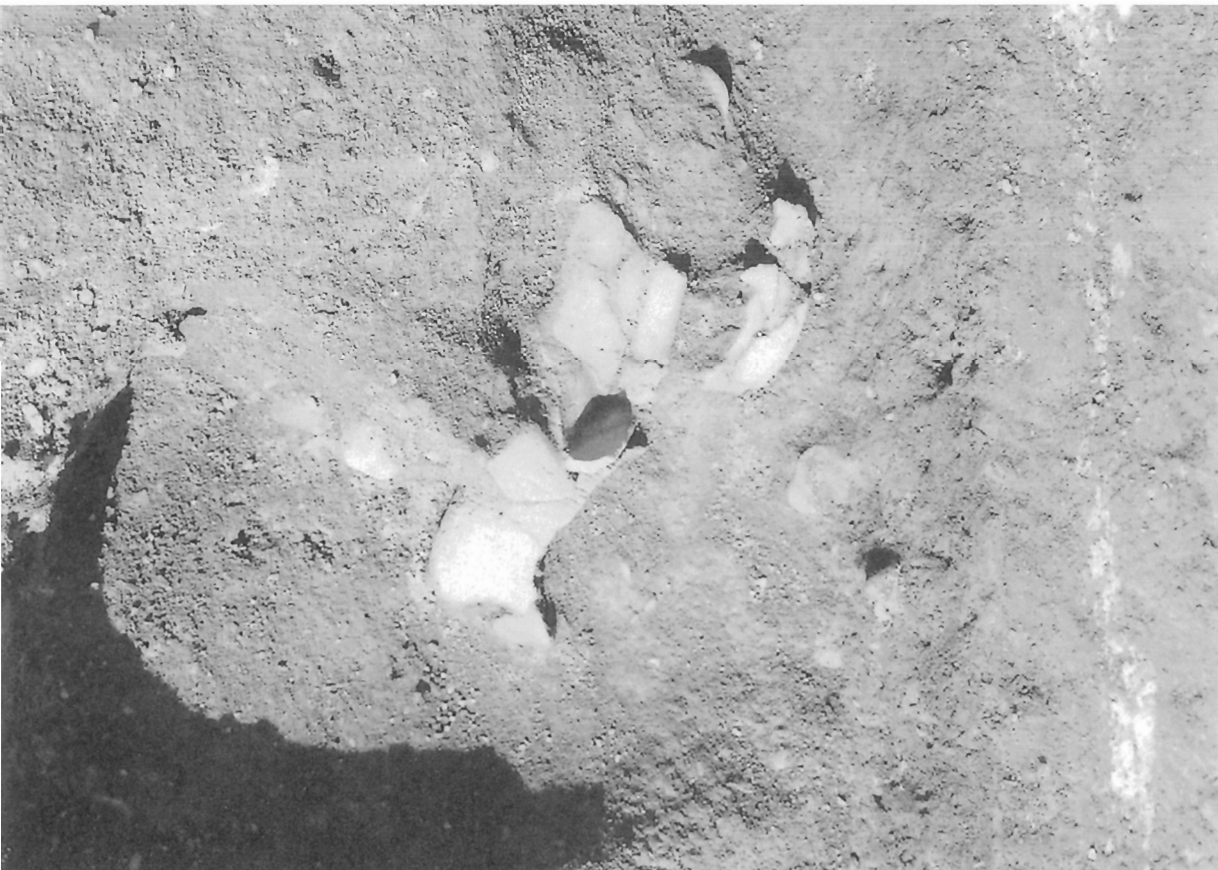


SB07・SF01 (南から)





SB07土器出土状況（上層南から）



SB07土器出土状況（下層南から）



図版6



SB08 (東から)



SB08遺物出土状態

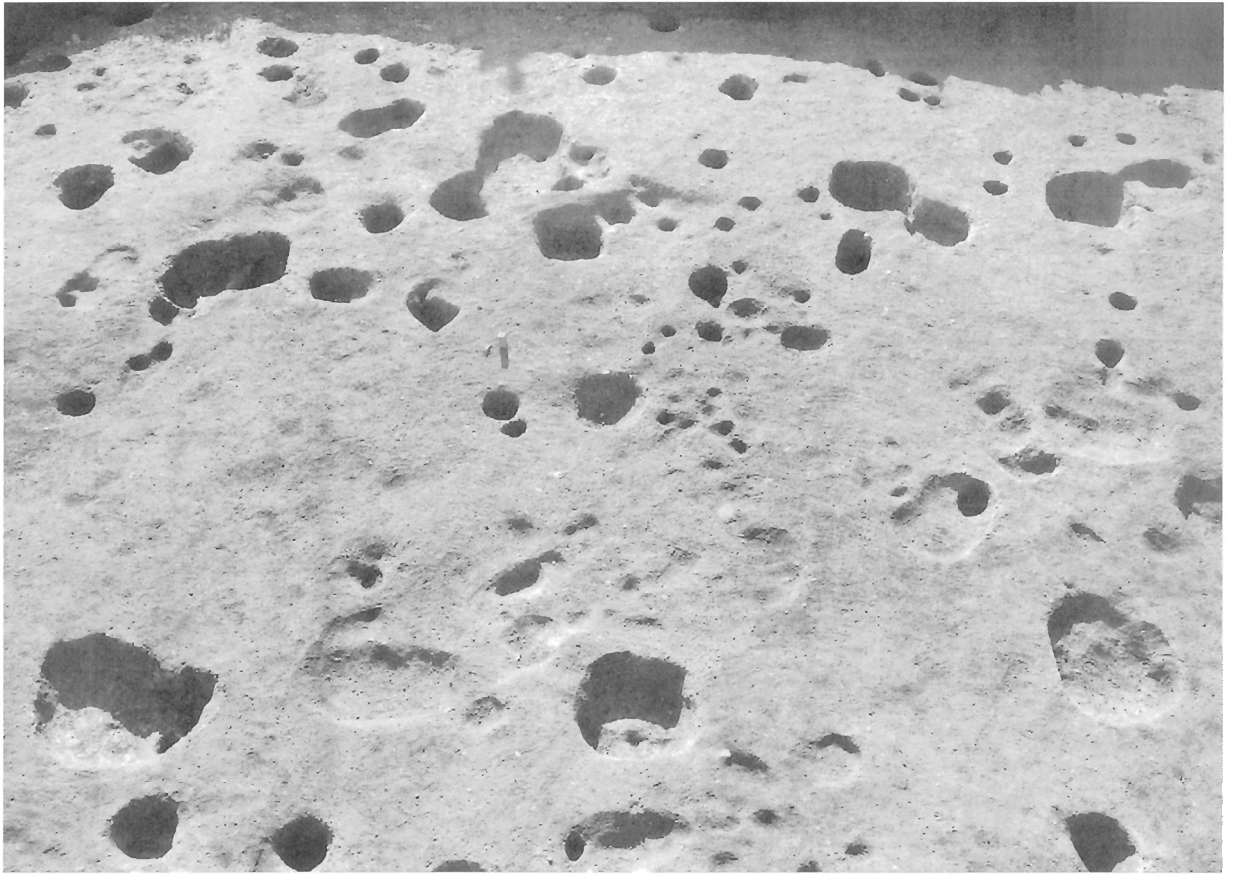


SB08遺物出土状態

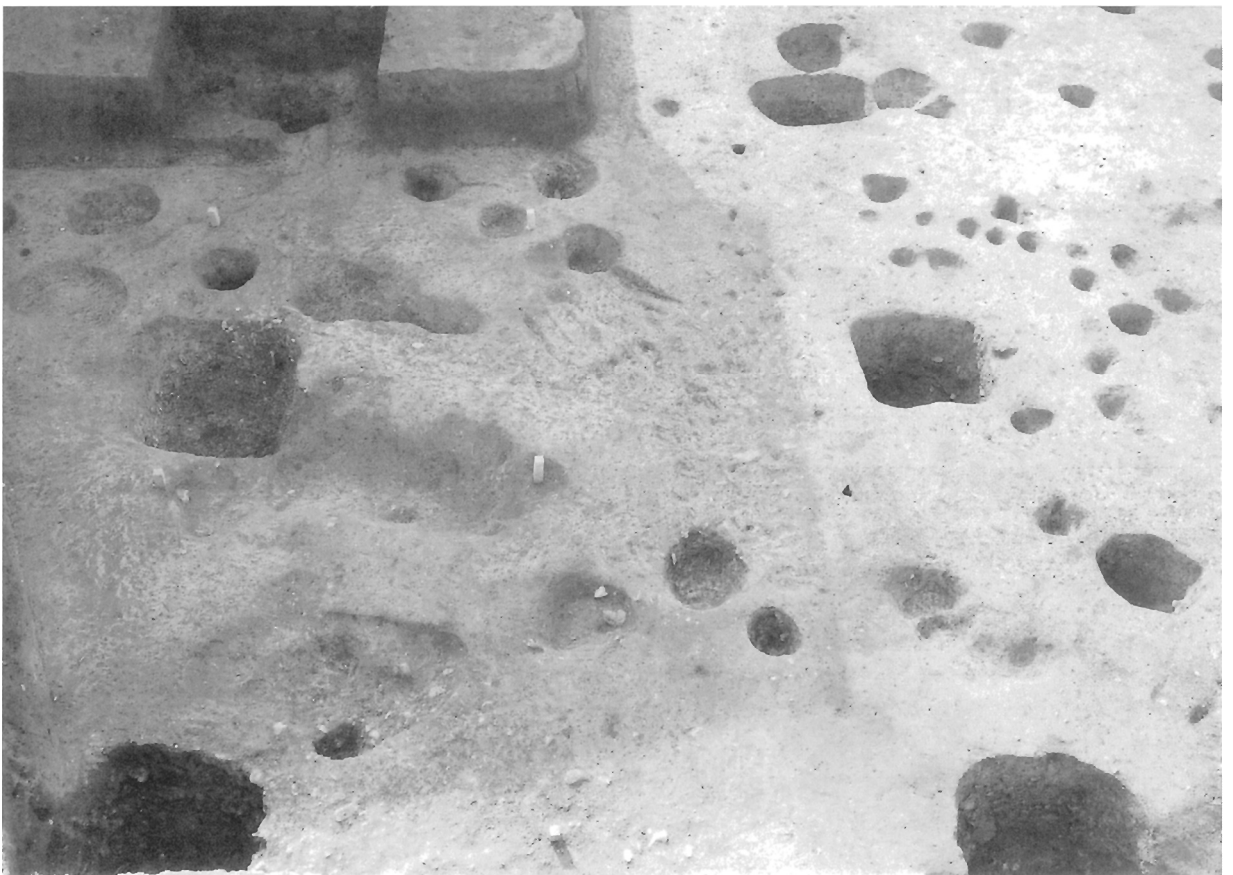


SB08内SP287

図版8



SH01 (東から)



SH02 (北から)





SH02完掘（南西から）



SH02内SP247土層断面（東から）

図版10



SH02内SP250土層断面（北から）



SH02内SP259土層断面（南から）



SH02内SP260土層断面（西から）



SP45遺物出土状態（東から）

図版12



SP104遺物出土状態（東から）



SP224遺物出土状態





SP240遺物出土状態



SP243土器出土状態



図版14



SX04土層断面（東から）



A-2グリッド縄文土器出土状態



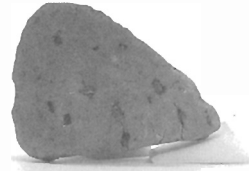
3



4



5



6



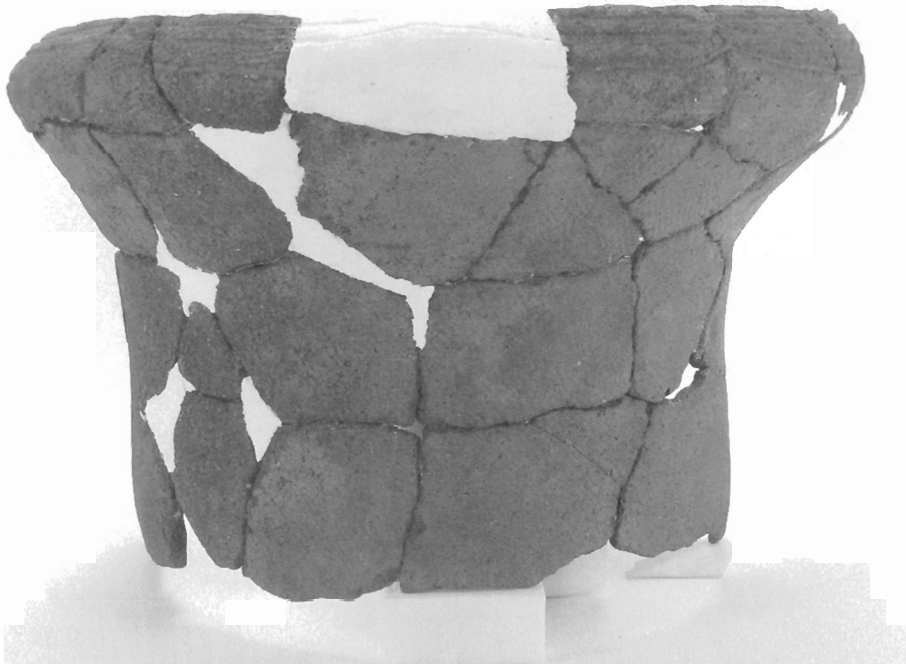
8



11



14

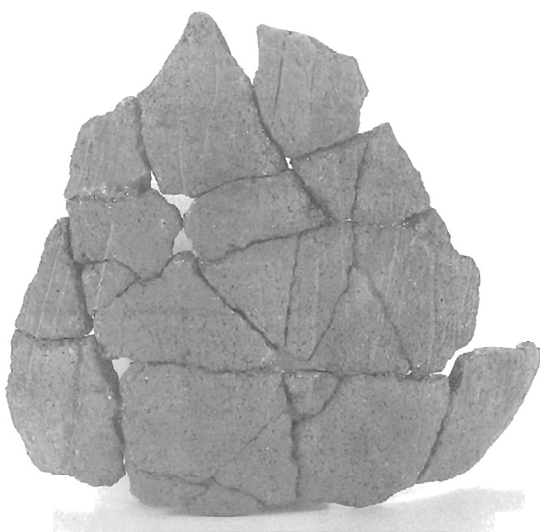


16

图版16



15



15



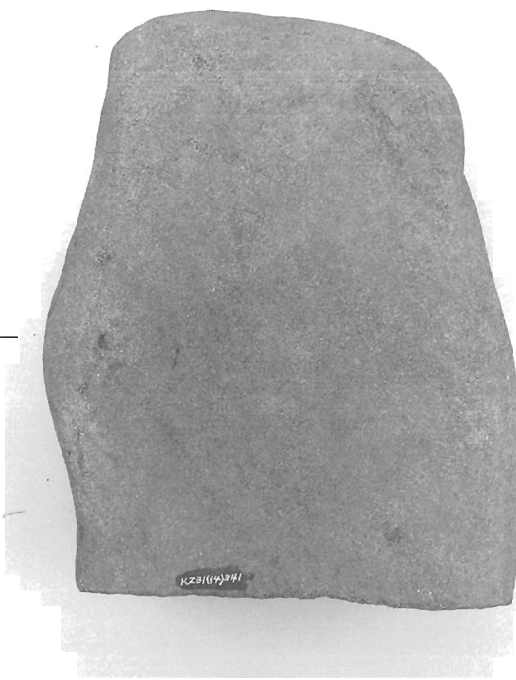
19



22



24



25



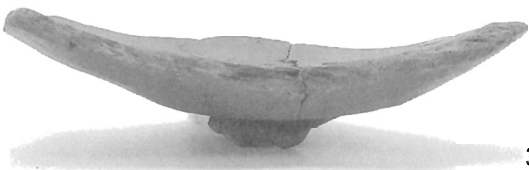
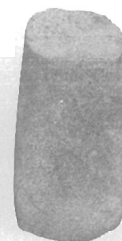
26



27



28



31



32

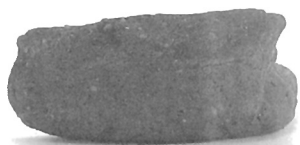
图版18



34



37



40



36



38



41



33



1



2



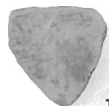
7



10



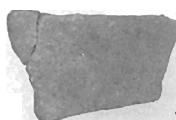
9



12



13



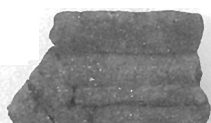
17



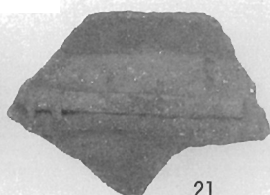
18



23



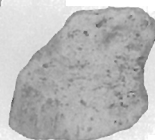
20



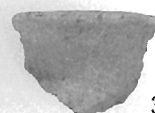
21



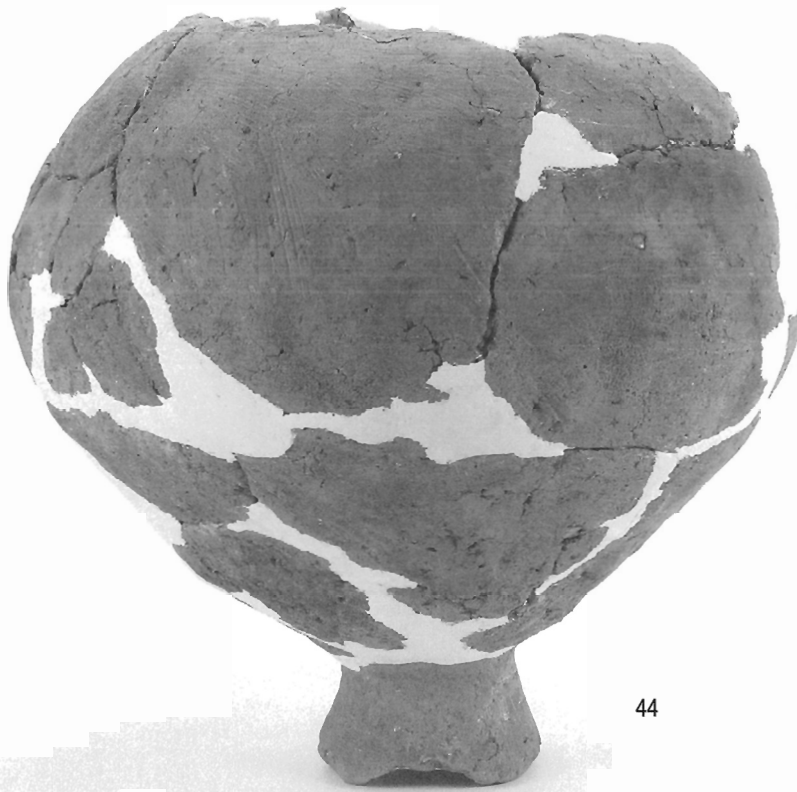
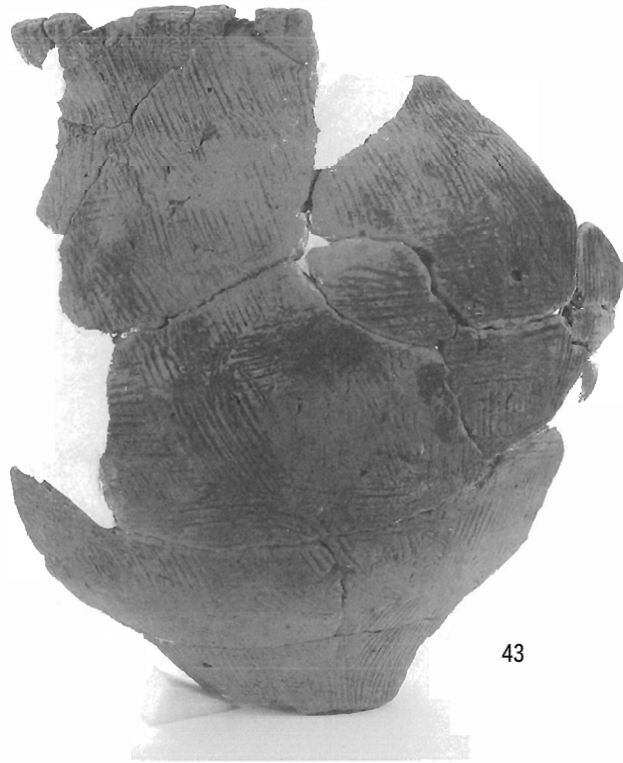
29



30



35



图版20



45



49



50



56



59



57



60



58



62



63



66

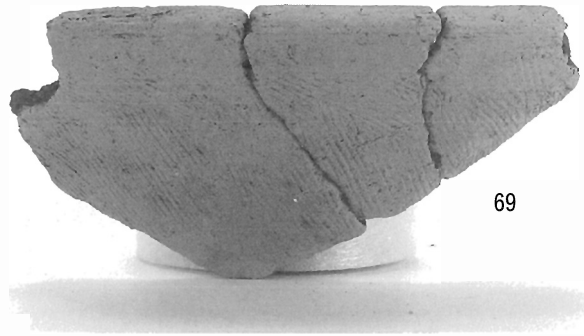




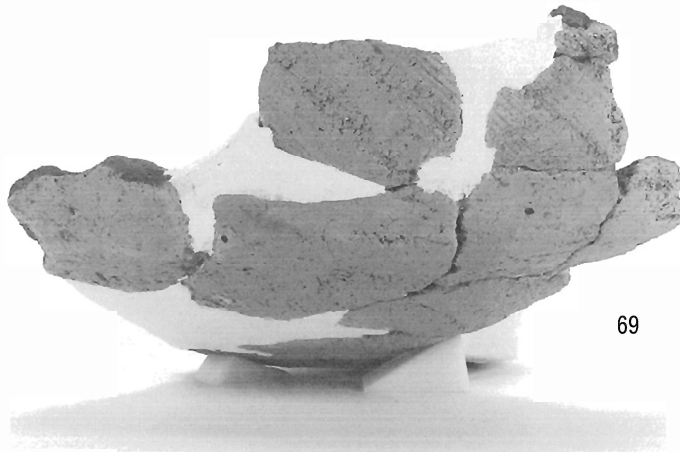
67



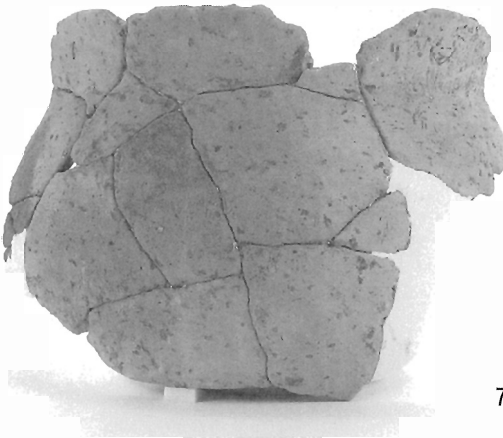
68



69



69

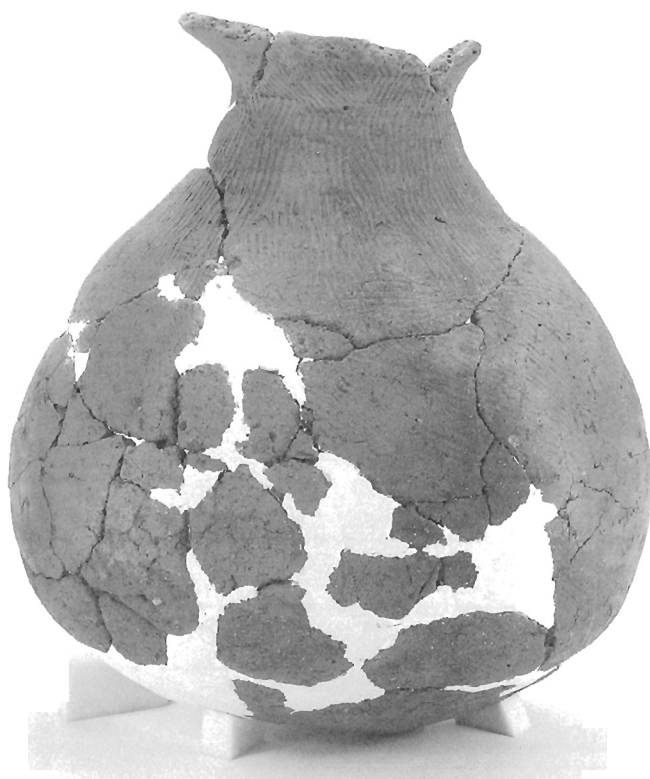


70



74





75



76



78



80



77



79



83



87



88



89



39



42



46



47



48



51



52



53



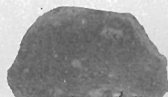
55



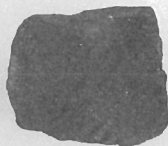
54



61



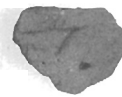
64



65

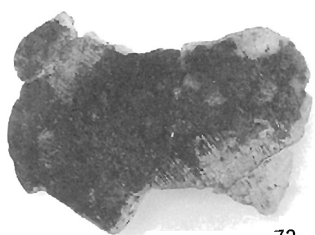


71



72

图版24



73



81



82



84



85



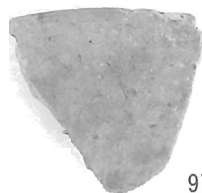
86



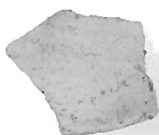
90



92



91



93



95



96



97



100



98



101



113



102



117



119



120



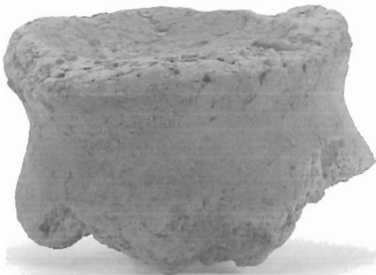
121



122



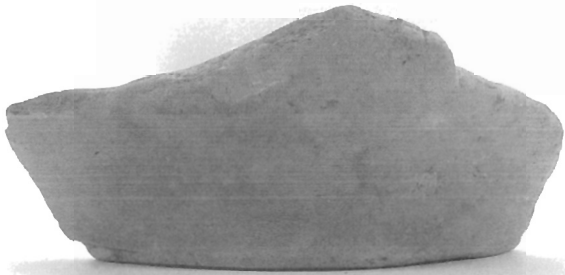
123



124



125



126



132



134



133

图版26



135



136



137



138



140



139



142



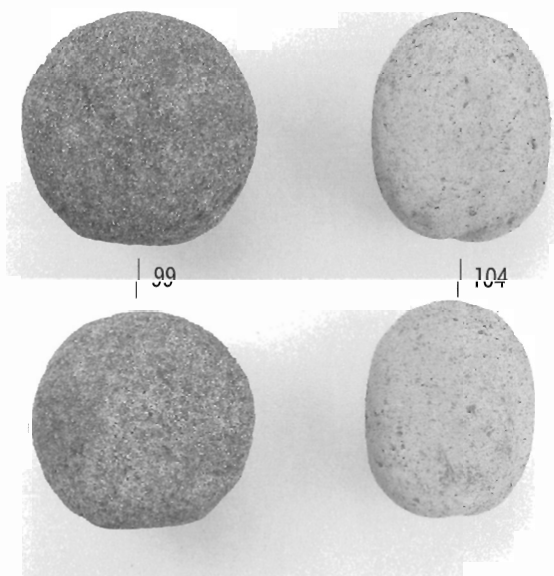
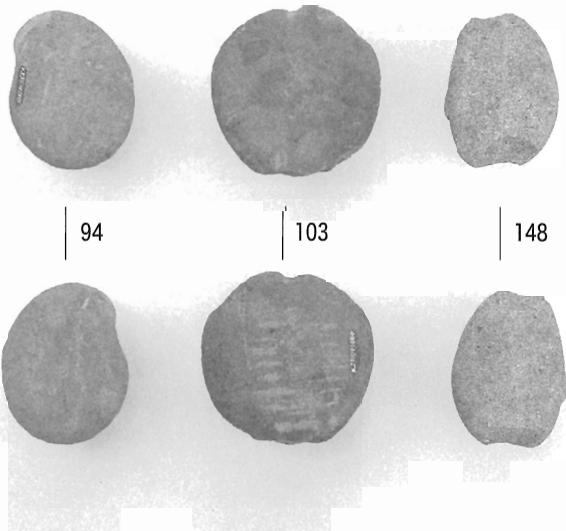
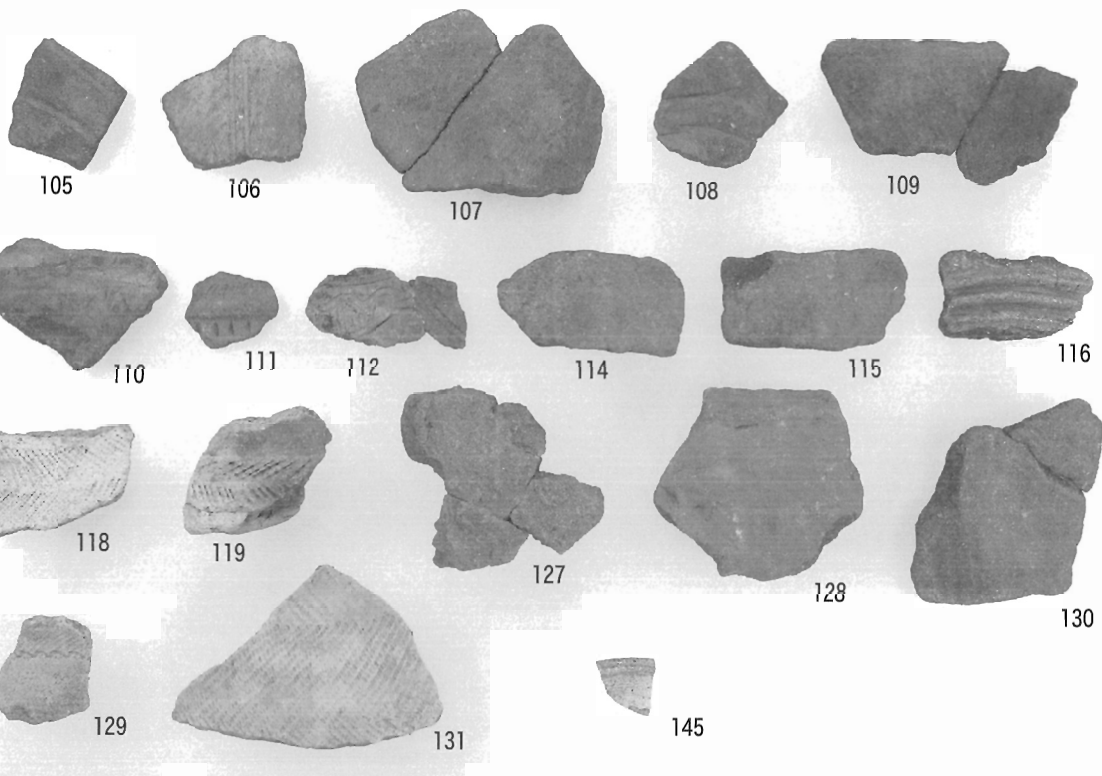
141



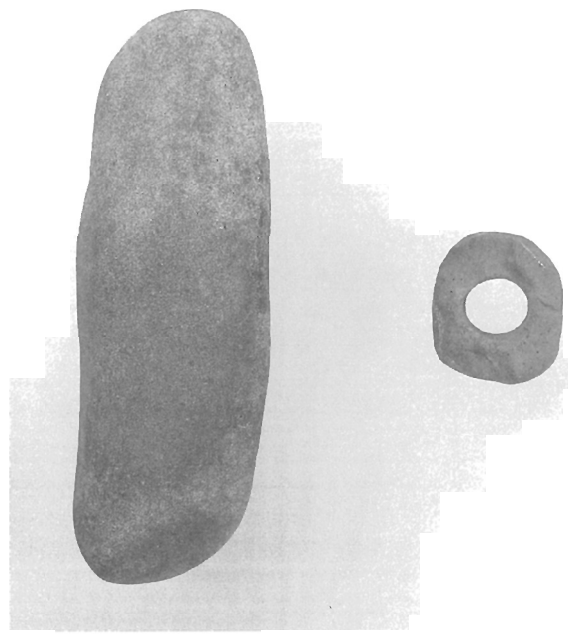
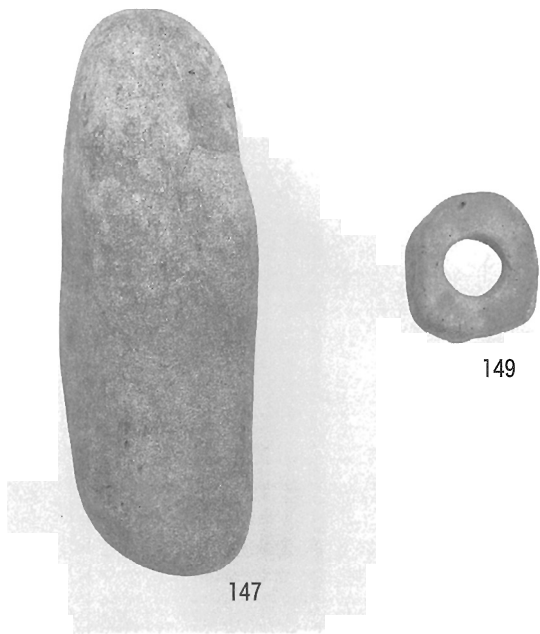
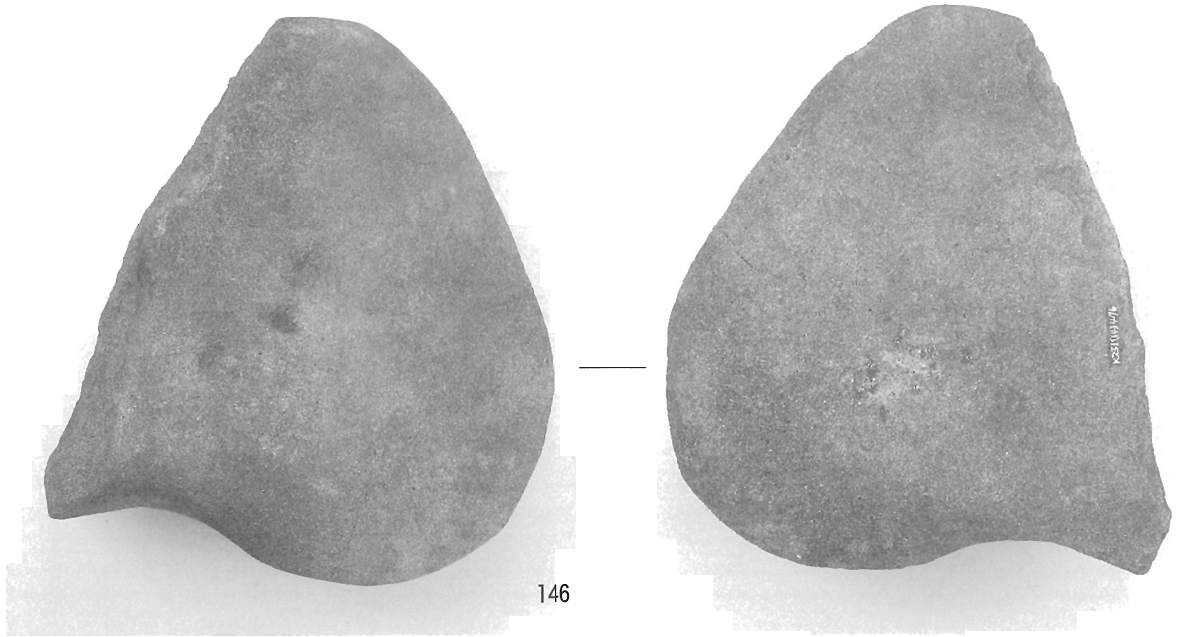
143



144



图版28







作業風景



SB01、SD02 (南から)



図版2



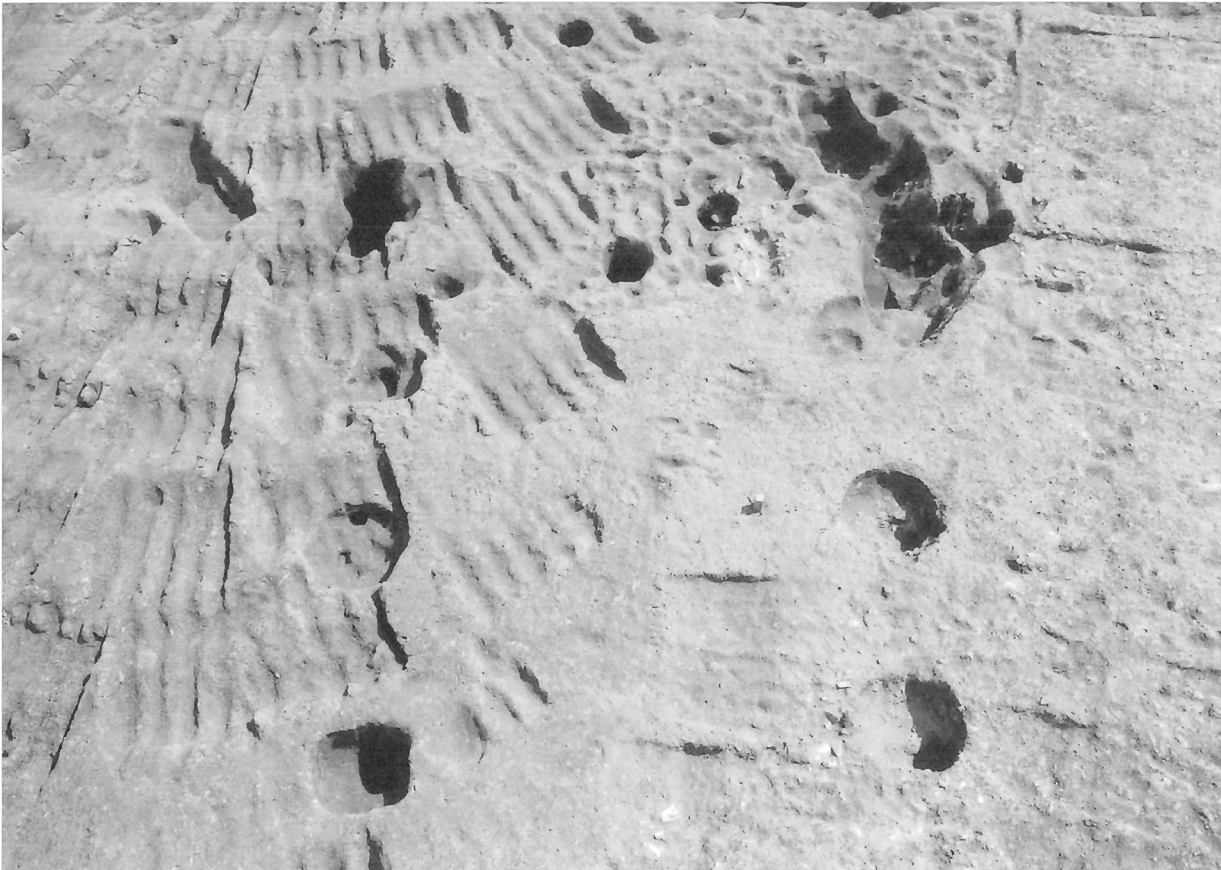
SB02検出状況



SB02 (東から)



SBO2遺物出土状態（西から）



SH01（北から）

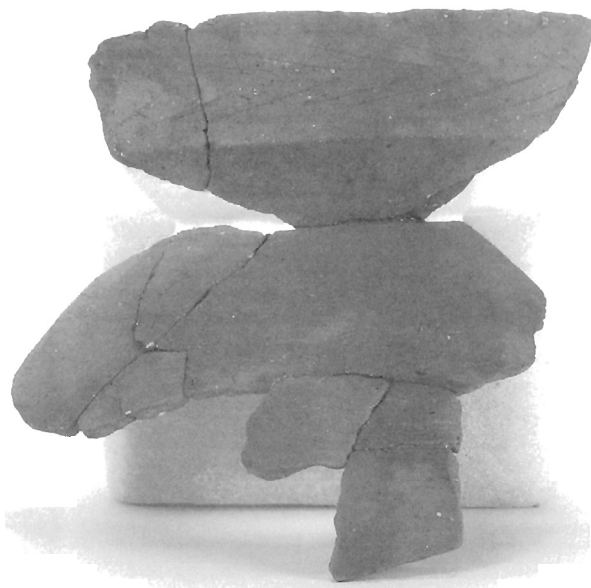
图版4



2



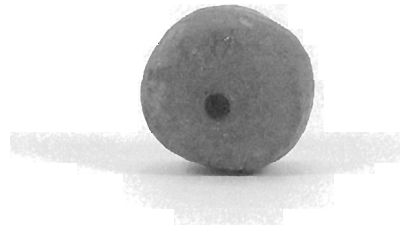
3



6



6



4



7



8



11



12



13



14



15



17



20



21



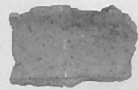
22



23



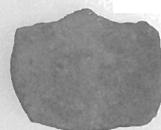
25



1



5



9



10

图版6



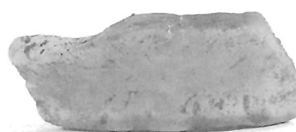
16



18



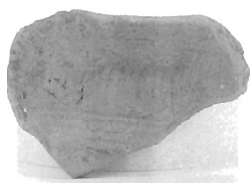
24



19



27



26



28



29

## 報告書抄録

ふりがな	よしかしたのだんいせきだい14じ・よしかばらいせきだい14じはつつちょうさほうこくしょ							
書名	吉岡下ノ段遺跡第14次・吉岡原遺跡第14次発掘調査報告書							
編著者名	夏目不比等・松本一男							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒437-8650 静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1 TEL 0537-21-1158							
発行年月日	平成31年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしかしたのだん 吉岡下ノ段遺跡 (第14次)	しずおかけんかけがわしよしか 静岡県掛川市吉岡	22213	231	34° 47' 49"	137° 57' 04"	2016年7月 ～ 2016年11月	905㎡	茶園の改植
よしかばら 吉岡原遺跡 (第14次)	しずおかけんかけがわしよしか 静岡県掛川市吉岡		234	34° 47' 39"	137° 56' 50"	2017年4月 ～ 2017年6月	300㎡	個人住宅の 建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
吉岡下ノ段遺跡 (第14次)	集落跡	縄文時代中期	住居跡		土器、石器		当該地域においては、未だ資料の少ない縄文時代中期の土器が比較的遺存状態もよくまとまって出土した。	
		弥生時代後期 古墳時代前期	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 小穴		土器			
吉岡原遺跡 (第14次)	集落跡	弥生時代後期 古墳時代前期	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 小穴		土器			
		古墳時代後期			須恵器			
要約	<p>吉岡下ノ段遺跡、吉岡原遺跡は、原野谷川西岸の河岸段丘上に展開する集落跡。          吉岡下ノ段遺跡第14次調査では、縄文時代中期の住居跡、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・小穴が発見された。          吉岡原遺跡第14次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡、掘立柱建物跡、小穴が発見された。</p>							

吉岡下ノ段遺跡第14次・吉岡原遺跡第14次  
発掘調査報告書

平成31年3月29日発行

編集・発行 掛川市教育委員会 社会教育課 文化財係  
〒437-8650  
静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1  
TEL 0537-21-1158  
印刷 松本印刷株式会社  
静岡県袋井市新屋4-5-2  
TEL 0538-43-6300









Vertical line on the left side of the page.